

○ 派遣隊員手記

東日本大震災支援活動に参加して（H23.3.14～3.19）

肝付町先遣隊 永野 秀明

※3月15日：火曜日

災害支援の先遣隊として救援物資と給水車を運ぶために前日の夕方に志布志港から「さんふらわあ」で大阪南港へ。そこから陸路で一気到大船渡入りを考えていたが想像以上に遠かった。その日は新潟泊り。ちなみに災害支援の許可証保有車は高速道路は無料。ただ新潟市内でさえもガソリンは売り切れで、一般車は在庫があっても10リットルまでの制限あり。災害支援車は優先してくれるものの売り切れならどうしようもない。翌朝5時に行って並んだ末にやっと給油ができた。

新潟は雪のため高速道路はチェーン規制中。下船後からずっとチェーンを探すも全く在庫なし。やむを得ず2台の車のタイヤ全部を雪道用のスタッドレスに交換した。ほかにもガソリンの携行缶や現地で使用するカセットコンロもあらゆるホームセンターで探したが全く見つからなかった。ちなみに今回の災害で家を失った被災者が宿泊しているため、新潟のホテルは軒並み満室。後方支援してくれる役場が20数軒目でやっと確保してくれたホテルも計画停電の予定になっており、大震災の影響が東北のみならず、ここまで広範囲に及んでいるのには驚いた。支援参加は突然、本日決まったこととはいえ、必要なものは現地調達すればいいという考えは甘かった。準備不足で飛び出してきたことを痛感。

※3月16日：水曜日

前夜から積もった雪で慣れない雪道運転に悩まされ、また、福島第一原発の放射能事故の影響を避けるため、新潟から日本海を北上し、秋田から山越えで岩手県に入り、やっと午後9時半に大船渡に着いた。

大船渡市からほどなく案内された宿泊先は畳があり、車の中で寝ること考えていたので、足を伸ばせるのは助かった。ただ、外の気温は-3度。室内も+2度しかなく、厚いジャンパーを上下着込んで寝袋にくるまり毛布をかけても非常に寒い。もちろん停電、断水。風呂は入れないし、歯も磨けない。トイレは100m離れた所にある仮設トイレまで寒期中歩いていかなければならない。夜中12時頃、鋭い余震に飛び起きた。まだまだ余震は続いている。あまりの大きさに自家発電のある隣の警察署の電気が一斉についた。

※3月17日：木曜日

実質的な支援活動初日。あたりは雪で銀世界。外が明るくなると宿舎のすぐ下まで来た津波の被害状況が見える。地震だけではなく、津波のため家はのきなみ全半壊、車が何台も逆さになっている。新聞やテレビで見た光景が目の前に広がっており、そのすさまじさに息を飲む。

朝一番に大船渡市長を訪問し、可能な限りの支援と今後の移住受け入れの用意があることを伝える。市役所内も職員が1人行方不明であり、また家族の安否が分からない職員もいるとのこと。

本日は給水組と物資受入組に分かれて活動。給水組は避難所をまわり、遠方の鹿児島からということもあり、被災者からとても感謝された。物資受入組は全国から山のように届く救援物資をトラックから下ろし、品物ごとに仕訳するのが仕事。ひっきりなしにトラックが到着し大忙し。重たい米や水を何百回も運び、腕はパンパン。中には避難所で暮らす小さな子どもたちのためにおもちゃも届く。また、手紙が添えられているものもあり、「じしんでおうちがながされるのを見てとてもかなしいです。でもじしんにまけないでみんなでがんばってください」と、ほとんどひらがなだけの福井県の少女からの手紙が涙を誘う。

善意は全国から届けられるが、救援物資にはかたよりのある。米や水などの食料品は今後も必要だと思われるが、

毛布、懐中電灯など在庫が山のようにあり、救援物資を送る際には、被災地の自治体に問い合わせ、何が不足しているのか確認して送ったほうが善意が無駄にならない。また、例えば衣類は新品でも古着でも大きな袋にまとめて入れてあると袋から全部出して男女別、大人子供別、夏冬物別に分けるのに時間がかかる。最初に仕分けてから送ってくれると非常に助かる。

夕方6時過ぎに宿舎に帰り、停電なので台風の夜みたいに懐中電灯の下、カップラーメンで夕食。何もすることがないので今夜もまた8時半には完全フル装備で寝袋へ。風呂に入りたいが、家を失って帰るところもない被災者のことを考えると今は我慢。

※3月18日：金曜日

大船渡市内は死者が約200人。また60箇所ある避難所には約8500人が身を寄せている。決定的に不足しているのは燃料。ガソリンのほか、被災者に深刻な影響を与えているのが灯油不足。広い体育館でわずかなストーブと毛布の重ね着で寒さをしのいでいる。地震発生後、高速道路でタンクローリーが事故爆発しないように災害支援車と緊急物資の搬入車しか通行を許可しなかったことが影響している。1日でも早い仮設住宅の建設が望まれる。

本日は給水活動に参加。避難所ではなく断水している住宅地で行う。ペットボトルやバケツなど様々な容器を持った人が集まる。現在は近くの川の水を汲んで洗濯したり、煮沸して飲み水にしているので大変喜ばれた。しかし、高齢者が多く、大きなバケツをヨロヨロしながら運んでおり、ここで水を運ぶボランティアがいればなお助かるのになあと人手不足を痛感する。なかには、自分たちの食べる分も不足しているのに、パンやおにぎり、そして昼食にと暖かいうどんを作ってくださいたり、またわざわざ鹿児島から来て風邪ひいて帰ってもらったら申し訳ないとカイロを差し入れしてくださる人もいて、その優しい気持ちに逆にこちらが励まされる。

今回はわずかな日数しか手伝いができなかったが、現地は救援物資は集まるものの、人手が不足している。今後は家の倒壊は免れたものの、地震で傷んだ家を自分で片付けられない高齢者の手伝いなどできることは多い。地震直後だけでなく、長い期間で支援を考える必要があるのではと思う。

今、全世界の人々が日本の支援のために立ち上がってくれている。涙が出るほどありがたい。過去の歴史や領土問題などで時々ぎくしゃくする韓国や中国、ロシアからも支援の輪が広がっている。日本のために祈ってくれている。ひるがえってスマトラやハイチなどで起こった災害の時にほとんど人ごとだと思っていた自分が恥ずかしい。今後、もし世界で大災害が起こったときにはできる支援をしていきたいと思う。被災者の皆さんに少しでも笑顔が戻るように。



雪道をかき分けて大船渡に到着しました

大船渡市へ先遣隊として、3月14日（月）、肝付町を午後4時に給水車での出発となり、志布志港から「さんふらわあ」で1泊し、15日（火）朝8時に大阪南港へ着き、高速道路を利用し、岩手県大船市へ向かいました。

向かう途中、滋賀県で食料や必要な品物等を購入しているときに1人の男性が給水車を見て被災地へ行かれるのでしたら米を1俵届けてくださいと言われましたが、玄米ということで精米ができるかわからない状態ですので男性と話し合い断念しました。日本全体が被災地を心配され、心の温まる言葉や思いが伝わってきました。

滋賀県を出発し、新潟県へ入ると雪や福島第一原発の放射能の影響等で新潟県に1泊することになりました。16日（水）は福島第一原発放射能地帯を避け、日本海側を北上し、秋田県側から大船渡市へ入り、夜9時頃到着し、市役所へ到着の報告に行き、宿舎の保健介護センターへ行きました。

朝、宿舎の裏を見に行くと報道で映されている姿を目の当たりにし愕然とし、復興に何年かかるかあまりのショックで声も出ませんでした。

そして、大船渡市の市長室へあいさつに行きその後、救援物資班と給水活動班へと別れ、私たち2人は給水車で給水活動班として避難所の大船渡北小学校へ。2000ℓと1000ℓの2個の給水タンクへ飲料水を入れ、市役所近くの水源地より給水車への補給を行い、上山町内会のタケノ文具店駐車場で給水活動を行う中、町内会長さんをはじめ近くの方々が手伝ってください、高齢者の方へは家まで水を運んだり、ポリ容器への給水を手伝ったりと私たち給水班にとってはとても心強く感じました。又、高齢者の方が鹿児島ナンバーを初めて見た。本当に鹿児島から来たと言われる方や、鹿児島も新燃岳の爆発で大変な時にと気遣いをされる方がいらっしゃいました。その他に、新沼商店前、三陸町綾里国保綾里診療所、リアスホール等、水が不足している場所の巡回をしました。中でも新沼商店前で台車に大きなポリバケツを積んで私たちの前を通り過ぎて行かれ、帰ってくる時はポリバケツ一杯の水を入れていたので、どこから汲んできたのですかと聞くと洗濯用の水だから川の水で十分だといわれ、飲み水は少しでも多くの方へ分けられるようにと皆さん一人ひとりが水の大切さ、そして助け合いの気持ちを持っていたように思えました。まだまだ、これからも大変だと思いますが、大船渡市の日も早い復興を心よりお祈りいたします。



初期の宿泊施設、大船渡市介護保健センター内
懐中電灯の下でカセットコンロで暖をとりました

3月11日午後、東北地方を中心に強い地震が立て続けに起き、その後大きな津波が沿岸部を襲った。痛ましい被災情報は夜を迎えても続いた。巨大津波は大きな船やトラック、家屋、田畑そしてそこに暮らす人々を飲み込んだ。台風や大雨での浸水・土砂災害しか体験したことのない自分にとっては、想像を絶する光景だった。

3月14日午前、銀河連邦共和国で締結している災害時の相互応援協定に基づき「先遣隊」として任命され、とにかく行け！ということで夕方、数日分の着替えと不安・希望を持って5名で「いざ！大船渡」へ。

使命は3つ、1つ目は大船渡市と連絡が全く取れない状態であるため「正確な情報収集と肝付町は全ての事に対応できることを市長に申し上げること」、2つ目は「救援物資の搬入」、3つ目はライフラインが寸断され、飲料水不足を補うため「給水車を届ける」ことでした。

翌朝、さんふらわあを下船し、陸路で大船渡入りを目指す。東京電力の福島原発事故を回避するため、秋田経由で慣れない雪道運転（途中、橋の上でスリップし、大事故になるところでした）に悩まされながらも3月16日午後9時半に大船渡市役所に到着。宿泊先に案内されるが、停電のため状況が全く分からずそのまま就寝したが、夜中の余震に飛び起き、寒さも厳しく寝れなかった。

3月17日活動初日。街全体が極寒の焼け野原のようで、家は全半壊、車が何台も逆さになっていて、新聞やTVで見た光景が目の前にあり、すさまじさにただ息を飲むだけであった。市長を訪問後、救援物資の仕分けと給水に分かれ活動。自分は市役所の地下で全国から届く物資の受け入れと仕分けに2日間従事した。

そこで培ったノウハウ「救援物資のルール」（受け入れ場所がスムーズに動ける）

- ① 衣類を送る場合は細かく分ける。（男女別、サイズ別、季節別等々）
- ② 米・水は絶対に多すぎることはない。倉庫等の確保。
- ③ なんでも送らない。不必要な物が結構場所を取ってしまう。
- ④ 被災後すぐは、受け入れ班・仕分班にボランティアの方々を配置する。

今回は、現地に入ることが第一の目的の2日間でしたが、職員の中には津波で家を失ったり、家族の安否も分からないのに気丈に職務に専念されている方もいました。

もし肝付町が同様に被災したらと考えると・・・災害はいつ、どこで起こるかわかりません。正に明日は我が身。全国の方々の善意、ボランティアの方々、各自治体の取り組み等を見聞きする度に、その力を肌で感じ、何をすべきかを考えさせられました。

市内の被災していない小中学校は避難所となり、被災者が避難生活を送っていますが、大船渡を元気にするのは「子どもたちの笑顔」です。幸いにも大船渡では児童生徒は全員無事だったそうです。

大船渡市は今、ゼロから全てを立ち上げようとしています。みんなで何をすべきかを考えなくてはならないし、どんな形でもいいのでまず行くべきです。肌で感じれば支援の幅も広がると思います。

肝付町と大船渡市が今後も支援でつながり合う色々な「絆」を大事にしていきたい。



給水車を大船渡まで運びました

私は、3月14日から19日まで先遣隊5名のうちの1人として支援業務にあたりました。

内之浦町の頃から平成21年度まで6年間銀河連邦交流の担当をしたことから、会議やイベント、物産交流等で大船渡市の知人もでき、現地にも訪問したことがあるため、地震発生の11日（金）から土日にかけてはテレビで悲惨な状況を見るたびに、知人の安否への不安と何とも言えない残念な気持ちになりました。

14日に派遣の打診をいただいたときは、正直大船渡を支援するという気持ちよりも知人の安否を知りたい気持ちが強く出発しました。フェリーで関西に入り、上越、東北と現地に近づくにつれて、交通・給油規制や販売物資の不足、自衛隊や災害派遣車両の多さなど緊迫の度合いが強まり、車の中でも気が抜けない状況でした。

16日の21時ごろようやく大船渡市に到着し、途中いろんなハプニング等あったことから、まずは無事着くことができたという安堵感がありました。しかし、市役所に着くと庁舎は自家発電でこうこうと明かりがついており、寒いなか外を右往左往している職員の姿を見ると再び緊迫感に包まれました。そして翌日の朝、町の状況を見て改めて被害の大きさを痛感しました。

私は現地での実働は2日間で、2日とも荷物の仕分けであったことから、あまり被災者と話す機会はありませんでしたが、役所の中でも「無事だったか！」とか「〇〇は駄目だった」など現実的な声が聞こえてくると、いかに遠路鹿児島から来ているとはいえ、何も被害のない自分は顔を上げるのも辛い状況でした。それに引き換え大船渡市の職員は、自らも被災していたり、家族が見つからない方もいましたが、疲れを表面に見せず市民に対し献身的に接している姿や愚痴も言わず黙々と作業している姿には圧倒させられました。また、被災して1週間もたたないのに役割分担が明確で、日々変わる状況に臨機応変に対応できるところは日頃の連携力の賜物であると感じました。

市の職員によると大船渡市がある三陸地区は過去数回大きな津波の被害を受けており、地震の際の津波対策と住民の津波に対する意識は全国のほかの地区に比べても高いということですが、それでもここまで多くの方が犠牲になったのは今回の津波が予想を上回る大きさであったということでした。

これまで銀河連邦交流は事業に携わった人、参加した人のみが知るだけで、県内、町内を含めてここまで注目されたことは無かったと思います。一時期の友好都市ブームが過ぎ、自治体の予算削減に伴う都市間交流が少なくなっていく中、旧宇宙科学研究所の施設がある縁で始まった銀河連邦共和国も平成19年に迎えた建国20周年で打ち切る話が一部であがっておりました。しかし、当時JAXAの三陸大気球研究所が北海道大樹町に移転した大船渡市が、引き続き銀河連邦に加盟して交流を続けたいと申し出たこともあり、30周年に向けて継続すると決定しました。被災した方々には失礼ですが本当に交流を続けてもらって良かったと思いました。これは他の銀河連邦共和国も同じ意見であると思いますし、今回共同チームを結成した大隅半島の他市町にも言えることでしょう。今後も交流の内容は変わるかもしれませんが、交流の継続を祈願します。

最後に、元の活気ある大船渡市に戻るにはまだまだ先のことと思いますが、自分の業務を通じて少しでもその力になれるよう取り組む所存です。



災害直後はガソリンを求める車列が延々と続きました

3月11日の東日本大震災直後、テレビの報道でその事実を知り、愕然としたことを覚えています。これが日本で起きたことなのか、被害の大きさに津波の勢いに我が目を疑い衝撃を受け、それと同時に身近で起きたことのように思えず、どこか他人事のように感じてしまっていたことも事実でした。重大なことが起きているのだと理解しながら、大変だろう・・・怖いだろう・・・と少し客観的な立場からくる思いだったように思います。

そんな思いの中、3月14日、被災地への救援活動のため岩手県への派遣の要請があり、何が何かわからないままに先遣隊として肝付町役場から5名、被災地へ向かうこととなりました。なぜ今なのか？なぜ自分なのか？大丈夫だろうか？様々な不安な思いが何度もよぎったことを覚えています。しかし、鹿児島から離れ、陸路、岩手県大船渡市を目指すうちに自分の気持ちに変化が表れました。鹿児島から離れるにしたがい、現状が緊迫していることを目の当たりにするようになり、自分の事を重きに置いた考えがいつの間にか後に回るようになりました。今できることを全力で尽くすという考えに自然となっていたように思います。ライフラインの復旧がなされていない中、情報も少ない中での原発を避けての北上の難しさ、また燃料確保など想像以上の苦労となりましたが2日間かけ3月16日の21:00頃、大船渡市へ到着、無我夢中で活動しました。活動する中、崩壊した建物、汚れた町を目にし、愕然としました。

しかしそんな中、本当は辛いにも関わらず大船渡市の方々の明るい表情がすごく印象的でした。逆に支援に行った自分たちのほうが励まされ涙が出ました。「鹿児島から来て下さった。本当に有難い。」「遠い所からありがとう。」など本当に多くの温かい言葉を頂き、辛い状況の中、他人への気遣いを忘れない心の在り方にただただ驚き、自分も心の在り方を深く見つめ直す機会を頂いたことに感謝しています。

大船渡市の戸田市長がイギリスの記者に質問された「なぜ、日本人はこんな状況の中で冷静なのか？」という質問がとても印象に残りました。“昔からの地域の絆”と答えられたそうですが本当に市長が答えられたように市民の方々がお互い協力しあって生活している姿を見て、改めて地域の大切さや人と人との繋がりや温かさというものを感じさせられました。また市の職員の方々に至っては自分の家族が被害に遭ったにも関わらず、不眠不休で働く姿に頭が下がる思いでした。

私は今回の支援に参加し、町役場職員としての在り方や普段の生活の有り難さをものすごく感じさせられました。支援活動以前と以後のものの考え方、見方に変化があったことは言うまでもありません。支援活動へ加わる事ができ本当に良かったと思います。

最後に以前の大船渡市へ少しでも早く戻れるように願いつつ、また微力ながらも自分にできる事をよく考え行動していきたいと思います。



赤崎小学校のグラウンドもがれきの山

※派遣構成

肝付町職員3名、建設業協会2名

※被災地の光景

国道を境に、線を引いたように被害が2分していた。目を疑う光景であった。津波のすさまじい強烈な力を感じた。水道(飲料水)については旧三陸町方面は壊滅的な被害の為、何カ月かかるか未定の模様。

※活動内容と感じたこと

給水2名、物資搬入3名での活動(先遣隊と同じ。)

私は主に給水活動に従事。給水の場所へ大船渡市の職員が先導し、また次の場所へと案内される。手を煩わせるので効率的でない。給水の体制がまだ改善の余地ありと感じた。しかし、疲弊しきった職員へ何を言う事もできなかった。

給水ポイントでは支援活動する私たちに『鹿児島から来てくれたんですか。ありがとう』と感謝の言葉も頂きました。被災者の方々は家族や住居など水以上に大切なものを一瞬にして失ったにもかかわらず、このような状況下でもへこたれず、人と人が助け合い譲り合う姿を見て心に衝撃が走りました。いざ自分がこのような状況下におかれたらこのような行動がとれるだろうか？と。

※これからは衛生面、精神面、健康面などの対策・対応が言うまでもなく講じられ、また、復興に向けてのインフラ整備などが進められていくと思われませんが、まだまだ時間は途方もなくかかるのではないかと思います。

※肝付町も太平洋に面している場所がある為、いつ同じような災害があるかわかりません。防災・災害体制や命令体系を一元化し、シミュレーション等を交え、今一度見直して職員へ意識つけする必要があるのではないかと思います。今回、私が派遣された時は情報の一元化？が不十分だった気がします。



地震直後、被災者にお風呂を提供した「ふじ丸」

肝付町単独による第2次派遣隊として、建設業組合2名と役場3名の合計5名で、平成23年3月19日(土)に出発した。現地の状況が第1次派遣隊より時折入ってくる一方通行の情報のみで余震や原発問題など不安なままの出発となった。

花巻空港に着くと第1次派遣隊が待っており、現地の状況と活動内容の引継ぎを受け、やはり状況としては海の近くはひどい有様であるとのことだった。空港を出ると少し雪が残っており、さすがに鹿児島との気温の差を感じた。

まず市役所へ着任のあいさつに行き、明日の行動と宿泊施設の場所を確認した。宿泊施設である保健介護センターは裏まで津波が襲ってきており、少し回りを歩いてみたが、まだまだ瓦礫が道路脇に山積みになっており、いたるところに壊れて動かなくなった車が散乱していた。現実には被災した状況を目の当たりにすると声も出ず、ただただ恐ろしさで背筋に寒いものを感じた。

初日は給水車で給水活動をおこなった。給水車に乗り、給水場所近くを放送して回ると、水道の被災箇所が多く毎日の給水とはいかないため、大勢の住民が今か今かと待っていた。我々が給水準備を整え終わると住民の方が率先して整列させ、給水の手伝いや高齢者の自宅へ水の配達等をしていた。隣近所でお互いに助け合い、励ましあっている姿に地域の繋がりの大切さを感じた。また給水場所では近所同士の「大丈夫だった～？お店流されたらいいね。」「〇〇さんはどうだったよ。」「〇〇で遺体が見つかったよ」など被災された方々の生の声を聞いた。

そこで一人のおばあさんが鹿児島から来たと聞くと遠いところからありがとと涙ながらに喜んで差し入れをしてくれた。その方は弟さんを津波で亡くしており、自分の悲しみより支援に来ている我々のことを気遣ってくれ、短い期間でしか自分が支援できないことに申し訳なく、恥ずかしくさえ思った。

二日目は支援物資の仕分作業をおこなった。午前中は市役所地下の一時集積所に次々と運ばれてくる物資を降ろして、他の体育館行きの積み込み作業をおこなった。午後からは大船渡小学校の体育館で集積された物資の仕分をおこなった。そこには全国から送られてくる物資を品目毎、物によっては男性用、女性用、大人用、子供用細かく仕分けをおこなった。

三日目には初日と同じ給水活動をおこなった。この三日間でおこなえた支援活動は微々たるものではしたが、少しでも被災者の方、また大船渡市役所で働く皆さんの力になれたのなら良かったと思います。

町としては今回の東北大地震を教訓にし、対岸の火事ではなく、いつこのような災害が発生しても対応しうる役場の体制及び地域の繋がりを大切にしていける必要があることを痛切に感じました。



全国各地から支援物資が届きます

平成23年3月11日（金）午後2時46分、私は公用車の中にいた。公用車内でラジオを聞いていたところ、東北地方で大地震が発生したと速報が流れた。当日私は、肝付町観光PR用DVD撮影に協力同行しており、目的地に到着後すぐに、携帯電話のTVをたちあげた。すると、地震発生後に津波が発生し、家屋や車などが津波に飲み込まれていく状況の映像が放映されていた。そのような同じ状況の中に、銀河連邦加盟国の「大船渡市」も入っていた。すぐに、大船渡市の担当者の携帯へと何回も連絡を取るが、すでに繋がらない状態となっていた。引き続き何回も何回も、大船渡市役所や銀河連邦担当者、物産関係担当者の携帯電話に連絡を取るが一切繋がらなかった。その間も、地震や津波の被害状況などが、何度も何度も繰り返しTV等で報道されていた。土曜・日曜日も携帯電話等に連絡を取るが、繋がらない状況が続いた。月曜も朝より引き続き連絡を取るが繋がらなかった。昼過ぎに物産担当者の携帯にやっと繋がった。たまたま、内陸部の市内に被災者用に食料品や物品等の買い出しに来ていたらしい。現地の被災状況等を聴き取り、現地の状況を取りまとめて上司へと伝えた。その後も引き続き、できるだけ現地と連絡を取れる様にした。並行して、他共和国担当者と災害支援の対応策について、連絡を取り合った。相模原市はすでに、日曜日の段階で職員の支援派遣が決定されていた。他共和国も職員派遣や救援物資などの準備を進めていた。

3/14の夕方、岩手県大船渡市へと職員が派遣された。派遣期間は未定だという。後日、入れ替わりで別の職員が行く必要があるとのことで、職員に派遣希望の調査があったため、名乗りを上げた。3/18の14時頃、私の3/19～3/23までの派遣が決定した。その夜、派遣の準備を済ませ早めに寝たが、なぜか、なかなか寝付けなかった。

3/19、午前5時35分に自宅を出発し、鹿児島から伊丹経由で午後2時30分に岩手県の花巻空港に到着した。先遣隊と花巻空港にて簡単な引継を行い、大船渡市へと向かった。午後4時45分大船渡市役所に到着。到着までの道中や市内の国道上からでは、被害の状況は分からなかった。市役所の駐車場は、自衛隊の車両や災害支援の車両などでほぼ満車状態だった。活力推進課へあいさつを行い、今後の肝付町からの派遣計画などを伝え、明日からの支援活動内容の確認を行った。その後、宿舎へ案内された。宿舎のすぐ下が被災現場となっていることに気がついたため、荷物などを宿舎に置いた後、派遣隊全員で徒歩にて周辺を散策した。国道をはさんで海岸側のほとんどが津波の被害にあっている状況であった。被災現場は、TV等で放送された状況とは、また違った光景が眼前に広がっていた。津波が押し寄せてきた時間を示したままの市立体育館の時計、重機等を使用しない限り動かないであろう巨大なタンク、家に突き刺さっている巨大な丸太や自動車、冷凍されたままの状態のサンマ等の魚等など、今でも脳裏に焼き付いている。その後、宿舎へと帰り、明日からの活動の打合せを行い就寝したが、午前2時頃強い余震があったため、その後なかなか寝付けなかった。（結果、帰る日までの夜間に5回も余震があった）

3/20、午前6時30分起床、8時に市役所へ向かい8時40分に、市役所職員の案内で大船渡小学校に到着した。小学校へと向かう途中では、津波の被害にあい、ぼろぼろになった家や車、家が跡形もなくなった状態の場所、また、行方不明者の捜索をしている人々などが見受けられた。また、救援物資の受け入れ先になっている大船渡小学校も、津波の被災現場となっていた。校庭に横たわる、流されてきた車や住宅などの木片など、校庭を囲んでいるフェンスも見ると無惨な状態となっていた。小学校の体育館に救援物資を搬入してくる貨物車や避難所へ救援物資を運ぶ自衛隊の車両などが頻繁に出入りしていた。体育館内は、救援物資で3分の2ほど埋め尽くされていた。救援物資の搬入搬出で1日があっという間に過ぎた。昼食はおにぎり2個と水、夕食はおにぎり2個とカップラーメンだった。

3/21は、午前8時より給水活動を行った。被害を受けていない地区であったが、ライフラインがストップしているため、家が無事に建っているだけで、同じく被災したようなものであった。小さな子供が大きなペットボトルを抱きかかえ、ポケットに小さなペットボトルを突っ込んで水をもらいに来る姿や、お婆さんが一輪車に大きな漬物樽を乗せて来

て、水の重さによろけながら帰っていく姿等には思わず涙ぐんでしまった。給水活動をする中で、救援物資を取り扱う状況と違ったのは、地元の方々と直接お話が出来たことであった。鹿児島から来たことを知ると、あまり岩手の言葉が解らなかったが、大変感謝され中には拝む年配の方もおられた。その日は、浄水場に4度補給に走った。終了したのは午後6時過ぎで、すでに薄暗かった。昼食はパン1袋とお茶、夕食は昨日と同じであった。

3/22は活動の最終日で、時間に余裕があったため、宿舎下の前回とは違う被災現場を見て回った。やはり、凄まじくすごい情景に変わりは無かったが、家屋等の瓦礫の中を、小さな子供と母親が手を繋いで遠くを歩いている姿を見て、なぜかほっとする自分がいた。最終日にやっと、市役所職員の伊勢さんとも会えた。若い職員は、昨日まで行方不明者の捜索にあたっていたらしい。

午前中は、市役所の地下にて救援物資の仕分け作業などを行い、午後から古内さんの案内で、被災地を案内してもらった。古内さんの説明を聞きながら、被災地を巡ったがあつという間に街を津波が飲み込んでいったらしい。その光景を職員は、高台にある市役所から見ているしかなかったという。古内さんは、出来るだけ多くの方々にこの光景を見てもらいたいと言っていた。今でもまだ、脳裏に焼きついている。色々と書き足りないが、地元である内之浦や岸良などが、もし今回と同じような津波に襲われたら…。津波に対する認識を改め、かねてより防災意識を高く持つように、町民の方々へも強く訴えていく必要があることをより強く感じた。

また、機会があれば、復興後の岩手県大船渡市へ、もう一度行きたい。

3月26日 南日本新聞

南風録

文部省宇宙科学研究所(現宇宙航空研究開発機構)の施設のある全国5市町が「銀河連邦」を結成したのは、1987年だ。県内では12番目のミニ独立国家だった▼チームが去り自然消滅していくミニ独立国が多いなかで、連邦は健在だ。内之浦町は肝付町となり、1町加わって6市町となった今も変わらぬ交流が続く▼構成自治体の一つ、岩手県大船渡市が東日本大震災の被災地となった。研究機関の現地調査では、津波の高さは23・6メートルに及んだ。ビル1階を4メートルすれば6階建てに相当する。現時点で約250人が死亡、避難者は約6千人に上る▼連邦では災害応援協定を15年前に結んでいる。「被災自治体の要請にこたえて」との内容だが、肝付町の対応は素早かった。要請を待たずに、震災4日目は支援チームを送り出した。現在、3次隊が現地で活動している▼きょう出発の支援チームから、肝付町単独から大隅半島4市5町の合同チームに変わる。肝付町の奮闘ぶりに周辺市町が動かされた格好だ。この連携が生まれたのも、「大隅は一つ」を常々掲げる地域ならではのだろう▼事は長期戦。支援する側がゆとりを持つことで長続きするし、支援の幅も広がる。被災者ほどではないにせよ、電気も風呂もない中で、支援活動は大変だろう。見守る身としては、折りにも似た気持ちで「頑張れ日本」とつぶやくばかりだ。

平成23年4月1日 南日本新聞

鹿屋総局・福留 梓

記者の目

「こちらサンリクオオフナト共和国です」「ウチノウラキモツキ共和国です」。国際宇宙ステーションの野口聡一宇宙飛行士(46)と肝付町の内之浦宇宙空間観測所など全国6市町をテレビ会議システムでつないだ交信イベントの取材で、冒頭のあいさつに面食らったのは昨年4月だった。サンリクオオフナトとは、三陸大気観測所があった岩手県大船渡市。宇宙航空研究開発機構の施設がある自治体でつくる「銀河連邦」として、肝付町など24年前から児童交流や物産展などで友好を深めている。イベントもその一環だった。赴任して1年たち、銀河連邦も耳慣れた先月11日、東日本大震災が発生。

銀河連邦の絆

大船渡市も地震と津波に襲われた。同町は銀河連邦で締結していた災害時相互支援協定に基づき同市に職員を派遣。大隅半島4市4町も加わり支援にあたっている。取材ノートに同市の小学6年生と野口宇宙飛行士のやりとりが残っていた。「宇宙で一番素晴らしいと感じたことは『地球の美しさです。宇宙ステーションの窓から見ると、毎日違った姿を見させて素晴らしいです』」支援から戻った町職員によると、リアス式海岸や山並みが美しい街は津波被害が大きく、がれきの山となったという。銀河連邦の絆を生かし、雄大で美しいふるさとが一日も早く戻ってくるよう応援したい。

派遣時期

3月23日～3月27日（肝付町第3次隊） 、 4月6日～4月22日（現地支援本部）

感想等

私が、2回の派遣で感じたこと、考えたこと、印象に残った話などを思いつくままに記してみる。

1回目の派遣

隊の編成が、民間の方（山之口建設社員2名）との混成であった。民間の方と同じ目的で、一緒に活動をし、大船渡市の復興や肝付町の街づくりについて議論が出来たことは非常に貴重な体験であった。被災の状況を目の当たりにして驚愕するとともに、津波という災害の特殊性や脅威を知った。

被災して間もないことがあり、被災者はもちろん市役所職員の方々のショックや、復旧復興活動を手探りでやってらっしゃる姿を強く感じた。このため、大船渡市の負担が軽減するよう、支援物資の拠点（立根小学校）を任せてもらうこととした。（このことは、1次派遣隊の前原俊郎氏のアドバイスを受けてのことであった）

市役所の方や住民の方と話をすると、『どういう支援が必要なのか』、『何が足りないのか』さえわからない状況であった。このため、的確で適時性のある支援を行うには、現地に支援本部を置く必要があると強く感じた。

現地の方々の、必死に支えあっている姿、前を向いている姿に胸が詰まる思いがした。また、中学生、高校生、大学生（専門学校生）等、若い人が必死にボランティアに汗する姿に感銘した。

以下、私が聞いた話を記す。

- 「大学で一生懸命頑張って、ふるさとの役に立つ人になって絶対に帰ってきます」…4月に京都の大学に進学することになっている女子高校生
 - 「日本人に生まれてよかった」…男子中学生
 - 「遠くからありがとうございます。絶対元気になります」…男子高校生
 - 「津波のことは、目の前で起こったことしかわからない」…女子専門学校生
 - 「普通の生活がしたい」…女子中学生
- 等々

2回目の派遣

現地支援本部設置を大船渡市の方々が非常に喜んでくださった。（その期待に身の引き締まる思いがした）

今回の任務は、現地支援本部を立ち上げること、現地が必要としている支援（物資を含む）を調査し、把握すること、支援業務の円滑な遂行、現地の状況把握等であった。これを達成するため、被災地の現状調査や避難所の調査（市民の方々の聞き取り調査を含む）、現場での支援業務の把握、支援物資の供給実態把握、市役所等での情報収集などを行った。

私が困惑したことは、被災地では、日に日に状況や必要とする支援が変わっていく事であった。（現地支援本部を設置して正解だったと感じた。）また、現地新聞が取り上げる記事の変化に、被災地の苦悩と現実を感じた。（被害の大きさを伝える記事が大半を占める→前述の記事に加え、復旧復興に向け動き出した事や頑張っている人を取り上げる記事、また、「頑張ろう」と呼びかける記事が大半を占める→厳しい現実を伝える記事が紙面を占め始める。）支援活動を通じて、大船渡市民の方々と絆が深まっていくことを実感した。

現地で活動をする支援隊と現地支援本部で「思いを形に出来ないか、産業支援は出来ないか」などの議論の末、

作成した『がんばっぺTシャツ』は、まさに絆の象徴といえるのではないかと考える。

自主防災組織の活躍に目を見張った。行政からの連絡や支援物資の供給、住民の現状把握、助け合い活動など地域のコミュニティがとてもしっかりしていた。肝付町も参考にする必要があると感じた。(強いコミュニティが、復旧復興の速度を早めるように思う。)

長い歴史の中で培われた『テンデンコ』という減災の考え方は、確かに必要なものだと感じた。大船渡市では、防災や減災の教育が学童期からしっかり行われているときいたが、本町も学ばなければならないと感じた。

以下、心に残った話を記す。

- 「みんなで3日間生き抜こう、3日生き延びたら助けがくる」…赤崎漁村センターで炊き出しをされていた女性
- 「前の津波のときは、若かったから…何もかもなくなった。この先どうしていけばいいのかわからない」…リアスホールに避難している70代女性
- 養殖施設も船も被害にあって「この年で、今から5千万円も借金したって返せねえ、でも俺は海が好きだからワカメ漁でもやって海の仕事を続ける」…崎浜地区の70代男性
- 3度の津波被害にあって「昔は、みんな貧乏だった、また一からやったらええ」…蛸之浦地区83歳女性
- 「私、将来学校の先生になるの！優しい先生だよ。だって先生が守ってくれたもん」…蛸之浦小女子児童
- 「あったらいけないけど、もしも肝付町で何かあったら俺、絶対飛んでいきます」…大船渡市役所男性職員

大船渡市役所のロビーで、肝付町から届いた寄せ書きを熱心に見ながら涙する人と会った。「ありがとうございます。元気が出ます」と一言。『人は、困難に直面したとき、乗り越えられるときと乗り越えられないときがある。孤独を感じたときは力が出ないが、絆を感じたとき生きる力が湧いてくるのだ。』昔聞いた話を思い出した。

絆を紡ぐことこそ復旧復興の第一歩なのかもしれない。復興支援活動で出会えた多くの大船渡の方々の顔を思い出しながら、「一日も早い復興を」と願わずにはいられない。



派遣隊員自らがデザインし、4市5町のシンボルとなったがんばっぺTシャツ

給水班として従事

津波波高23.5mの津波が襲来したと聞き、ただ、唾然とするばかりでした。被災地を見て感じたことは、地震の揺れで倒壊した家屋はわずかで、津波による被災がほとんどであるということです。また、道路1本隔てて、被災の状況が大きく分かれていると感じました。今回、津波の被害を大きくしたのは、波の力で浮遊する漁船、車両、貯木場の木材と推測されます。我々が給水を任された区域は、海岸付近の被害が大きかった箇所でしたが、その被災者も3通りいらっしゃると感じました。ひとつは、完全に家屋をなくして、避難所で生活されている方、また、家屋は浸水や破損したけれども、被災家屋で何とか生活できている方、被災はしていないけれども、ライフラインが被災し、日常生活に支障のある方です。この3者のニーズはそれぞれであることを、まず認識しないといけないと強く感じました。

また、自主防災組織がしっかりしている地域もあり、独自で避難所の外にコンパネでお風呂を建てている避難所もあり、ユニークに地域の名前のあとに「温泉」とネーミングしておられ、微笑ましいというか、涙ぐましいというか感動をしました。

ある避難所の方が言うておられましたが、「以前のチリ地震の時も、今回と同じ付近まで津波は到達した。」と「災害が風化し、いつの間にか安全神話ができてしまっていた。」など、やはり「万が一」を考えなければならないと感じました。

今回の派遣を通して感じた事は、被災住民や自治体職員の強さ、みんな前を向いて確実に歩いている。かえって自分が励まされたようで、自分に置き換えた時このようにできるのか？しなければならないのは分かっているけども疑問である。東北の朝晩の寒さ、余震の揺れ、電気・水道・ガスのない生活、短い期間ではあったが、模擬はできても、なかなか経験のできない体験をさせていただきました。

1日目・・・市水道課も詳細な断水状況を把握できておらず、戸惑いのある区域指定での給水作業であった。

（被災後、2週間目で初めて給水車が来てくれたとの声も聞かれた）

2日目・・・決まった時間に、避難所や給水ポイントを巡回するようになる。

3日目・・・ライフラインが少しずつ解消されてきて、給水ポイントも少し変更されてきた。

日量MAX18^t。（肝付町給水車容量3^t）

大船渡給水場では200トンを超える給水を行っている。



一日に何度も給水場へ走りました

私は、平成23年3月23日から同27日まで、東日本大震災による大船渡市復興支援第3次隊の一員として参加させていただきました。

3月11日の震災当日、私は14時頃に発生した南方地区の住宅火災現場にいました。火災鎮火の状況を確認し、帰庁後、自席のPCに目を向けると「東北地方で地震 震度7」の表示があり、慌ててTVをつけました。TV画面は、今まさに巨大津波が岩手県釜石市・宮城県仙台市を襲う光景を映し出し、あまりの光景に「啞然・呆然」となりました。その後の日々は、報道で流される被災各地の惨状を脳裏に刻む毎日でした。

本町の職員派遣が決まった当初は、現在の「4市5町復興支援」と異なり、肝付町単独の派遣で「希望者による派遣」となっていました。総合支所勤務の私は、当初、派遣希望ではあったものの、機構改革等の影響などで人員が減った総合支所の職場を長期間空けることに抵抗があり、希望者として「手を挙げることに」二の足を踏んでいる状況でしたが、第3次隊で同行した方や当時の課長の勧めもあり、大船渡市へ派遣されることとなりました。

派遣初日と最終日は、引継ぎのみ行い、移動に丸一日を費やし、実質の活動は2日目から4日目まで、市街地・赤崎地区・蛸ノ浦地区などの給水活動を行いました。被災者の方々は消防団や自治会などを中心に、残された人・モノ・知恵を活用され、懸命に生きておられました。また、当人も被災者であろう市職員の方々も、疲労困憊の中、懸命に復旧活動に従事されていました。

派遣された職員共通でしょうが、報道で見ていた被災各地の状況認識と、活動の合間に見る現地の惨状は言葉で言い表せないものがありました。無慈悲な被害に自然の猛威を感じ、畏怖が半分、怒りが半分といった心持ちで給水活動を行ったことを記憶しています。また、遠方・鹿児島からの支援に対し、多数の被災者からいただいた「ありがとう」の言葉や流された「涙」に、こちらが励まされる場面が多々ありました。

私は、地球を一つの生命体と捉えたとき、人間という存在は地球にとって「癌細胞に似ている」と思うことがあります。自らの都合で自然(地球)を破壊し、他の生物を殺戮し、増殖を続ける「人間」。近年多発する異常気象や天災は、驕る人間に対し「地球の免疫システム」が働いているように感じます。自然を人間が征することは出来ません。すでに言い古されたことですが「自然と共生」出来るシステムを構築することが必要だと思います。

今後、発生するであろう「東海・東南海・南海地震」はM8クラスと言われており、全ての地震が連動して起こることを指摘する学者もあります。本町の「地震や津波」に対する対策を、私は勉強不足で存じませんが、大船渡市と似通った海岸線や地形を持つ本町は、今回の大震災を「対岸の火事」だと見過ごさず「他山の石」とし、教訓として役立てていくことが、尊い犠牲を払われた方々への弔いになるものと思います。

大船渡市への派遣に深く感謝するとともに、私自身、今回の教訓や体験を糧とし、今後の業務に活かしていきたいと考えます。ありがとうございました。



屋上はかろうじて無事でしたが……

第1次隊の出発式が前日の25日にあり肝付町2名、鹿屋市2名、志布志市2名の編成で、自己紹介、簡単な現地状況の確認、持ち込み物資の打ち合わせ等を行いました。

3月26日、鹿児島空港に現地集合し、伊丹空港を経由し、岩手花巻空港に到着、3月下旬でしたが雪が降り、30センチほど積雪もあり、かなりの寒さを感じ、この環境の中での活動に対して不安をおぼえました。先発隊の迎えの車中で被災地の現状、活動内容、宿舎の状況等の話を聞き、1時間程度かけ宿舎に午後6時頃到着、荷物だけ下ろし支援物資が届くとのことで、立根小学校で搬入作業を行う。大型トラック2台の物資を現地職員、地区住民、他市町職員と作業を行いました。小学校体育館の中は支援物資が分類ごとに仕分けがなされており、今後の作業の困難さを感じました。その後、宿舎に戻り給水活動、支援物資仕分け作業等の引き継ぎを行いました。当時の宿舎は、電気、水道、トイレ、ガス、暖房設備等、使用できず過酷な環境でした。

活動従事内訳は、肝付町2名が給水活動、鹿屋市、志布志市4名が支援物資仕分け作業を行う。給水活動班の作業内容は、浄水場にて給水車に給水、沢田・佐野地区に給水を行う、その後、台町公園にて吹田市給水班とともに給水活動。午後、再度、給水車に給水し、赤崎地区、蛸ノ浦・長崎地区に給水を行う。活動3日目には沢田地区の一部が通水する。どこの地区も想像以上の被害を受けており、広範囲で壊滅的な状況でした。被災者はその中でも気丈に団結して避難所で生活しており、各地区の防災組織がしっかりと機能している印象でした。それと、給水活動を行う上で、ポリタンクや非常用給水バックなどの準備が必要と感じました。

物資班の活動内容は、2日目までは主に物資の搬入、仕分け作業だったのが物資のさらなる分類作業や各避難所への搬出作業へ移行していく時期でした。他の銀河連邦派遣職員や多くの元気あるボランティアとともに作業しました。

活動全体を通じて、徐々に瓦礫が取り除かれたり、上水道が復旧したり少しずつですが前に進んでいます、今後は被災者、自治体職員の精神的な支援も必要と感じました。



非常用給水バッグ

東日本大震災の発生から約2週間が経過した平成23年3月26日から3月31日までの6日間、大隅半島4市5町復興支援チームの第1次派遣隊として大船渡市で支援活動を行いました。

先遣隊などから、被災地の様子や活動内容、現地での生活環境等の情報が入っていたのでそれほど不安もなく被災地に入ることができました。大船渡に到着後、まず立根小学校に移動し、トラックで運ばれてくる物資を品目ごとに仕分ける作業を行いました。作業が終わるころには日が落ち、あたりは真っ暗になっていたため被災状況を見ることなく宿舎へ向かいました。翌日からは主に給水業務に就き、浄水場から各給水ポイントを巡回することとなったのですが、初めて目の当たりにする被災地の状況は凄惨なもので直視できないような光景がひろがっていました。「百聞は一見に如かず」という言葉通り、想像を超える被害には目を覆うばかりでした。

しかしながら、震災後2週間を経過した被災地の方たちは疲労の色は隠せないものの、鹿児島から支援に駆けつけた私たちに、明るく話しかけ、また、感謝の言葉を伝えてくださいました。震災で家族や家を失い打ちひしがれている姿を想像していただけに、被災者の元気な様子を見て、逆に励まされたような気持ちになりました。

給水作業を行い、集落や避難所を回ると、自主防災組織が確立され、各組織が機能的に活動していることに驚かされました。各所に過去の津波被害の標識が見られるように、防災に対する意識が非常に高く、日頃の訓練等の賜物ではないかと感じ、本町においても見習うべきものの一つだと思いました。

被災地の復興までにはまだ長い期間を要すると思いますが、一日も早い復興を心からお祈りいたします。



給水の合間に地元の方々と交流

最初に伺ったのは3月。4市5町の連合チームになっての第2班での派遣であった。孤児となってしまった子どもたちはいないだろうか？疎開の希望者はいないだろうかという状況を把握するための派遣。

飛行機から降りた花巻の景色は畑の土手には雪が残り、風は鹿児島師走のような冷たさだった。しかし建物はしっかりと立っており、その時点で疎開のニーズは東北の中でも補えると悟った。山の中を2時間走り、大船渡に入り、高速の陸橋をくぐる。横の川の真ん中に白い車が数個の瓦礫と一緒に残っていった。ここまで流れてきたんだなあと思ったけれど町は電気もつき、コンビニはしまっているけれど台風前の鹿児島のように何事もなかったようにみえた。しかし、その思いはすぐに打ち消された。宿舎の猪川地区公民館でお世話をしてくださった鈴木さんは「橋ひとつで天国と地獄のようだ。」と表現された。まさにそのとおりで波が押し寄せた地域はそこに人々の生活があったということ。瓦礫の山が物語っていた。言葉がなかった。単発の派遣のため、できる業務の判断と地域状況の把握を現場ですることが必要だった。現地の保健師の方と話し、孤児は今のところ確認されていないとのこと。ほっとした。そこで手の足りないところを精一杯させてもらった。まず旧三陸町崎浜の訪問。高い高い防波堤の横を通り、津波のすさまじさを感じながら、1軒1軒の家庭の抱える思いを受け取る作業。次にリアスホールでの避難所支援。24時間の支援を2回。帰る日の朝までご一緒させて頂いた。不自由な生活の中、子どもたちの笑顔とご自身も被災しながらも、支援を続けるスタッフの方々に出会えたことを感謝した。津波で地形まで変わってしまったこの土地への愛着と、だからこそのつらさとがとても伝わってきた。けれど「みんなで前を向いていこう」と手をつなぎ、ふんばっておられた。帰った宿舎では他の給水班・物資班の方と感じたことを語り、何ができるか考えた。「とにかく今やれることをやり、この想いを持ち帰ろう。」と。

6月の派遣は保健師としての業務。4市5町のご協力で継続されていくことをありがたく感じた。避難所支援と仮設訪問。瓦礫撤去もずいぶん進み、外の景色は整理整頓されてきていた。けれど出会う方々の中には、環境が整理されてくることで逆に体の疲れと心の疲れから不安という津波が引いては押し寄せている方もいらっしまった。世間話をしながら時々お話される本音を、ただただ聞いた。そして未来の大船渡を想像するだけではなく、創造するための一端でもなえたらと願った。その他にもたくさんのご縁を頂いた。戦争、3回の津波を乗り越え「ただでは、起きねえ。」といわれた、市場で仲買いをされている85歳の女性の生き方にふれ、心から尊敬した。一つ一つの出会いを通し、私にとって大船渡は「また会いたい」、「また伺いたい」大事な大事な町になった。

（広報きもつき 5月号から） まだまだ雪のちらつく寒い中、電気もなく灯油もなく暖がとれない自宅生活。避難所も被災を免れた家の中も昼間は高齢者の方々と子どもたちだけが残る……。特に高齢者の方々は暖をとるために布団や電気のつかないコタツの中に横になっている。そしてテレビもラジオも電話も鳴らず音のない空間で一日を過ごす。けれど東北の方々は我慢強く、泣き言をなかなか口にされない。反対に仕事で訪問した私たちに激励して下さる。談笑し、別れ際、半泣きの笑顔に思わず「つらかったですね」と芯をついてしまった。「つらかった。今もつらい」と互いに手を取りながら涙を流した。

また、ひとしきり話した後、なぜかこの出会いに感謝しながら家を後にした。不安な日々を思うとまた走っていきたく気持ちになる。けれど、現地の方々はみな津波で地形まで変わったこの土地でもう一度頑張ってみようと手をつなぎ、踏ん張っている。

私たちはこの同じ海を持つ土地に住む者として一緒に手をつなぎ、痛みを分かち合い、できる支援を続けられたらと現地に行き、今、切に思う。「またね！」といえる明日を作るために。

(広報きもつき 5月号から)

今回、大船渡市へ孤児対策を課題として調査支援に行かせていただきました。

初日、奇跡的に孤児ゼロという驚きや安心とともに始まった戸別訪問調査・避難所支援を通して、やはり高齢者も子どもたちもみなさん言葉に出せない想い、我慢すぎるぐらい耐えていらっしやるのを強く感じました。

避難所では迷惑をかけないように小さな声で話し、当然プライバシーもなく、日中は子どもたちを置いて不明の家族を捜し、先のことをも考えなければならぬ空気に押しつぶされそうな状況の中で、自発的に我慢する子どもたちへの支援を通し、外部からの支援の重要性を大きく感じています。

物資一つにしても、受け取る側の状況まで考えられていない、送る側の都合だけ考えているのではというような現状も目の当たりにし、被災地のために何かしたいという想いのボランティアを正しくつなぐのも社協職員として重要な役割であると強く再確認し、今後、活かしていこうと思っています。

1人暮らしのお年寄りの手を握り、体調などを尋ねる肝付町の能勢佳子さん(右)ら
—31日、岩手県大船渡市(社会部・小野智弘)



「全力で被災者支援」

大隅チーム 活動本格化 岩手

【岩手県大船渡市で本社取材班】東日本大震災被災地の岩手県大船渡市に、大隅半島の4市5町が職員を交代で派遣する復興支援チームの活動が本格化している。第1次隊(6人)から31日引き継いだ2次隊(同)は、給水、支援物資の仕分けに加え、健康支援を開始。職員らは復興に向け、被災者を全力で支援すること誓った。

肝付町の保健師能勢佳子さん(42)ら2人は、同市越喜来地区を1戸ずつ訪ね、健康相談を実施。高齢者の血圧や体温を測り、震災後の体調の変化を詳しく聞き取った。高台の家屋は被災を免れたが、依然音響は続く。被災者から「腰を取ることもままならぬ」との訴えが相次いだ。

「固定電話も不通で独居老人は状況を親族や知人に伝えられない。健康や精神面にも影響が出始めている」。能勢さんは、人的支援の重要性を実感した。支援物資が集まる立根小学校には朝からトラックが続々と到着。1次隊の有村道尚さん(48)＝鹿屋市＝と第2次隊隊長の根岸作さん(47)＝垂水市＝はボラシニアらと何下ろし、カップ麺や野菜、子供服といった物資の仕分けを急いだ。諸留貴久さん(39)＝曾於市＝の給水班2人も、持ち込んだ給水車で約10カ所を巡回した。

派遣期間は4/3～10までで、もう3ヶ月以上前になります。まだ、大変寒い時期で、2日目には雪がちらついていました。4月に平地で雪がちらつくなんて、やはり東北は寒い土地なんだなとつくづく思いました。これを考えると3月11日に津波で家をなくされたりして、被災された方はさぞや寒い日々を過ごされて来たんだろなあと思いました。

私の3次隊には、錦江町、大崎町から2名ずつ、肝付町からは私ともう1人で合計6名の隊員で派遣されました。現在は、もう終了している給水活動と支援物資の仕分けが業務となりました。

到着してすぐに2次隊の垂水市から派遣された職員から、おおまかな地理案内と給水場所の案内をされました。給水車が給水する場所というのは、津波で被災した海岸端が多いため、大船渡市の津波で被災した箇所をつぶさに見ることができました。海岸端といっても高台も多くて、津波が来たところと来ていないところが、地形によりはっきりしているのが確認できました。津波がきたところは家屋は全滅、しかし来ていないところは、全く普通の家々がならんでいる。そういう光景でした。

私も、台風の波を見たことがあります、海の破壊力というものはすさまじいものがあると常々思っています。その台風の波以上の津波が押し寄せたわけですから、津波に遭遇した人たちのショックというものは相当なものだったろうと思います。また、滞在期間が進むにつれて、被災地の状況が現実のものとして感じられてきて、精神的にも重圧がかかってきて、なんとしても復興を成し遂げないといけないという使命感も大きくなっていきました。

私は7日間の滞在期間中はずっと給水業務に従事してきました。時間は朝8時から午後4時くらいまででした。大船渡市の浄水場があって、そこには津波がきておらず、水はあるんですけど、地震や津波で配管等が壊れて、水がいかない地区に給水車で走っていき、水を給水する業務です。

朝、給水場所に行けば、もう地区の方が、タンク等を持参して待っておられました。専用のポリタンクだったり、ペットボトルだったり、あちらで良く飲まれている“だいが郎”の焼酎のペットボトルだったりしました。

この“だいが郎”のペットボトルは口が広くて、給水車には、大・小の給水口があるんですが、大きい方の給水口が使えるので、水入れの作業が普通のペットボトルより早くできて重宝したものです。早く次の給水場所にいかないといけないので、どうしても急いでしまい、たまにこぼすことがあったんですが、必ず「あーもったいねーな」と東北弁でいわれました。そういう方たちの気持ちが痛いほどよくわかり、生活における水の大切さというものがあらためて良くわかりました。

「鹿児島からきなすただか。あんだ遠いところからありがてえな。ごくろうさま」と何回も声をかけられました。その言葉には逆に自分たちが励まされました。自分らに声をかけるときは、からいも標準語みたいなもので、丁寧にしゃべってこられるので、東北弁でもなんとなく解るんですが、現地の人どうしてしゃべられると全くわからなかったですね。逆に、自分たちが鹿児島弁でしゃべっているときは現地の人解らなかったことと思います。

あの頃によく聞いたことが、“がんばって”といわないでということでした。被災して、1日1日を明日に向かって精一杯生きている人たちに対して、それ以上、頑張れ、頑張れと無責任に言うなという意味らしいのですが、でも頑張ってくださいと声をかけてしまって反省しました。しかし、みなさん大変おだやかな顔をしていました。たまに、給水車の水が予定より早く無くなってしまい、いったん浄水場まで引き返して、水を汲みに走り、次の給水場所までの時間が大幅に遅れるときあったんですが、文句を言う人はいなかったです。遠く鹿児島から駆けつけ、自分たちのために給水してくれることに対して本当に感謝しておられるのだらうなと感じました

小さい子供は慣れてくると自分で蛇口を開いて水を入れだします。そういう子供は喜んでいました。しかし、この子と同じ位の子供が数多く津波で被災していることを考えるとなんとも、いたたまれない気持ちになりました。

給水活動には、全国の自治体等から多くの給水車が活動していました。主に関西方面からが多かったです。浄水場には札幌市の職員が常駐していました。また、大船渡市役所にその日の給水業務の報告に行けば、全国各地から派遣されたボランティアの方が事務作業等に従事しておられました。それらの人が黙々と作業に従事しているのを見て、日本という国は本当に素晴らしい国なんだなあと強く思いました。いろいろと社会全体がおかしくなっているようなことを聞く昨今ですが、この人たちを見ているとそうではないと思いました。こころ温まる光景には日本人のやさしさを感じました。

また、自衛隊の方と浄水場で給水車に水をためているときに、車が前後したものですから、少し話したんですが、その自衛隊の方は青森県の弘前から派遣されているとのことでしたが、以前は、阪神大震災のときにも救援活動をされたとのことでした。その自衛隊員の話なんですが、「自分たちは上から命令されればどこへでも行かなくてはならない。明日、福島に行けと言われれば行かなくてはならない。自衛隊員とはそんな立場なんです。」そう言われました。それを聞いて、この日本はこの方たち自衛隊ばかりじゃないです、警察、消防、いろいろな方の活動に守られているのだと感じたところです。また、こういう場面がありました。自分たちが宿泊している公民館に、津波で家が流されてしまい、避難所暮らしをされている女性の方がある夜、見えられ、大船渡市から支給された救援物資の布団が気に入らないので、引き取ってくれというものでした。その布団は、市の了解を得てから引き取ったんですが、その女性の方が言われたのが、「自分たちの集落は、人家が100戸以上あったが、すべて津波で流されました。しかし、犠牲者は1人も出さなかったです。子供から大人、老人までみんな無事だったです。常、日ごろから自分たちで防災訓練を行っていました。」と話されました。どこかのテレビの取材も受けたとのことでしたが、この女性の話を聞いて、常、日ごろからの防災訓練、人と人とのつながりがいかに大事かをあらためて感じました。

現在、大船渡市の水道は復旧して、給水活動は肝付町も含めて終了しているとのこと。大船渡への支援はまだまだこれからだと思いますが、給水活動については、全国から多くの方がかけつけ、給水活動に従事し、その目的を達成したということは本当にすばらしことだと感じています。



給水車を待ちわびた住民がバケツやペットボトルを持って集まってきます。

岩手県大船渡市へ救援活動に行き、大船渡市街地は普段と同じ生活ができる状態でしたが、川沿いと海岸付近は壊滅状態でした。

救援内容は、生活する中で一番必要な飲み水を集落まで行き、給水作業をする事で、どのような顔をして接すれば良いかわかりませんでした。被災された方々が私たちの車を見て「鹿児島から来たの？遠い所わざわざありがとう」とすごく感謝され、私は自然と笑顔になりました。

被災された方々の事を思うと心が痛むところですが、被災者のみなさんは私たちが思っている以上に元気で、また一からやり直せばいいという前向きな気持ちでいる話を聞いて、私たちが逆に励まされ元気をもらいました。

復興まで、かなりの時間が必要かと考えられ、まだまだ必要な支援があると思いますので、お互い力を合わせてがんばっていこうと思います。



海の中に沈む家。計り知れない自然の猛威

3月11日、東北関東大地震による未曾有の大災害の発生をテレビ・新聞等を通じて知ったが、現実起きたことと理解することができないほどの衝撃を受けた。

肝付町は災害復興支援に参加することを決定。希望者を募ったが、即座に決断することができなかった。何らかの支援ができたと思う反面、これまで経験したことのないことを行う不安が大きくなり掛かった。それから数日間考え、参加することに決めた。その理由は、「復興支援に微力ながら何らかの形で関わりたい」、「被災地の現状を自分の目で確かめたい」、「考えてばかりいても前進しないのでは・・・」、この3つでした。

4月9日、被災地に赴き、翌日から給水業務を行った。慣れない機械操作、壊れた道路等により、非常に神経を使った。さらに復興支援を目的に現地に行っているため、事故等による業務中断は決して起こしてはならない、我々も支援のたすきを次につなげる責任を強く感じた。無事に業務を終えた時は、得も言われぬ安堵感を味わった。

災害復興支援を通じて、私の感じたことは下記のとおりである。

業務中に出会った人々に教わった。それは、“人の考え方・生きる姿勢”である。一瞬にして、絶望的な状況に置かれたにも関わらず、悲観的にならず、笑顔で前を向いて生きていた。子どもからお年寄りまで、それぞれの役割を持って一日も早い復興に向けて生きていた。“生きる”ことに対する個々の力強さを感じた。そして、個々の力に加えて、一日も早い復興という同じ方向(目的)に多くの人が向かうことで、ものすごい力を発揮していた。そのことは何事にも通じるはず。

我が町“肝付町”において、高齢化・後継者不足などにより活気がないと暗い(あきらめ)ムードが漂っている。今こそ、住民みんなで力と知恵を出し合った“町づくり”をしていかねばと考えた。同時に、我々は公務員であることの意味を考え、理解する必要がある、地域住民から期待され、それに応える責任を感じた。

最後に本当に個人的な意見ですが・・・最近には特に他人の目ばかりを気にして、何もしていない(できない)人が多いのでは・・・。生きていく上で大切なことは、自分の存在価値を見いだすこと、そして人生を楽しむこと。それが出来れば、家庭・仕事・趣味等において力を発揮することが可能になるのでは。

今を楽しむこと。前を見ること。その先に明るい未来が待っているはず。



貴重な水を待っている人がいます

私は、今回の震災にあたり、まず参加しようと思った理由は相模原市の桜祭り等で交流のあった大船渡市が震災で真っ先にテレビで放送され、ホタテ販売の方々や「かもめの玉子」の職員の方々の顔が浮かび、とても心配で何かできることがあればやりたいと思ったからであった。

震災の被災地はとても悲惨な状況であり、特に津波の被害があったところとなかったところの差の激しさには恐ろしさを感じた。しかしながら、被害の悲惨さが重要ではなく、誰も彼も震災による心の傷を受けていることを強く感じた。復興支援第5次派遣隊として勤務して一番感じたことは、「普通であることの有難さ」であった。町も津波被害を受けた場所以外は電気・ガス・水道が復旧してきており、食堂やスーパー・コンビニ・コインランドリー・温泉等も利用することができた。しかしながら、そのような通常に戻りつつある環境の中にも大船渡市は水産業や水産加工業が大きな産業である街であるため、仕事場が流された方々と接することが多かった。働くことができ本当に生活することができる。これからも片付け等は進んでいくと思うが、早くそのような方々が生き生きと働くことのできる状況まで進んで欲しいと思った。

帰ってきてから私が派遣のことについて聞かれたときに、伝えたいことは、「被災地のことを考えると、今自分ができることを一生懸命やらないことは、被災地の方々に申し訳がない。」ということである。やりたいことをやれる状況にない方々がまだまだ被災地にはたくさんいらしゃった。平常に慣れていると、1つ1つのことに言い訳をし、楽な方向へ流されがちになってしまうが、自分が今やりたいことをやっているありがたさということは強く感じ、これからも忘れないようにしていこうと思う。

また、今回4市5町復興支援第5次隊として曾於郡の方々とも協力して任務を遂行できた。これまでは畜産の世界では肝属と曾於はライバル関係のような気持ちがあったが、協力して一緒に仕事を行うことが非常に新鮮であった。また、各市町の取組みについて様々な情報交換ができたことは良い機会であった。このような交流は大隅半島の発展のためにも大変貴重な場であったと感じた。



UK(イギリス軍)が捜索済みであるという×印

6月24日、警備班として車両管理を行っていた私たちが当日の従事を終え、業務報告を行っていると、大船渡市役所の当時、建設課課長補佐の鈴木弘さん（現農林課長）が笑顔で迎えてくれました。

「家族が喜ぶよ。よかった。よかった。」 従事現場で遺体を発見した私たちへ感謝の言葉です。

私は、平成23年4月21日から4月28日まで第6次派遣部隊として従事しました。物資班と車両班を交代で務め、車両班として従事した24日、瓦礫撤去中の作業現場から、瓦礫の中から突き出た人間の両足を確認しました。靴下をはき、皮膚は赤くなっていました。現地は、まだ震災直後ということもあり異臭の漂う中、その発見場所の半径2m程は、ひととき強烈なおいを放っていました。すぐさま、南大隅町の職員とともに大船渡市役所と4市5町でつくる災害支援対策本部へ連絡、警察の到着を待ちました。

警察が到着。普段テレビ等で見る様な、ビニールシートや立ち入り禁止のテープ等をはることもなく、約15分ほどだったでしょうか、処理が終わりました。

「遺体は？」

「たぶん女性です」

「五体満足ありましたか」

「ありました。今後また見つかるかもしれません。そのときはまたご連絡ください。」

いかにも事務的であり、「もう少し悲しめばいいのに」と思ったことを覚えています。その後、警察と現場作業員、そして私たち3名の支援員とで塩をまき、手を合わせました。

「可哀想に苦しかっただろうな。まだ、生きて楽しい事はあったろうに。」そんな気持ちで従事をおえ、大船渡市役所へ報告。冒頭の言葉が鈴木さんよりありました。その言葉に、改めて自分の自覚のなさを痛感しました。警察や市役所職員、消防などの方々は、地震発生直後から何人もの遺体を発見、処理してきたのでしょう。悲しんでいたのでは、前に進めないということなのだと理解しました。

死は現実。

発見当時、可哀想と思った私の感情は、すべてが自己満足であり、そして東北のみんな頑張れといった自分の想いが、いかに軽く、そして一般的なものであったか改めて痛感させられました。

「この人たちは、感情を押し殺し、一歩ずつ前に進もうとしているのだ。」

今でも生きてると信じている家族も、本当はあきらめ、そして遺体が見つかることを願っている。悲しみながらも遺体が見つかったことを喜ぶ感情の交錯。災害を見つめ、自分の感情を抑え、災害復旧・復興へ笑顔を交えながら働く大船渡市の職員の方々。そして災害ボランティアとして活動され、私たちへの気遣いをしてくださったの方々。なんと言葉をかけてよいのかわからなくなりました。

私は、その遺体発見現場の光景が今でも心の中に刻まれています。その日の夜は、銭湯で自分の足を洗うとき、靴をはくとき、寝るとき、その光景が頭をよぎりました。その日を境にテレビ、現地到着後に目にしたすさまじい光景が、大船渡市到着直後に目にした光景とは別の物になりました。

今でも夢に見たりします。私にとって、一生消える事のない光景の一つになった事は間違いありません。そして支援という名のもと、災害復旧に向かう私たち職員に対しても疑問を感じたことも事実です。

家庭の事業でその期間の派遣は無理という職員の方もいたと聞きます。それぞれ事情はあるのですが、被災者はそれらを二度と取り戻すことのできない方々となってしまいました。家族との喧嘩、子供たちへの期待など、すべて生があるからこそその楽しみや悲しみ。災害により、財産を失った方々にとって、そんな感情を失ったことが一番の痛み

であるのではと感じました。残された家族にとってすべてが更新されることのない思い出となり、それを振り返りながら生きていくのだと思います。

急な派遣ではありましたが、支援に対し快く送り出してくれた家族に感謝すると同時に、「1週間ぐらい帰ってこないからね」と子供に言ったとき、「やったー。」という言葉も私の家族との思い出になりました。この思い出は大船渡市の方からもらったプレゼントであることが、私の心に響きます。

今回、派遣に従事してみて改めて災害の恐怖を感じました。町民の方々へは、台風など災害には常に警戒し、生きているからこそその人生であることを再認識していただき、「避難は決して恥ずかしい事ではない。」と自分に言い聞かせ早めの避難を、また行政においても積極的に避難を呼びかけるようお願いします。

今回震災により被害を受けられてかたへ。

笑顔で、そして、前を向いて進んでください。



被災した車の管理も担当しました。
あくまでも個人の所有物。勝手に処分できません

3月22日に発足した大隅半島4市5町復興支援チームの窓口事務を行っていたため、現地の状況についてある程度は把握できているつもりでいたが、現地を訪れてみると、想像をはるかに超えた現実にショックを隠しきれなかった。

現地では給水活動に従事し、多くの被災住民と接する機会があった。その中で、どうしても忘れられない出来事がある。眼下に被災した地域が広がる高台の地区を回っていたとき、一人の高齢の女性が水を汲みに来た。給水車を停車したのは女性の家の前で、その家は被害を受けていない様子だったので、「津波の水はどのあたりまで来ましたか」と、私は声をかけてみた。すると、庭先まで水が上がってきたが、この家には被害はなかったとのことであった。私は何も考えず「被害がなくてよかったね」と声をかけてしまった。初めて接する東北弁で、聞き取れない部分もかなりあったが、女性の言いたかったことは漠然と理解できた。

……「でもね、ここは以前住んでいた家で、この下に昨年建てた家があって、津波が来たとき私はここに逃げていたけれど、下の家には夫が残っていて、2度3度と家ごと津波に飲み込まれ、そのまま流されていくのをここから見ていたの。」……

不用意な自分の発言を悔やみつつも、家に戻る女性に何の言葉もかけてあげられなかった。被災地に支援に行くということに対して、何も心構えができていなかった、何の配慮もできていなかったのだと痛感し、自責の念に駆られた。

復興支援に従事し、私たちの町でも災害発生時にどこまで対応できるのか、行政の立場で大いに考えさせられるところがあった。長い海岸線をもつ肝付町で、津波が発生した場合の被害は甚大なものになることが想定される。避難所の設置場所やハザードマップ、救援物資の管理等、見直すべきは見直し、経験から生かされる災害対応マニュアルを策定し、住民に還元することは、復興支援を行った自治体としての務めであるように思う。



屋根の上には丸太、側溝には車が……

私は、4月27日～5月4日の8日間、東日本大震災で被害のあった銀河連邦共和国の友好都市である岩手県大船渡市に災害支援第7次隊として赴きました。

まず、被災地に到着して絶句しました。市役所周辺は、災害はなかったんですが、海沿いは焼け野原状態…いわゆる『天国と地獄』でした。堤防には大きな船が乗り上げられ、海には家が幾つか屋根だけ顔を出して浮いている…生存者が居るだけでも奇跡に近い状態…正直、初めはここでの支援活動のことを考えたら、失礼な話気が重くなりました。活動としては、物資の受け入れや在庫確認と搬出、災害車両の確認と警備、断水地域への給水活動の全てを担いました。

物資については、立根小の体育館に10トントラックでほとんど食糧等が運ばれてきました。体育館の中は衣類が半分占めており、自衛隊や宅急便が物資を取りにきました。

警備は災害当初、車はそのままの状態でも津波の被害を受けていたため、財布等の金銭類やガソリンの盗難が相次ぎ、そのため防止対策として、本人確認をするための警備活動でした。警備をする中で、何回も車両確認に来られる方々が多く、所有する車両がまだないことを知ると、悲しい顔立ちで帰っていく姿が今でも目に焼き付いています。何もしてやれない自分がとても悔しいでした。また、災害当時、遺体があった車両には赤や黄色テープで〇印がしてあり、その車両を見て泣き崩れる遺族の方々の姿を思い出すと、今でも津波の怖さ、人間の無力さが交錯し、言葉が出ません。

給水活動は、大田地区、赤崎地区、蛸ノ浦地区を回りましたが、みんなバケツやポリタンク、ペットボトルなど水を入れることのできる、ありとあらゆるを持って来られました。ほとんど高齢者の方ばかりだったので、家の方まで持っていくことが多いでした。その際に、ほとんどの方々が、「災害当初は水が全くなく、また市役所の対応もほとんど出来ない状況の中で、一番早く水を持ってきてくれたのが、鹿児島島の肝付町だったよ…その時には、涙が出た…この世に神様は居ると信じた…。わざわざ日本の南から来てくださったこと…一生忘れないよ。本当に本当にありがとう。本当に本当にごめんなさいね…本当に本当にご苦労様ね…。」その言葉を聞いたとき、自分の目には涙が溢れたが、それをごまかすために、満面の笑みで対応しました。

ただ…一言で言うなら、東日本の…岩手の皆さんは元気です。本当は誰よりも心は傷つき、誰よりも悲しい…寂しい気持ちなのに、笑顔で対応してくださいました。ただ…余震がある際には、やはり怯えていました。それが被災者の方々の本当の姿なんです。今でも普通の生活が出来ない方々が多数をいらっしやいます。私たちは、ただ単に、物資を送ったり、義援金を送るだけじゃなく、本当に今、被災地では何を必要としているのか、再度検討する必要があります。今後も東北復興には早くても5年かかるとある評論家は言っていました。一番怖いことは、この東日本大震災のことを多くの日本人の中で忘れて去られていくのが怖いとも言っていました。自分は、また、支援活動に行けるならば、何回でも赴きたいです。



地盤沈下で満潮になると港の外まで今でも浸水します

いわて花巻空港から大船渡市へ辿り着くまで、本当に大震災が起きたのだろうか、と思うほどのいつもと変わらないような景色が続いていました。猪川地区公民館に着いてからすぐ、給水業務の引継を兼ねて、大船渡市内の中心部へ向かいました。港近くの街は、瓦礫の山でした。こんなところに船が、家が、車が、津波でこんな状態になるのか、と本当にショックでした。そして、着いた日の夜、震度3の余震がありました。支援本部の職員に聞くと毎晩のように余震があるとの事で、本当に怖いと思いました。次の日以降も、毎日、余震は続きました。

私は、隊長の配慮もあり、支援活動の間、3業務を全て経験することができました。

※給水班活動……どこの地区に、給水にまわっても、「遠いところからわざわざありがとうございます。」「がんばってください。」と声をかけられ、お菓子や栄養ドリンクを毎日下さる方もいらっしゃいました。被災された人の方が、毎日大変なのに、本当に毎日支援活動する私たちが、勇気づけられました。そして、給水班だけが、被災した現地の方と触れ合い、直接いろいろな話を聞くことができ、とても貴重な経験をさせていただきました。

※物資班活動……物資班の支援活動を通して思ったことは、「今必要なものを、今(タイムリーに)支給していく事ができたら。」ということでした。「これから先もう必要ないよな。」という物が、多く残っていたりしました。しかし、その後市役所に掛け合い、給水でポリタンクを配布することができ喜ばれました。また、ゴールデンウィーク中ということもあり、毎日幅広い年齢層のボランティアの方と支援活動をすることができました。1人の男性が、ボランティアの最後の日に、涙を流して、「最初は、本当にショックで落ち込んでいました。・・・あなた達が、来てくれて、支援してくれて本当に嬉しかった、ありがとう。」とおっしゃってくださいました。

※警備班活動……2000台以上の車が搬入されており、その運ばれた車の車種等の確認、探しに来られた方と一緒に車の搜索、そして、その日も64台の車の搬入がありました。街には、まだまだ流された車があり、この作業がいつまで続くのだろうかと思いました。また、車を探しに来た老夫婦が「昭和35年のチリ沖地震の津波を経験し、その時に家を流され、また今度の津波でも家を流されました。生きているうちに、こんな津波を2度経験するとは思わず、同じ所に家を建てた。」と明るく話してはいたものの、どれだけのショックを受けたのかと思うと、何て言葉をかけていいのかわかりませんでした。今は、被災された人が今をどう切り抜けて生活していくかを支援する災害支援活動であり、復興支援活動と呼ぶには、まだまだこれからの活動だと言う気がしました。これからも、どういう形でもいいので、復興支援活動に参加することができたらと思っています。また、私たちが津波に対してもっと危機感を持って、生活しなくては、と思いました。

私は、支援活動に参加する当初は、こういう活動に他市町との交流なんか関係ない、必要ないと思っていましたが、8次隊として、同じ気持ちで支援活動してきた仲間とは、この活動を通して不思議な団結力、絆が生まれていました。これから先の私の大切な財産となりました。きっと、今後の仕事の中でもプラスになるとと思っています。

最後に、大船渡市、東日本の復興を心から願っており、信じています。



4市5町の絆が深まっていきます(次隊への引き継ぎ)

東日本大震災で被災した岩手県大船渡市へ大隅半島4市5町の9名で5月9日から16日の8日間、先に活動された支援隊の方々の想いを引き継ぎ、しかも隊長として復興支援活動に参加した。あの日に起こった未曾有の出来事をそれまでテレビや新聞でしか見たことがなかったが、実際、大船渡市の被災地に到着した時、想像をはるかに超えた自然の力に言葉を失った。戦争でも起きたかのように、建物や電柱が倒壊し、色々な物が燃え尽きた跡や瓦礫の山、山。

我々の任務は ①支援物資の仕分け ②被災地への飲料水輸送 ③被災した車の管理と警備の3つの業務を9名で交替ずつ分担し、大船渡市が必要とする支援活動をお手伝いした。

自分は飲料水が必要な地域まで給水車を輸送する給水係の業務を主に担当し、被災者の方々と会話をする機会が多く、生の声をたくさん聞いた。会話をする上で、被災者の皆さんの口に出したくないつらい想いや、涙をこらえ日々我慢を耐えていらっしゃるのを強く感じた。我慢することはとても辛いことであり、その辛さはどう力になってあげられるか、給水業務を行いながら被災者の方々と向き合った。また、いち早く遠い鹿児島から支援に駆けつけてくれたということもあり、被災地の住民の方からは大変感謝された。活動中に給水車から被災地を眺めて、私を感じたことは、瓦礫撤去処理のスピードと復興のスピードはイコールだと思った。

支援物資の仕分け作業も受け取る側の気持ちで作業にあたったが、1個のダンボール箱に何でも詰め込まれてある箱というのは非常に仕分け時間に支障をきたし、作業の効率が悪い。善意でひとつの箱にいろんな物資を入れて送られた方もいらっしゃったが、送る側も仕分けする側の状況を考慮した上で、ひとつの箱には同じ物資のみ入れて、中身が分かるように、また食品関係は賞味期限の日付等を箱に記入して送るのが仕分けをするにあたり非常に効率が良い。

肝付町に帰ってしばらく経ってから、ある被災者の方よりお礼のはがきを頂いた。また、ある被災者の方からは大船渡市役所で私の携帯番号を調べてもらったということで、直接電話を頂き、その当時の様子や現在の状況、また他愛のない会話でお互いに泣いたり、笑ったり……。その時の行動が非常にうれしかった、ありがたかったということであった。あたりまえのことしかしていないのに改めてはがきや電話でお礼を言われると、人の心のあたたかさを感じ、私自身も微力ながらお手伝いが出来て本当に良かったと思う。しかし、いずれの方も現在のお住まいは仮設住宅である。

私は今、働ける職場がある、帰る家がある、帰れば家族が待っている、何でもないこのような毎日がこんなにも幸せなのかと改めて実感している。離れていても心はひとつ、絆を大事にしていきたい。厳しい中でも懸命に立ち向かう被災者の方の姿は住民の大きな支えだと強く思った。わずかな日数しかお手伝いができなかったが、被災者の皆さんに早く笑顔が戻るように、そして将来に夢と希望が持てるように前を向いて頑張っていたきたい。

この大震災での活動の教訓を生かし、備えあれば憂いなしという言葉もあるように自分の身は自分で守り、個々の責任で防災対策というのもしっかり万全を期したい。また、いつになるかはわからないが、今回復興支援活動に大隅半島から参加した9名で、復興した大船渡市のあの場所を訪ねていきたいと思う。必ず復興することを心から祈念し、今後もその日まで少しでも力になれるよう努力し見守り続けたい。
がんばっぺ大船渡！！きばれ大隅！！



送られてきた物資の仕分けも大変な作業です

震災発生後2ヶ月余りが経過したとき、被災地に赴き、警備・物資・給水の3つの作業に携わった。

前半の3日間従事した警備作業では、この時点で2500台を越える車両が搬入されており、その台帳整理や車両の捜索が主な業務であった。搬入される車はもちろん自分の車を検索に来られる方も多く、車両の置いてあるエリアを特定した台帳を元に捜索するわけであるが、見つけた場合は自分の車の変りように言葉を失う方が多く、また見つからない場合は肩を落として帰られるのでどちらも場合でも何とも言えない気持ちになった。その中でも白色のワゴンRを探しに来た親子は、ナンバーが台帳になく対象の車種自体、台帳登録も非常に多いため、ナンバー無しの車も10台程度あり、全て探して確認してもらったが見つかることができなかった。この方は震災当時、勤務中で勤務先の屋上から津波を間近に体感したらしく、自分の車も流されていくのを見ていたとのことであった。その後、勤務先は倒産し、現在失業中で、車の捜索も何度か足を運んでいるとの話を聞き、どのように声を掛けていいのか分からずもどかしさを強く感じた。少しでも早く確実に捜索できるように捜索エリアも広範囲に渡っており、エリアの分け方も曖昧であったため、チームで話し合った結果、エリア毎に旗を立て少しでも捜索しやすくするようになった。

次に従事した物資作業では、小学校の体育館で支援物資の搬入・搬出・仕分け作業等が主な業務であった。2ヶ月余りが経過した時点でも全国各地から毎日支援物資が届き、ボランティアの方も毎日来られており、支援の気持ちの高さを改めて実感した。特に毎日ボランティアに参加されている地元の方がいたり、長野県から外国人の塾講師が長期で滞在し、ボランティアに参加したりしているなどには大変感心された。しかし、体育館の床が変形するほど積み上げられている支援物資には残念であった。平等に分配するのは非常に難しいことであると思うが、全国から寄せられたせつかくの善意をもう少しスピーディーかつ効率的に分配できればいいと感じた。

1日だけ従事した給水作業では、この時点で水道設備も大分復旧が進んでおり、水を配給する箇所も限られている状況であったが、実際に被災地を回ることによって災害の爪痕をまざまざと見せつけられた。瓦礫の撤去が始まり、家の屋根に乗った船を撤去している現場や、海岸線からある程度、内陸の所でも想像しがたい高さまで津波が押し寄せた跡を実際に見ることで改めて被害の大きさを目の当たりにした。2か月余りが経過していたこの時点でもテント生活を送っておられる方々も多数おり、被災後の生活の厳しさを強く実感した。

実際にテレビの映像等や人の話だけでは分からない被害の甚大さを目の当たりにして、この支援だけで終わらず今後も自分に何かできることがあれば積極的に参加していこうと思う。また、この経験を有効に今後生かしていこうと考える。



物資の搬出は主に自衛隊が行います

平成23年5月21日から28日の日程で大隅半島4市5町復興支援チーム第11次隊として参加してきました。

役場を7時頃出発し、大船渡市に着いたのは午後4時頃でした。宿舎となる猪川地区公民館に荷物を置き、すぐに業務の引き継ぎへと行きました。移動途中、はじめは写真で見ると被害は・・・と思いました。が、急に被害の状況が変わってきて驚きました。道路の右と左で全く異なっているのです。海岸付近は、すごい状況でした。

初日、2日目は、警備の業務に携わることになりました。この業務は、津波に巻き込まれて被災した約2,500台の自動車を管理します。持ち主や家族の方が自動車を探しに来られるので一緒に探しに行きます。自分の車が見つかり、貴重品等が出てくると素直に嬉しかったりするのですが、家族が未だ見つからず手がかりをと、探しに来られる方など複雑な気持ちになりました。これかな？と思われる車に×印(車の中で亡くなっている)などがあると、ものすごく対応に困ったりしました。

3日目から5日目にかけては、給水車の業務を行いました。私が携わった時期は、水道も復旧してきて給水活動も終了となる箇所が多くなってきている時期でした。「今日まで有り難うございました。帰ったら皆さんに有り難うございましたと、お伝えください。」など、本当に沢山のの人に嬉しい言葉や地元の手作りのお菓子など頂いたり、水を配っているのですが、ペットボトルの水を下さる方もいらっしゃいました。仕事の忙しさを、肉体的にも大変だったのですが、被災地で支援に来ているという実感できる業務だったと思います。

最終日は、立根小学校体育館で支援物資の搬入搬出・管理の業務に携わりました。この業務で感じたことは、被災地の方に何か出来ればと物資を送る気持ちは良いのですが、ただ、段ボールにこれが必要だろうと、いろんな物を送るのは、あまり良くないなと・・・感じました。避難場所からの要求が数のそろそろ物ばかりなので、仕分け作業も大変なのですが、要求が来ないのです。どうしても被災地に送る場合は、被災地に届く前に各自治体等で仕分けし送るべきだと思いました。あと、地元の名産品などを送るのも食生活の違いもあるので、どうかな？と思いました。

移動日を含めて8日間でしたが、メンバーに恵まれたなと感じました。この歳になって合宿生活の様なことは、なかなか無いと思います。食事の準備など普段、料理などしない者ばかりで大変でした。私の初めの業務予定では、給水作業は無かったのですが、半日だけでも携われないかと相談したところ、みんなで話し合い、日程を組み直して頂きました。結果、すべての業務に携わることが出来ました。これからも定期的に連絡を取り合えればと思います。

今回のような災害(津波)など無いのが良いのですが、これから先、何があるかわかりません。今回の災害派遣の経験を、いろんな形で役に立てればと思います。



自分の車を探しに多くの市民が訪れます

私は5月27日から6月3日まで、第12次隊として、活動した。

活動内容については、被災直後から今回の支援の代名詞となっていた給水作業が5月29日で終了するというところで、一抹の寂しさもあったが、テントでの生活者、2坪ほどの神社屋に夫婦で避難生活を送っておられる方などから、「ありがとう以上のことばを言いたいが考えつかない。」という感謝の言葉をもらい、給水しながら現場の惨状を見て復旧はまだまだ先のことだなあと感じながらも、約3ヶ月半、毎日続いた給水作業の最後を無事終え、使命感を果たした満足感を覚えた。

ローテーションの都合で物資の仕分けはしなかったが、印象として賞味期限切れのカップ麺類やレトルト食品が焦げ付き始めており、「贅沢な話だけど物よりも人手とお金が欲しい。」と漏らされた方もおられたようだ。確かに山積みになった種々雑多の品々が、物によっては減ることなく増えていくのを見ればそう思うのも仕方のないことだろうと思った。

5月30日から6月2日までは敷地内に約2600台運ばれてきている被災車両の廃車手続きと車体処分の手続きをしたが、がれきのごとく積まれた車体の中から、自分の車や行方不明の家族の車を必死で探される姿は涙を誘われた。また、ところどころにスプレーで×印が着いている車両には遺体があった印と言うことで、特にその中にチャイルドシートがあれば、亡くなったのは子供だったのかと想像してしまい、胸が痛くなり思わずシートをなでたこともあった。

活動期間中に思ったことは、想像する力を鍛えることが大切だということだった。防災活動のシミュレーションでもどうすれば全員が助かるか想像力を駆使して想定する。ある学校では避難所に指定されたところに一度集合したが、一人の教師が避難所も危ないと判断し、さらに高いところへ全員を避難させ、助かった事例も聞いた。もしそのまま最初の避難所にいて全員被災したらおそらく「ここまで津波が来るとは想定外だった。」ということになっただろう。想定外という言葉は想像力の欠如であろうと思う。

今後、PDCAサイクルで業務を展開していく中で、最終的にプラスの結果になるにはどうすればいいか想像力を駆使して計画実行していくことが、自分の業務遂行に役立つのではないかと支援活動に参加して学んだ気がする。



×印のついた車

6月2日から9日まで約1週間、大船渡市の災害支援業務にあたりました。

活動内容は、避難所での高齢者の方々への保健師の訪問の助手と、支援物資の仕分け・受け渡し、災害車両の廃車手続きの業務でした。

まず、1日目。花巻空港から大船渡市に入っていくと、どこが災害にあっているのかなと言う感じでした、しかし、海岸線に入ると壊滅状態でその光景を見ると、とてもショックを受けました。特に、大船渡市は漁業、水産関係の方が多く、海岸部の工場や住宅は全て被害に遭っていました、また、能代市から保健活動を引継ぐ際、三陸町吉浜地区にうかがったのですが、その地区は民宿の1軒だけしか被害にあってなく、なぜかと聞くと昔からの津波の経験で海岸部には家を建てないようにしているとのことでした。本当に昔の言い伝えは年がたつと忘れがちですが、大事な事だと思いました。また、大船渡市の隣の陸前高田市も行く機会がありました。そこは、町全体が災害にあい、全く無くなっていて、津波のすさまじさを感じました。

支援業務の内容ですが、物資班では、大船渡市の立根小学校の体育館で全国各地から届く物資の仕分け、在庫管理、被災者への受け渡しが主な内容で、被災者は市役所で受付をして、1週分の必要な物をもらいにこられ、それを探して渡していました。

1週間分という制限があり、例えば、オムツ等も配る方にすればこれだけかと思いましたが、市に聞くと平等に配らないといけないので1週間分だけと制限しているとの事でした。物資は、カップメンなど賞味期限が切れる物もあり、大量に余っている物資など、片寄りがありました、送るほうも考えて送らなければと思いました。

次に、車両班の業務ですが、被災車両が3千台ぐらい海岸沿いの埋立地に集められ、そこで、被災車両の廃車手続きが行われ、まず被災者がこられたら、車両の確認をするため3千台の中から所有者の車を一緒に見つけ、ナンバーが着いていたらそれを外して廃車の手続きを行う手順でした、被災されたあとすぐナンバーを外された方が大半で、なかなか見つからなく、見つけるのに2、3日通われる方もいました。まだまだ被災車両が放置されているのもあり、1日に20、30台ずつ搬入もありました。車両を見つて、タイヤをはずす手伝いをしている時、被災者の方が話されました、「津波当時、車検が終わったので車屋にとりに行き、タイヤも新品に換えてもらい、ガソリンスタンドで満タンにして家に帰る途中、津波に遭った。家も最近3400万かけてつくって、一瞬でなくなった。残ったのは借金ばかりだ。しかし、家族みんな生きていたので、それだけが救いだ。」と言われていました。被災者の生の声を聞き、本当に被災された方は大変だと実感しました。しかし、逆に被災者から、遠い鹿児島から応援に来てもらい「ありがとう。」と言われると反対に励まされた感じもしました。

たった約1週間の支援業務でしたが、第13次隊のみなさんと協力しあい、支援業務にたずさわれたことが自分自身にとっても大きな勇気と力を感じることとなりました。これから、大船渡市をはじめ東北地方が復興するまで長い期間がかかると思いますが、これからも支援し続けたいと思います。



地震と同時に火災も発生しました

保健師の派遣時は被災3ヵ月後の避難所と仮設住宅の被災者の健康管理ということで、6月2日から1週間の派遣期間で、9月1日まで大隅半島4市5町（鹿屋市、垂水市、志布志市、曾於市、錦江町、南大隅町、東串良町、大崎町、肝付町）から2名ずつ、15回に分けて保健師で支援を行っています。自分達以外の派遣として、自治医科大医療団、心のケア支援、岡山県、沖縄県保健所、理学療法士、薬剤師、栄養士会からも現地にきており、総合的な健康支援の体制をとっています。

私は、6月2日から9日までの間、派遣に行き、5つの避難所と仮設住宅の新規入居者の健康調査、相談を行いました。期間中は、雨が1日も降らず、冷暖房の必要のない大変過ごしやすい時期でした。

避難所では、被災者の皆さんも、既に仕事を再開し、避難所から通勤・通学している人もいて、午前中に避難所の清掃、洗濯、被災自宅の片付けや就職活動、役所への手続きなど、日常生活が始まっており、登録されている62人の避難所には、日中15人程度しか居ない状況でした。3ヶ月の共同生活の中で、お互いのいたわり、声かけ、お茶のみ場が出来ていました。

仮設住宅は、6月下旬から申し込み抽選順に入所が始まっており、仮設住宅での被災後生活での初めての世帯全体の健康把握と確認を行い、必要に応じ、健康相談や必要サービスへのケース連絡を行いました。住宅課からの入居情報を元に平日に訪問しても、昼間活動しているため、面会できない世帯もあり、派遣期間中の土、日曜日に訪問してやっと面会出来た世帯もありました。面会した方の中には、震災後、肉親を亡くし、仮設に入ってから孤独感の辛さを訴える方もあり、仮設住宅入所後の長い健康支援の必要性を感じました。

1 避難所での課題

一人に与えられた居住範囲はテレビでの映像で見られるように腰の高さのダンボールの壁で、一人分の広さは畳1枚程度、天井は区切られていない。

- ①プライバシー（睡眠障害：いびき、余震、物音、便秘、精神疾患の状況）
- ②自分が注意していても、周囲にかげ、インフルエンザ等の感染症にうつりやすい
- ③食事は、野菜や肉、魚など新鮮な食材が十分でないため、栄養面に偏りのある食事。血圧が高く、塩分に気をつけないといけないのにカップラーメン
- ④配給物資の不平等
- ⑤トイレ（小学生用、腰掛便器の欲しい高齢者→車でトイレに行く）
 - ※医療は被災証明があると無料だが、8月から国保保険証の再交付
 - ※市内バス（避難所によっては、バス停までの距離がかなりある）
 - ※デイサービス等の介護サービスが少しずつ再開されつつあるが、十分ではない。

2 仮設住宅での課題

プレハブ住宅が世帯規模別に作られ、抽選により入居が始まり、入居時、電化製品5点セットと家庭救急薬品の無償配布があるが、電気、ガス、水道料金の自己負担、物資配給の中止、コミュニケーションの不足等による孤独感がでる。

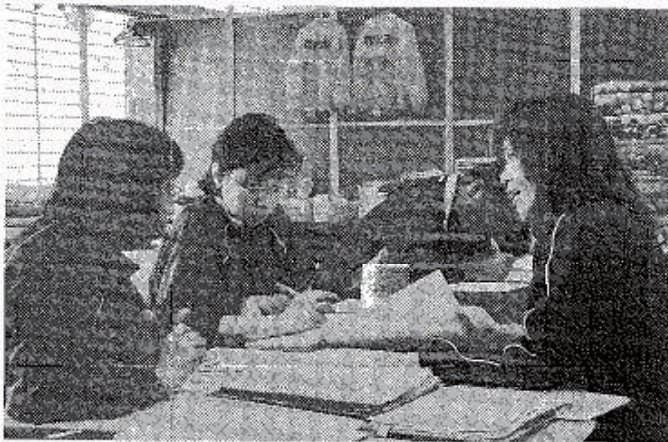
3 被災者と面接して

岩手弁という言葉の壁はあるものの、会話の中で必ず「わざわざ遠い鹿児島から来てくれてありがとう」と感謝の言葉がありました。

被災者の方から語られる被災当時の状況から、押し寄せる津波から逃げ、駆け上がる脚力、そして、長引く避難生活にじっと耐える忍耐強さから、「生きる」という、人間の底力に感動しました。また、この災害が自分の町で起こったときを想定したときの現在の防災体制に非常な不安と早急な体制整備の必要性を感じました。

今回の派遣は、肝付町の住民サービスに影響の無い時期を調整し、派遣していただいたことですが、自分の人生においても非常に貴重な経験になり、この経験を住民サービスへ還元していけるよう努めて行きたいと思えます。

復興支える「銀河連邦」



加盟自治体が連携

保健師業務などで引継ぎ

大船渡

大船渡市とともに加盟する「銀河連邦共和国」の各自治体が、連携を取り合いながら同市への支援体制を構築している。これまで、被災住民向けの保健指導は秋田県能代市の職員が行っていたが、長期化が見込まれる中、鹿児島県肝付町などで構成する復興支援チームが3日から引き継いだ。今後とも自治体間で人員を調整しながら復興を後押しすることになっている。

銀河連邦は、独立行政法人宇宙航空研究開発機構の関連施設を有する、または過去にあった全国6市町による交流事業。大船渡市のほか、北海道大樹町、秋田県能代市、神奈川県相模原市、長野県佐久市、鹿児島県肝付町で構成している。

東日本大震災以降、各市町では隣接自治体も交えたチームを作るなどして、支援を続けてきた。

菊谷さん⑥から保健師業務内容について説明を受ける大隅半島支援チームの職員②三陸町

地区公民館に3日、大隅半島チームの職員が訪問。保健師による訪問活動や支援物資管理などの引き継ぎが行われ、担当者同士で日々の活動内容や注意点を確認した。

能代市の菊谷文字保健師は、3月下旬と5月下旬にそれぞれ5日間ずつ派遣され、避難住民が身を寄せる施設や住居などを回った。「避難所から仮設住宅に移っても、孤独になることで、ストレスや過度な飲酒につながるケースもある。心のケアは継続して行うことが大事」と語る。

大船渡で支援業務を続けている能代市の尾張政克行政改革推進室長は「多くの世帯でライフラインが復旧した中、今後は介護分野のケースワーカーや道路設計、耐震など、専門的な人員の必要性が増す。銀河連邦の枠組みによって、手が足りない時はお願いしやすい雰囲気がある」と話している。

各自治体では、市役所活力推進課内に担当職員を配置。相互に連絡を取り合いながら、求められる支援に応じた人的配置を調整している。

秋田県能代市では、3月14日から保健師派遣を続けてきた。加盟する自治体間で相談したところ、今月からはこれまで給水など別業務の支援を中心に行ってきた。肝付町などで構成する大隅半島4市5町復興支援チームが担うことになった。

能代市が拠点としている三陸町吉浜の古浜

今回、「復興に少しでも役立ちたい」という気持ちと「被災地の現状を実際この目で見たい」という思いで参加させていただきましたが、被災地は想像以上の広範囲にわたり、壊滅的な被害を受けており、復興への道のりの険しさを改めて感じる事となりました。

ただ、がれきは山積みになっているものの徐々に取り除かれつつあり、仮設住宅の建設も急ピッチで進んでいて、少しずつではありますが復興が進んでいることも感じました。また、現地では多くのボランティアの方々が支援を行っており、中には自分も被災しているにもかかわらず、何もしないよりは少しでも復興の役に立ちたいという方やアパートを借りて住み込みでボランティアをされている方もおられて、人としての助け合いの精神のすばらしさやありがたみを感じることができました。そのような中、たった1週間という限られた中で、自分はどれだけ現地の役に立てているのだろうかという思いもありましたが、「遠いところからありがとう。」等と暖かい声を掛けられ、逆にこちらが元気ももらいました。

今回の派遣の経験を役場での業務にどう役立てられるか分かりませんが、少なくとも今後のような大災害の際に行政を行ううえでは悲観的な考えではなく、大船渡市民の方々のような前向きな考えを持つことが大切であり、早期の復興につながるのではないかと思います。



まるで爆弾が落ちたかのような現状

私は大隅半島4市5町復興支援第15次派遣隊として、6月14日から21日まで支援活動を行いました。

岩手花巻空港到着後、すぐに宿舎の猪川地区公民館、そして物資班の作業箇所立根小学校体育館に行きましたが、車の中から見える光景は本当に被災地なのか？と思ってしまうくらい普通のものでした。しかし、2日目に警備班の撤去車両仮置場へ行く途中から、テレビで見ていた光景が広がってきました。建物は壊れ、道端や学校の校庭は瓦礫の山、海の中に家があり、そして道路には船が…。日常生活では考えられない事ばかりで、今回の津波の凄まじさを感じました。

そのような中、私たちは3つの班に分かれて支援活動を行いました。

【物資班】

立根小学校体育館において、救援物資の搬入・搬出に伴う在庫数の管理及び食料品を賞味期限ごとに分別する作業をしました。体育館一杯の物資を見たときは正直とても驚かされました。

【警備班】

撤去車両仮置場において、被災車両を探す方や車両搬出業者等の来場者対応をしました。焼け焦げたり、原形の無い3千台を越える車両の中から探しだせた時は嬉しい反面、所有者のことを考えると複雑な気分でした。

また、仮置場は海沿いの埋立地ということもあり、打ち上げられた魚の腐敗臭や大量のハエ等、作業以外のことが大変でした。

【銀河連邦班】

2日間にわたり衣類や食料品などの救援物資の無料配布を行いました。土日だったこともあり、休憩や昼食をとる暇がないほど大盛況でした。

今回の復旧支援は8日間と短い期間でしたが、被災地を実際に目にすることができた事、被災者の方から震災当時の状況を聞いた事、15次隊のメンバーをはじめ現地ボランティアなど多くの方と知り合えた事など、本当に貴重な体験をすることができました。

今回の支援業務で学んだことを活かせるようにしていきたいです。大船渡市をはじめ、被災地の一日も早い復興を願っています。



被災した路線バス

- 1 派遣期間 平成23年6月20日～27日
- 2 派遣人員 10名(保健師2名含む)
- 3 支援内容
 - ・ 救援物資の搬出・搬入等(大隅担当施設の立根小学校体育館においての作業)
 - ・ 救援物資の一元化作業(救援物資を保管していた6つの小・中学校から物資集約の一元化を図るため、市民体育館への支援物資の搬入作業)
 - ・ 被災車両の引き渡し(津波等で被災した車両の引き渡しなど)
- 4 派遣の目的
 - ・ 被災地の復興を支援したい。
 - ・ 被災地の市役所の復興業務について把握したい。
 - ・ ボランティアの方々の気持ちを知りたい。
 - ・ 一緒に派遣される大隅地域の方々と交流を図りたい。
- 5 作業内容
 - ・ 救援物資の搬入・搬出作業等で少しは貢献できたかと思う。
 - ・ 被災地の市役所職員の業務も災害当初からすると落ち着きを取り戻しながら作業をしている感じがした。以前から交流のある1名の職員は落ち着きを取り戻しているようであった。別な知り合いの人は、三陸町で「道の駅」に勤務しているが、職場は被災しなかったが、家は流されて親戚宅に寝泊まりしているとのことで「たまらんですわ」と言っており、とても気の毒であった。その職場に勤務する3名とも家が流されたとのことで疲労感を感じた。
 - ・ いずれの作業も、ボランティアの方々と一緒に作業を実施したが、皆さん一時も手を休めずに作業をしており、その気持ちのすばらしさに感動した。日本人はすごいと感じた。村の精神が息づいているのだろうか……。
 - ・ 今回、かねて交流のない他市町の職員と8日間一緒に行動を共にしたが、目的がはっきりしており、リーダーがしっかりした方であったので、職員間のコミュニケーションもしっかりとれた。
- 6 今後の対応
 - ・ 被災された地区は海岸と接しており、海拔の低い地区での浸水が多い。逆に高台はほとんど被害が無く、大きな差が見られた。建物等の建設に当たり、土地等の問題もあろうかと思うが、やはり政府が検討しているように高台への家等の建設はとても大事であると思う。それと、津波に敏感に対応した地域とそうでない地域で差が出たようである。津波警報が発令されてから高台への避難に地域で温度差があったようだ。普段からの危機意識の持ち方がとても大事である。
 - ・ 早い機会に津波被災のシュミレーションと津波避難訓練の実施をしたらどうかと思う。



津波避難場所まで波が押し寄せました

大船渡への保健師派遣の必要性が確認され、6月上旬から4市5町より派遣が決定。私は16次隊として6月20日～27日の派遣となりました。

現地業務は仮設住宅訪問と避難所の巡回相談。原則、保健師業務について①後続の隊に引き継ぐ事はしない、自分の隊で完結する。②通常の市役所業務の上に被災地業務と苦情があり、頭と体が疲弊しきっている大船渡市職員に「判断させる」、「する必要のある突きつける」ことはしない、としました。それは引き上げの時を考慮してのものです。自然の脅威を知り、また計り知れない恵みももたらしてくれる事、生かされている事を東北の方たちは知っており、お土地柄が恨まず、耐えておられるように感じました。

三陸町の山村広場の仮設住宅を訪問した時。訪問の別れ際に、手を強く両手でつかむと肩を震わせ泣かれた独居の70歳男性。明るい話から涙が想定できなかったが、不安と孤独が噴き出し、大人にも抱きしめてくれる人が必要だと強く感じた。「つらいときはいつでも来ますよ。」と言えたら。ひとしきり泣き、いつもは「ほんなら、また。」で終了する訪問が「ほんなら、帰ります。」と元気に言って仮設を出た。互いに思いを引きづらない精一杯のあいさつでした。

80代ご夫婦世帯を訪問。「この健康調査票は大船渡市にお渡します。連絡があるかもしれないです。」と言うと「・・・連絡は来ん。市(の職員)はここには来んよ・・・。」合併した小さな町であり被災に関係なく見捨てられた感が伝わってきました。「いえ、市職員は今は疲れきっていますが三陸町の事を考えています。大切に思っています。」すると、私をじっと見つめ「そうだな。」・・・私「はい、そうです。」力強くでてきたことばに自分でも驚くほどでした。肝付町の内之浦地区と重なり、大船渡市職員もきっとそう言われると直感したからです。不思議と後日、外でお会いし「清助さん、こんにちは。買物ですか。」と声をかけると、最初わからないご様子だったが、鹿児島島の保健師とわかると両手をつかみ、「私の名前を覚えていたか。」とずっと離されませんでした。“忘れ去られる”思いをさせたくない、継続して関われないつらさとこの地を愛おしく思いました。

67歳女性独居。老舗家業に縛られ、夫が亡くなった後も母娘で親戚の言うとおりに家業を守った。津波の後、娘は東京に出た。あの娘らしく生活しています。がんじがらめだったので良かった。私もきつい仕事で腰が曲がった。ずっと腰は曲がり続けるだろうと話された。なぜ、腰にこだわられるのか、きつと、何も残ってないが、この体には自分の気持ちを封じ込めてきた以前の生活が事実として腰にのしかかっている。仮設並びの向かいには親戚もあり、やはりこの関係は下ろしきれない。背負っていくお気持ちの表現だったのだと後日気づきました。私達のように何気ない日常の中で、不満に思っている事に触れさえしなければ生活できる。しかし、つながりの痕跡もなくなった被災地では、ここに在ることの意味を考え、家族の形も変わることがあるんだと切なくなりました。

大船渡での最後の夕食。私達の54歳隊長は、ボランティアさん、自衛隊の方と作業を共にする中で、「僕ははじめて人を好きになりました。こんなに人を好きになったのははじめてです。」と。その時の36歳の対策本部長は「人を再生できるのはひとである。ひとでしかありえない。」と。派遣は多くの出会いとこの上ない学びとなりました。

ありがとう



仮設住宅巡回の様子

私は、平成23年6月26日から7月3日まで第17次派遣部隊として従事させていただきました。

6月26日の朝6時に家を出発し、鹿児島空港から伊丹空港で乗り継ぎ、花巻空港へ午後2時に到着し、迎いの10人乗りの肝付町公用車で大船渡市へ向かい、午後4時に宿舎に到着しました。途中、津波で被災した場所を目にしましたが、その悲惨さに言葉を失いました。普段テレビで報道されている映像によりある程度の予想はしていましたが、実際にしたものは、それをはるかに超越するもので、心を痛烈に殴打された気持ちになりました。

人間は地球上の全てのものを変えてきました。また、これからも変えていくでしょう。しかし、その変化は、決して自然に逆らうものであってはならないもので、自然と協調するものでなくてはならないことを、今回の津波により学ばなければいけないと思います。また、今後のエネルギー政策のあり方や災害避難訓練の大切さなど、いろんな教訓として後世に役立てていくべきだと思います。また、そうすることが亡くなられたり、行方不明なっている2万人の方々の無念を晴らすことになると思います。

今回の災害派遣で、市民の方々、ボランティアの方々と共に働くことにより、命の尊さ、生きる力の逞しさ、助け合いの精神、人のやさしさなど通常の研修では絶対に感じることはできないたくさんを心で感じ、考えることができました。或る日、災害公用車のブレーキランプが切れていたため、小さい修理工場に持ち込むと、鹿児島から災害派遣で来ていることに大変感激され、待っている間、おにぎりやゆで卵、お菓子や飲み物までご馳走になり、修理代金まで「あんたらからは貰えない。私らは食べるだけの仕事とお金はあるから、気持ちだけ本当にありがとう。」と、取ってもらえませんでした。私はこの時「ありがとう。」という言葉のあり難さ、大切さを心から感じました。

私は、今後の仕事や人生においてこの「ありがとう。」という感謝の気持ちを忘れることなく、しっかりと住民の方々に言えるような職員になりたいと思います。今回大船渡に派遣していただき本当にありがとうございました。



宿舎前に立てられていた看板

大隅半島4市5町復興支援チームの活動に早く参加したいと思っていましたが、仕事の関係で時間がとれず、7月に入りやっと参加することができました。

7月の大船渡市は、すでに仮設住宅への入居が始まり、ライフラインも復旧し、がれきの撤去なども進み、支援内容もこれまでの支援物資の仕分け・給水・被災車両の管理などの業務から、被災された方に全国各地から寄せられた義援金を配付する事務の補助に変更なっていました。この事務も被災された方にすこしでも早く、全国からの善意を届けるためにも重要な事務です。

大船渡市役所の一会議室を専有しての作業で、そこにはクーラーの設備がなく、全国から集まった派遣職員もうちわを片手に一生懸命取り組んでいました。

この時期は大船渡市も梅雨が明けており、かなり暑い日々が続いていて、仮設住宅などでは熱中症対策に扇風機が必要で、市内の家電量販店には一台も在庫がなかったのが印象的でした。暑くなり、熱中症対策・ハエや蚊の衛生面での対策も必要になってきていました。

今後、私たちの役目は、被災地が求める支援をタイムリーに行う体制づくりが必要だと感じさせられることでした。そして、大船渡市の職員の方が言っていた、「地震発生時は、被災者に配るおにぎりに使う“塩”が足りなかった。」は支援する立場としてつくづく考えさせられる言葉でした。



避難所に提供された扇風機の一部。皆様からの義援金は物資の提供に使わせていただきました

7/14木 移動・引継ぎ 7/15金 義援金配分事務
 7/16土 AM:義援金配分事務 PM:視察 大船渡・陸前高田・気仙沼
 7/17日 視察 大船渡・釜石・大槌 7/18月 AM:義援金事務 PM:視察 碓氷海岸・大船渡漁港
 7/19火 義援金配分事務 7/20水 AM:義援金配分事務 PM:地区公民館インターネット環境構築
 7/21木 移動

テレビや新聞、これまで派遣された職員の話聞いてある程度の想像や予想をして望んだ。少なからず予想された範囲内であったと感じた。被害は地震で受けたものはほんの僅かなものであり、ほとんどが津波による災害であった。それを証拠に津波が到達しなかった部分では表面上は震災前の日常的な生活に戻っている。建物等の被害は避けられなかったにせよ、津波の到達までの時間を考えると、避けられた人災だったのだろう。もっともこの地区ではこれまでも津波による被害を受けている場所だけに日頃から津波からの防災意識は高かったはずだが。想定し得ない災害をどこまで想定するのか。肝付町ではこれまで津波による被害はないが、水害や土砂災害については被害レベルの上限値を想定以上に見直さなければならないのは必須だろうし、被災を想定した避難訓練を全町的に行わなければならないのではと感じた。当たり前ではあるけれども被災する前に被災した時のことを考えておかなければ助かる命も助からないということだ。

支援内容としては義援金(建物損害)の配分に掛かる業務であった。ここでは1次的な被災者側に立った支援に比べて、申請のあったものに対して正当なものであるかどうかを被災者と対峙して行う行政側の支援であった。これは喜ばれることはあまりなく、書類不備により被災されている方の手を煩わせることであったり、正当性が薄く、配分できないことを理解してもら(当然理解はされない)ように説明するものだった。被災している街の住民と職員が直接対峙するのではなく、第三者である派遣職員が双方の緩衝材の役を期待されていたかはわからないが、そうになっていたと思う。ただ今回の派遣内容であればもっと長期的な派遣が望まれているし、実際に従事してみて短期間ではかえって迷惑をかけるのではないかと思えた。

派遣業務とは別に、自分が通常行う業務の観点から見ると、データの分散化や復旧手段、様々なデータとの連携、復旧に向けての利活用、全てにおいて不足していると感じた。これは大船渡市が十分ということではなく、どちらかといえば不足していると感じたので、実際に現場を視ることが出来たのは私にとっては有意義であったし、これを肝付町の防災計画に則した、実のある電算業務の事業継続計画(BCP)策定に繋げたい。

これまでの派遣業務の内容と変わってきたことから大船渡市以外の被災地を視察させていただいた。陸前高田市、気仙沼市、釜石市、大槌町。どこも被災した部分は壊滅的で悲惨な状況ではあったが、やはり役場と職員まるごと被災した大槌町に着き、現場に降りると、何ともいえない大きい静かな恐怖で背筋が寒くなった。ここに同じ仕事をしていたはずの方が一瞬で居なくなってしまった。やはり自分に身近な場所や人、環境が被災している状況を見ると、「明日は我が身」という思いが強くなり複雑な心境になった。

最後に人間は忘れることで救われることもあるが、忘れてはいけないこともある。今回の震災は忘れたくないし、忘れてはいけない。現場はいまだに凄惨である。



情報発信に活躍した「おおふなと さいがいFM」

7月からはそれまでの現場支援から義援金の支払い事務等に仕事が切り替わっており、自分の思っていた体を使う作業とは違い、事務作業をするとの事で支援に行く前は不安を覚え、また被災された方々と直接ふれあう機会があるのかと考えながら現地へと赴いたが、大船渡市役所内の事務所には各都道府県の市町村職員が復興支援に来ており、大船渡市の職員だけではなく、多くの地域の職員と交流する機会に恵まれた。また、7月26日に鹿屋農業高校の生徒が太鼓の演奏をするとの事で24日に綾里地区の仮設住宅へ周知のビラを配布した際に入居者の方々と話す機会があり、当時の状況や今の状況を聞く機会があり、その中で、義援金の配分方法や支払時期、救援物資が公平に配られていない等の意見も多くあり、復興事務に従事する難しさを体感することが出来ました。

今回の復興支援に参加して多くの方の体験談や自分の体験を通して、非常事態が起きたときに必要なことはまず備えをしておくことであり、それは個人単位ではなく、まとまった数の備えでなければ効果が薄いこと、もし大きな災害が起こった場合に市町村職員として大切なことは問題に直面してから考えたり、準備をするのではなく先の先を読んで行動していかなければ対処していけないということ等、多くのことを学ぶことが出来たので、今後の業務、生活の中で活かしていければと考えています。

そして、東日本大震災で被災された地域が少しでも早く復興し、被災された方々が以前の生活を取り戻せるように今後も協力できることには積極的に協力していきたいと思えます。



義援金申請受付事務の様子

出発当日、やはり不安な気持ちが大半を占めており、何が不安なのかも良くわからず、鹿児島空港到着。他の市町の支援隊の人達と初顔合わせ。一番年下だったせいもあり、期間中皆様には大変良くして頂き、感謝・感謝。こういう所でも人の繋がり大切さを痛感。

一関駅に到着し、今までの派遣隊の思いが詰まった支援車輛に乗り込み一路、大船渡市へ。一時間ぐらい走り、対して普段と変わらない景色に安堵を覚えながらも、気仙沼市に入った辺りから景色が急変。思わず身を乗り出し辺りを見渡し、その惨状に息を呑む。陸前高田市に入ったころには、あまりの酷さに声も出ず。ただ、この惨状を目の当たりにし、出発時覚えていた妙な不安感は完全に消えて、この地域のために何かしなければと思いでいっぱいだった。

手短かに前隊との引き継ぎを終え、この日行われる綾里地区での鹿屋農校太鼓部による演奏会に参加。住民の方に会ったら何て声を掛けようかと思いつながら、答えもまとまらないまま現場に到着。準備の途中、続々集まって来られる住民の方から「鹿児島からでしょ？遠い所から本当にありがとう。」と声をいただき、これもまた何か良く分からない感情が込み上げてきて、うるうる。思ったよりも皆、笑顔が多くて何となく一安心。しばらくして演奏会が始まり、会場が一体となった素晴らしい演奏会に、「鹿屋農校生、最高！綾里地区の方、最高！復興支援隊のみんな、最高！」と一人で感激しながら、ここに立ち会えた事が、本当にありがたかった。

翌日からいよいよ本格的な復興支援。大船渡市役所に行き、るる説明を受ける。実際この期間中、私は弔慰金の担当として仕事をしたわけだが、特に住民の方と接する事もなく、書類審査だけでそれをしたからと言って直ぐに住民の方に弔慰金が渡るわけでもなく、何か釈然としない気持ちで従事していた。これも当然必要な仕事なのは分かっているが、本音を言うともっと目に見えて分かる仕事をしたかった。それは、自己満足と言われるかもしれないが。大船渡市も当然、その他の被災地を見て回った時に、その思いはもっと強いものとなった。目の前に広がる惨状に、何もできない歯がゆさ、無力さだけが心に残り、後ろ髪をひかれる思いで被災地を後にした。帰鹿する前日、近所の方が「感謝の夕べ」なるものを開いて下さった。手造りの料理を振舞っていただき、本当に恐縮するばかりだった。この方をはじめ、他の被災者と自分がもし同じ立場であったならこの様な対応ができるのか考えるといささか不安ではあるが、今回この地で過ごした8日間は自分を人として一回り成長させてくれたことは間違いない。テレビや新聞の報道ではなく、実際自分の目で見たという貴重な体験をさせていただいた。本当に一日も早く復興し、心の底から笑える日が来る事を願うばかりである。



鹿屋農業高校和太鼓部による仮設住宅慰問が行われ、多くの方々に喜んでいただきました

震災から約5ヶ月が過ぎた8月1日、復興支援チームとして大船渡市に到着。今回のチームは比較的年齢層が若く、自分と似通った年のメンバーが集まったこともあり、打ち解けるのに時間はかからなかった。真夏の中での従事ということで猛暑の中での作業、生活を覚悟していたが、夕方5時頃に到着したときにひんやりとした空気を感じ、朝は少し肌寒く感じるほどだった。日中もそれほど暑さを感じることも無く、作業に従事することができた。

支援業務は、大船渡市役所内での事務作業。全国各地の自治体から派遣されている職員と合同で、災害義援金、弔慰金等の申請受付及び審査を経て給付までの事務に従事した。受付は概ね終了しており、その書類審査及び支払い事務が主な仕事だが、申請書の訂正や書類不備などで中々支払いまでいけないものが数多くあり、申請から支払いまでに時間がかかっているのが現状だ。義援金や支援金は被災者の生活再建に深く関わってくるので、出来るだけ早く住民の手元に届く様な体制作りが必要であると実感した。

市役所の休庁日には、被災地を見て回った。大船渡市役所周辺はさほど被害を受けたようには感じられなかったが、港の方に近づくと、積み上げられた瓦礫の山を目にするようになった。陸前高田市に入ると広大な更地が広がっていて、以前そこに街があったとは思えないほどの光景だった。気仙沼や釜石ではまだ手もつけられていないような場所が数多くあり、震災の傷が色濃く残っていた。メディアを通して知ってはいたが、直接現地に立つと、この震災被害の甚大さを思い知り、復興までの道のりはかなり遠く感じた。それでも一歩ずつ進んでいかなければならない被災地への方々へ、この先も出来る限りの支援を継続していくことが必要だと感じた。

8日間という短い期間だったが、現地を見て、微力ながら復興支援の一助となれたことは自分にとっても貴重な経験となった。今回感じた気持ちを今後も風化させることなく、自分に出来る支援を続けていきたい。



被災した陸前高田市役所

今回、大船渡市の方へ第24次復興支援チームとして行きました。3月11日に、東日本を襲った大震災をテレビで見ている、町や市や空港を津波が飲み込んでいく光景に愕然としたのを覚えています。その地へ支援チームとして行くことに、ただ不安だけが頭をよぎり、正直な気持ち行きたくなかったです。8月7日朝早く、鹿児島空港でチームに合流して、夕方大船渡市へ無事到着しました。大船渡市へ行く途中で、気仙沼市や陸前高田市を通過した時に、津波の被害の光景を目の当たりにした時、言葉がなくなりました。大船渡市に入ったら、やはり沿岸部はかなりの被害でした。鉄筋の建物は、中が津波にやられて空洞になっていて、木造の建物は土台だけが残っている状態でした。所々に瓦礫の山があり、悪臭を放っていました。テレビで見ると、実際に自分の目で見るのとでは、全然違いました。月曜日から大船渡市役所で、貸付班という係で仕事を始めていきました。貸付班は4人体制で、和歌山市、能代市、南大隅町、肝付町の4人でした。貸付の内容は、世帯主の負傷の有無、住居の半壊・全壊などで、貸付金額の限度額が変わるものでした。最高額が350万円で、償還期間は13年（うち措置期間が6年）でした。実際に、市役所に来庁されて貸付の申し込みをされた方が、1週間で5名、電話相談などが6名、保留された方が2名でした。本制度は、東日本大震災の特別措置として、被災された低所得者を対象としたものでした。家を失い、仕事も失い、そして家族、親戚を失った方々が、貸付の申し込みをされるのを見て、心が締め付けられる思いでした。

土曜日は休みだったので、大船渡市の公用車に乗り、みんなで北へ向い、釜石市や大槌町を見てきました。釜石市では、かなり大きな船が津波で陸地に打ち上げられていて、建物の所々に赤いスプレーでバツの印がついていました。（バツの印は、そこで死亡された人がいた印です。）大槌町では、防災無線で最後まで避難を呼びかけなくなった女性職員の話を聞きました。この女性職員の放送でたくさんの命が救われたと思います。釜石市と大槌町ともに、大船渡市より復興が進んでいない感じをうけました。夕方には、次の支援チームが到着し、引継などを済ませ、みんなでカレーを食べました。第24次隊のメンバーと、1週間という短い期間でしたが楽しく過ごすことができました。そして、8月14日の日曜日の朝、大船渡市の猪川地区公民館を出発し、午後8時すぎに無事、家に着きました。とても疲れましたが、とても貴重な1週間で過ごすことができました。

最後に、東日本大震災で亡くなった方々のご冥福を祈り、大船渡市のみなさんが安心して暮らせる日が、1日でも早くおとずれることを祈っています。



津波で陸地に打ち上げられた船

8月13日、肝付町を6:00に出発し、鹿児島空港で7名と合流。鹿児島空港9:00出発～羽田空港10:40到着～(モノレール)～浜松町～(山手線)～東京駅12:40発～(東北新幹線・やまびこ281)～一ノ関15:19到着～大船渡猪川公民館18:30に到着。到着後すぐに、岩手日報新聞(応援Tシャツ)の取材を受ける。その後、第24次派遣隊と書面及び口頭にて引き継ぎを受ける。五葉温泉にて入浴後、宿舎で夕食(イカ入りカレー)をすませ、23:00就寝……。移動でみな疲れ、すぐに熟睡。

8月14日朝5:00起床、6:00に24次隊と朝食。その後6:50に24次隊帰隊。その後姿には勇者の風格を感じ取れた。御苦労様でした24次隊みなさん。24次隊見送った後、8:20被災地を視察に行く(気仙沼・陸前高田・大槌)テレビ、新聞では見ていたが、実際自分の目で見て驚いた。町が無くなっている、残っているのは、瓦礫の山と家の基礎だけ。自然の怖さ、津波の怖さを実感した。肝付町も太平洋に面している場所がある為、いつ同じような災害が起こるかわかりません。私達職員も防災・災害に対して、今一度見直し、意識づける必要性がある。

8月15日(月)晴れ。5:00起床、6:00朝食。8:00大船渡市役所へ出発。8:10到着後、市役所別館へ移動。8:30業務開始。私の業務は災害援護資金の貸付の係でした、制度の概要は被災世帯の生活再建のための資金を貸付けるものである。貸付けの際は、将来的に大船渡市の負債とならないように留意すべきであると資料にあった。これを基礎に被災者の方々に貸付をし、被災者は最高額借りられる。申請に来られた中には自分のネーム見て、遠い(鹿児島)所から来てくれて支援、有難うといわれ、嬉しかった。この業務は8月14日～8月19日までで1週間過ぎるのが早かった。

8月14日には猪川公民館近くの地元の熊谷さんと小西さん二人が、夕食(冷し中華)を作りに来られ、25次隊みんなで食事を取る中、震災について話す。小西さんは生きていただけで有難いと話された。私達も前向きに頑張ってくださいと伝える。

8月19日17:00、会議室で記者会見に出席(大船渡の災害報告)。18:20分、市長室で肝付町で作った大船渡復興支援米を渡す。市長は肝付町さんには震災が起きてから支援頂き有難い、支援米は大切にに使わせて頂きますと言われた。(支援米・学校給食用。144俵)

第26次隊は、大きな余震があった為、新幹線が1時間30分遅れる(15:30地震発生時刻)。19:40から第26次隊へと引き継ぎを行う。その後20:00夕食。(26次隊皆さん不安一杯の顔していた。第25次隊も当初は同じでした。)

8月20日5:00起床。6:00第26次隊と朝食を取る。7:00第25次隊帰隊、第26次隊の見送りを受ける。一ノ関駅9:56発(東北新幹線・はやて218)、東京駅12:28着～(山手線)～浜松町～(モノレール)～羽田15:10発～鹿児島17:05着～肝付町19:00着で、建設課の出迎えをうける。休み中、有難う御座いました、嬉しかったですありがとう!

今回の第25次隊の隊長として支援行きましたが、色々な責任もありました。被災地の方との絆そして25次隊の絆が深まりました。皆さんの優しい気持ちは、忘れませんありがとう、また何処かで会うのを楽しみにしています。



現地の新聞に紹介され、
問い合わせが殺到しました

私の参加した8月13日からの第25次派遣では、ちょうどお盆と重なり、被災地のあちこちで被災者に対する供養が行われていた。それは同時に、被災した人達にとって一つの区切りとなっていたように感じた。震災から5ヶ月が経過し、町は落ち着きを見せていたように思う。小学校や公共の場にはたくさんの応急仮設住宅が建設され、津波で破壊された建物もほとんど撤去が進んでいた。お盆という事もあり、県外から多くの帰省者が見られ、家の在った所に花や線香をたむける姿やお寺に向かう人の波が印象的だった。

私は派遣の間、「大船渡市災害援護資金」に関する事務に携わった。震災・津波による被害を受けた世帯に資金の貸付を行う制度で、被災の状況により最高350万円までの貸付が行われる。「災害弔慰金に関する法律」が根拠法令となっており、今災害に関しては下記のような特例が適応されていた。

- ・通常は連帯保証人をつけなければ貸付は行われませんが、この災害に関しては、連帯保証人を必須としていない。
- ・据え置き期間が6年（通常は3年）
- ・据え置き期間後の貸付利率が1.5%（通常3.0%）

受給者の年齢や所得の下限要件（上限あり）も無く、書類の不備が無く、必要書類が揃えば比較的簡単に貸付審査を通していった。これは、資金を必要としている人になるべく早く手元に渡せるようにするためだ。だが、この資金の原資は国2/3、県1/3となっているものの、その資金を大船渡市が借りうけて、被災者へ貸し付ける仕組みになっており、償還が遅れた場合は、市の負債となり得る。必要としている人に資金の貸付を行うことと、この資金を貸し出すことは、不良債権をつくりだしかねないか？という葛藤を感じた。今後、被災地は様々な負債を抱えていかなければならない。震災で離職をされ、資金を必要とする人も多い。このような性質の資金に関しては、国が責任をもって行う必要があるのではないかと感じた。

この活動を通して一緒に参加した他市町の方や、宿舎周辺の住民の方、大船渡市役所の方、私たちと同じように他の自治体から派遣されている方... たくさんのお会いがあった。また、大船渡で印象的な言葉や話に出会えた。

・4市5町で共に活動した方

8日間生活を共にすることで、連帯感のようなものが生まれた。大隅出身というだけで全く面識の無い人が、遠く離れた東北の地で交流できたことは、大きかった。また、この繋がりは今後も続くものにしたい。

・他の自治体から派遣された職員

大船渡市には、全国各地の自治体から支援が入っていた。（宇部市・光市・甲賀市・堺市・和歌山市・能代市・大館市...）。私は、和歌山市と能代市の職員と共に仕事を行った。鹿児島弁と関西弁と東北弁が交ざり合いながら仕事をするのは、滅多に無い経験だった。また、通常業務とは異なり、日々の仕事内容も異なっていたので、互いにそれぞれの考えやとらえ方を確認しながら、事務にあたった。和歌山市の職員の方が、お客さんが帰るときに「おつかれさまでした。お気をつけて...」と必ず言っていた。関西圏では通常なのかもしれないが、「お気をつけて...」の響きがとても気持ち良かった。真似してみようと思った。

・大船渡市民の方

「鹿児島からありがとう。」という言葉は何度もかけてもらった。震災直後の給水や物資の仕分けは、地元の人からとても感謝されているように思えた。また、近くに住む元気なご老人「熊谷さん」から夕食を作ってご馳走してもらった。熊谷さんの話や言葉は深く印象に残っている。

「戦後に比べると今の状況は甘えている。」

「海は色んなものを奪っていった。でも海からの恵みで生きているから海を憎む事はできない。」

→昔、国語の教科書ででてきた話

庄屋さんが、山の上の田んぼに米を作っていて、掛けぼしにしていた時に、大きな地震が発生した。町の人には慌てる様子もなく、津波など心配する様子もない。庄屋さんは津波がくることを知らせる為に、自分の稲に火を着けた。火事に気づいた人は、火を消すため丘に上がり、津波の害を受けずにすんだ。

この活動をとおして、津波の恐ろしさ、悲惨さを実際、目にする事ができた。自分の町に起こったら...と考えると恐ろしさを覚える。見てきた事をなるべく多くの町民の方に伝えないといけない。同時に、津波・水害・桜島の火山活動... 色々な災害にどうやって対処しなければならないか、考えておかないといけないと思った。また、これまでの災害の記録や言い伝えなどを調べておくことも大事である。

被災地では、5ヶ月が経過し、状況を受け止め、復興に進んでいるようにみえた。同時に不平・不満もあるようだった。頑張っている分、辛いことや耐えられないこともたくさんあると思う。そのことに対して私たちが出来ることはあるのだろうか。地域で解決しなければならないところが大きいのではないか。肝付町においても地域力を高めておくことは非常に大切だと感じた。



何回も地元の方々が夕食を作りに来てくださいました

「大船渡に行ってみよう。少しでも大船渡の役に立てるのではないかな。」という浅はかな考えで復興支援チームへの参加の名乗りをあげていましたが、「最後のチームの一員」として行くことになるとは、思ってもみないことでした。8月25日（木）第27次隊は、空港での顔合わせ後、飛行機と新幹線を乗り継いで岩手県一関市へ到着、そこからは車で大船渡市へ向かいます。途中、テレビでよく目にした被災地である気仙沼市や陸前高田市を通りますが、陸前高田市へ入った途端、「わっ」と声があがった後、しばらくの間は誰も声を発せられませんでした。「街がなくなった。」というナレーションを耳にしたことがありましたが、まさにその光景が車窓に広がっていました。

26日（金）は、大船渡市役所で「義援金等にかかる事務」に従事しました。ちょうど支払いの不備が明らかになったところであり、これまでの申請書等の見直しをしましたが、何千という申請書の被災内容は、もちろんではありますが「家屋全壊」、「世帯主死亡」、「行方不明」といった文字が書かれています。改めて「被災地にいるのだな。」と思われました。

27日（土）と29日（月）、30日（火）は、大船渡市民体育館で開催された「支援物資の配布」に従事しました。市民体育館も津波に襲われた建物でありましたが、体育館としての最低限の機能が残ったこととその広さから、つい先日まで遺体安置所として使われていたそうです。（棺が残されていました。）

さて、物資の配布は被災者の方々とふれあう（深く話にはできませんでしたが）ことのできるまたとない機会でした。また、「あんた、生きてたの……。無事でよかった。」と久しぶりに再会したのでしょうか、手を取り合って、抱き合って、話をされる様子が今でも思い起こされます。

28日（日）は、大船渡よりも北部（釜石、大槌、宮古等）を視察しました。国道45号を走ったのですが、坂を上り、坂を下るとそこは被災地という状況でした。

31日（水）は、次回行われる物資の配布に向けて、物資の搬入等の作業に従事しました。ちなみに市内の小中学校の体育館におかれていた物資は、この日、立根小学校（支援チームが搬入、管理をしていた学校）からの搬出を終えて、子ども達に体育館を返すことができました。

第27次隊は、最後の支援チームということで30日（火）の猪川地区の方々との「感謝とお別れの会」をはじめとした棚ぼた的なご招待などを受けました。これもひとえに3月からの6ヶ月間、「大船渡の為に」とがんばってこられた支援チームの方々の努力の賜物であることは間違いのないところです。「大隅半島の皆さんにどうしたら、どのようにして恩返しができるだろうか。」とお別れの会の時に何人もの方にいわれました。「一日でも早い復興」こそが恩返しであることはいうまでもありません。ただ、その言葉をいただけたことが、この大隅半島4市5町復興支援チームの意義であり、誇りであると思われまます。

最後になりますが、大船渡へ行かせていただいたことに「感謝」します。



思い出の写真が持ち主を待っています

8月25日～9月1日までの8日間、最終の第27次隊として支援に行かせてもらいました。

活動内容はすでに避難所が閉鎖になっていたため、もっぱら仮設住宅の訪問による健康状態の調査や健康相談でした。各仮設住宅を回るため、車のナビに頼りながら主要道路を期間中、何往復もしました。だいぶ運転にも慣れ、気持ちに余裕が出てくると、地理的な特殊性や環境について目がいき、感じることも多くなりました。

学生の頃、社会の授業で知ったリアス式海岸で、風光明媚ではあるが平地が少なく、住宅地も海岸線を埋め立てて建てざるを得なかった状況も理解できました。仮設から仮設への移動で、一山超えては海岸に降りるという行程を繰り返し、その度に壊滅的な状況を目にするというなんとも言えない感情は、例えようがありませんでした。

産業も漁業や水産加工業が盛んだったため、家だけでなく、職業を失った方も多く、命はあっても、今後の生活の糧を失くした絶望から、自ら命を絶つ人も多いと聞きました。活動中、実際に会えたのは高齢者が多く、若い世代の方は仕事に出かけて不在も多く、会える機会は少なかったのですが、家や家族を失くしても生活していかなければならない厳しい現実を感じました。（仮設の家賃は無料だが、光熱費は実費。）そのせいか、特に男性は飲酒量が増える傾向にあるよう感じました。見えない将来への不安をお酒でまぎらわす。仮設の玄関に溜まったビールの空き缶が物語っているようでした。

訪問の受け入れは、遠方から来たということで、逆にねぎらいの言葉をいただきましたが、中には支援する側の自己満足ではないかという声も聞きました。もともとあった隣近所のコミュニティが持続しているところは、自分たちで支えあっていけるんだという心意気も感じました。支援は一時的ですが、やはりそこに住んで、同じ思いをし、将来を共に築いていく仲間が大切です。最近では、仮設住宅の一介に集会所もでき始め、コミュニティ作りが始まっていました。仮設住宅ではあっても、顔を知った人たちがそばにおり、助けあって要望を市へ上げていく。そのためにはまとめ役も必要となるでしょうが、一方的に支援に入るだけでなく、各コミュニティから意見が上がっていくほうがより、現実的でニーズに沿ったものになるのではないかと感じました。

今回は支援という形で、災害に触れさせてもらいましたが、他のところの出来事ではなく、自分の町にもいつ降りかかるかわからないということをふまえ、具体的にどう動くのかを日頃から考えておく必要があると思いました。

シミュレーションや訓練も大切ですが、そこに具体性が求められます。各自の自己判断では、緊急時に迷います。ある高齢者の方も、避難訓練は何度もやっていたのに、いざとなると慌てなくて大丈夫と言って腰をあげないとか、忘れ物を取りに帰って、それ以来会えていない人もいるとのことでした。

そして格言を二つ。「過信は禁物」、「物を取りに帰るな。」ということを強調して話してくださいました。今回の学びを今後、わが町に活かせるよう努力したいと考えます。



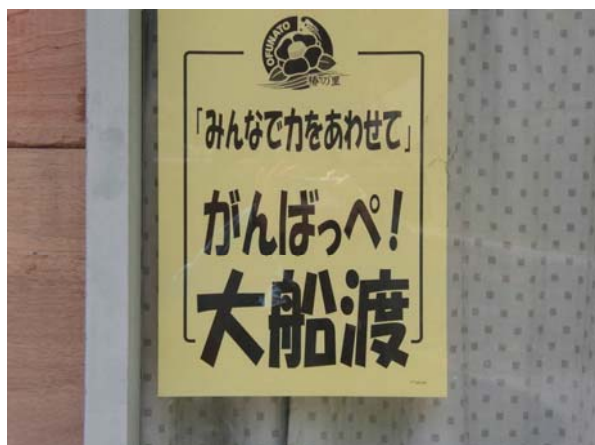
市内のあちこちに仮設住宅が建てられています

4市5町大隅復興支援チーム27次隊の一員として8月25日～9月1日の8日間、岩手県大船渡市へ行ってきました。地震発生から約6ヶ月が経つ頃でどういう状況だろうと不安に思いながらの出発でした。現地ではある程度、整地が進んでいましたが、まだ手付かずの現場もたくさんあり、瓦礫の山や波にのまれ4階まで壊れた建物、崩れた橋、防波堤などを見て衝撃を受けました。テレビや新聞で見えてはいましたが、実際に自分の目で見て、津波の威力や恐ろしさに圧倒されました。

保健師派遣は6月から開始され、始めは避難所の巡回相談が主な活動でしたが、仮設住宅が建てられてからは仮設住宅の訪問も開始されました。避難所は8月末をもって閉鎖され、私の主な活動は仮設住宅の訪問でした。仮設住宅入居者の健康調査票の回収や体調が気になる方への健康相談を実施しました。訪問に対して、非常に温かく迎えてくださり、自分たちも大変な状況であるのにもかかわらず「遠いところからありがとうございます。」とねぎらいの言葉をよくいただきました。震災当日のお話をしてくださる方もいらっやして「孫と2人でいたので孫を守るために必死でした。荷物は寒くないようにと取ったタオルとおやつだけ。家はすべて流されました。」と涙をながしながら話してくださいました。また、「現在は生活も落ち着き、ほぼ日常の生活に戻りました。季節が変わったのであの品物を出そう、あそこにあったよね……あ、そういえばもう何もないんだってとハッとすることがたまにあります。家はもうないことは分かっているのに…一瞬で何もかも失っているから頭がついてこないんでしょうね。1年ぐらいかかって少しずつ慣れるんだと思います。」と語ってくださいました。すべてを受け入れるためには長い年月がかかることを教えてくださいました。また、高齢の方は、今まで地震や津波を経験された方もおり、自然災害だからしょうがないとすべてを受け入れておられ、人の強さ・たくましさを感じました。それぞれ家や家族、職場、多くの物を失い、大変な体験をし、不安・苦しみ・悲しみ・怒りを抱えていらっやいますが、少しずつ現実を受け止め、これからどのように生きていこうかと前を向いて一歩踏み出す様子が伺えました。仮設住宅に入居できるのは2年間のみで、その後はどうしようかと不安を抱えていらっやる方も多かったです。

これから自立に向けて、たくさんの困難があると思われませんが、「人は助け合わなければ生きていけない。」このことを改めて実感させられました。また、自然災害はいつどこで起こってもおかしくないものであり、自分もいつ経験するかわからない、自分が経験したら…と常に危機管理を考える必要があると考えさせられました。

今回の派遣で私ができた支援は本当に些細なものでしたが、多くのことを学ばせていただき、なにより人の温かさを改めて実感させていただきました。今回学び、感じた多くのことを今後の仕事や生き方に活かしていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



あちこちの家に貼ってあった“合い言葉”

1 現状把握

大船渡市の被害状況等については、日曜日を除く定例記者会見で配布される資料で大方は把握できる。しかし、個別ごとの詳細については、市のほうも状況を把握しきれていないようではない。末端の状況調査を行う職員が不足しているようだ。ここでは、市が発表する最新の情報と、我々が調査してきた現状を記述する。

(ア) 復旧状況

① ガレキの撤去について

- ・ 4月11日から大船渡湾沿岸の8地区に分割して発注して着手している。期間については、阪神・淡路大震災を教訓として、大渋滞を起こし経済活動を混乱させないように、およそ1年をかけて撤去すること。ただし、現状は相当早いペースで作業が進んでいる模様。
- ・ ガレキの処分について(岩手日報から)

東日本大震災で大きな被害を受けた大船渡市赤崎町の太平洋セメント大船渡工場(安藤国弘工場長)は5月中旬にも、がれき処理の受け入れが可能となる見通しになった。本格的なセメント生産再開は11月ごろを目指している。同工場は震災で送電線の鉄塔が複数倒壊するなどして操業停止していたが、5月9日に電力が回復する予定となった。これに合わせて設備の復旧作業を進めており、5月中旬にはがれき処理ができる見通しだ。被災地には膨大ながれきが山積み、撤去とともに処理も大きな課題となる。これまでも廃棄物処理の大きな役割を担ってきた同工場。受け入れにめどが立ったことは、復興の好材料といえる。

約744万トンのがれきがあるとされる大船渡市。市は分別作業に時間がかかるとみており、実際に同工場でがれきを処理するのは6月以降とみている。セメント生産に関しては11月からの再開を目指して復旧作業を進める予定。製品出荷やがれき搬入にも使えるバース(船着き場)の復旧が急がれる。安藤工場長は「電力復旧の見通しが立った。一日でも早くセメントを作らなければ大船渡の復興はないと考えており、復旧を急ぎたい。」としている。

② 街の様子

- ・ 被災を受けたガソリンスタンドが2箇所営業開始していることを確認。
- ・ 飲食店は、片付けが進んでいるが、営業には時間がかかりそう。
- ・ 6月には魚市場の再開をしたいとのこと。そのためには、電気・水の復旧が急がれるとのこと。

③ 上水道について

- ・ 復旧は徐々に進んでいるが、郊外の沿岸部は復旧の目処がたっていない模様。地盤が80cmほど沈下して、本管に多大な損傷を生じているらしい。
- ・ 給水を必要とする地区は徐々に少なくなると思うが、いつまでかは現時点ではわからない。



記者会見の様子



ガレキ撤去の様子



スタンド営業再開

④ 漁港港湾・道路施設について

- ・ 漁港港湾施設については、ほとんどの所で損壊している。そして、沈下していて大潮の満潮時には冠水する状況である。
- ・ 養殖施設は、壊滅である。
- ・ 沿岸部の一部の道路では、地盤沈下を起こして、大潮の満潮時には冠水する状況である。



満潮時に浸水した痕跡

(イ) 仮設住宅等について

- ① 被災住宅は2300戸であるが、2200戸を建設計画している。現在822戸建設中。4月20日72戸完成。26日、88戸完成予定。5月中旬、662戸完成予定。
- ② 市営住宅20戸・雇用促進住宅123戸へ入居手続きを開始。



仮設住宅建設中

(ウ) 避難所について

- ① 炊出し等を行う拠点となっているところが8地区あり、現段階で避難箇所47・避難者数2828人となっている。
- ② 立根小学校のような物資の第一次受け入れ拠点となっているところから、この8地区へそれぞれ配給されて、末端まで物資が行き渡るシステムになっている。
- ③ 末端のニーズと供給は変化していて、必ずしも市のほうで全容をチェックできている状態ではない。
- ④ 食事については、動物性たんぱく質(鶏肉、豚肉)を必要としているが、入らない模様。
- ⑤ 衣類については、小中学生を含めた下着が不足の模様。季節を考慮した供給が必要。



炊出し風景

2 今後の展望

(ア) 復興について

① 復興計画について

4月20日、「災害復興基本方針」が市側から示された。それによると、これから市民を交えて土地利用を含めたまちづくり計画をつくっていくとのこと。この計画が決まって本格的な復興事業が始まるのだが、国・県の法改正などの支援策も待たれるところである。



物資搬入

(イ) 今後の支援のあり方について

① 人的支援について

現在行っている物資・給水・警備については、市役所の業務の中に入り込んで機能している状況。しかし、今後は変化していくものと予想される。

物資については、仮設住宅が完成し入居が完了すれば(6月上旬頃?)大幅に縮小されることが予想される。警備については、ガレキ撤去が終わり、車の所有者の割り出しが終わるまでだろう。給水については、水道の復旧工事が終了までは必要であるし、支援に来ている水道協会がいつまで継続するのかも、今のところわからない。変化していく中で、今後は、物資・警備の縮小に伴い、仮設住宅入居者が夏場を迎えるあたりから、健康チェック

のため保健師が必要になることが考えられる。また、復興事業が本格化するにつれて新たな人的支援が発生することが予想されるが、今のところ職種についてはわからない。

② 物資の供給について

現状把握で述べた食材供給を、宅急便を使い、地区の炊出し拠点となっている避難所へ定期的に行うことと、同時に他の生鮮食料品の保存のために家庭用の大きめな冷蔵庫を提供することも必要だと思われる。

③ 4市5町チームと銀河連邦及び活力推進課の今後の関係構築に関して

大船渡市企画政策部活力推進課は、全国から支援に来ている自治体の窓口となっている。そのため、それぞれの自治体との連絡調整に追われ、被災現場の状況を調査し、リアルタイムでの進行状況を把握できない状況である。その中で、我々が独自で調査を行い、活力推進課と打ち合わせしてきたことは非常に有意義であったようである。そして、現地支援本部を置いたことは正解であったし、彼らにとっても大変心強く感じられているようです。

大船渡市が復旧から復興へ早く着手するためには、長期の人的支援が必要だと思われるが、4市5町だけでは限界が来るであろうと思われる。このことに鑑み、今後、安定した支援体制を構築するために銀河連邦としてまとめ、それぞれが現地本部員を置き、独自の調査体制を築き、かつ支援自治体の窓口を一本化し、活力推進課に負担をかけない方向で実施していくことを考えるべきだろう。



全国からの支援窓口となっている
大船渡市活力推進課の皆さんと

満開の桜の花が散り、すっかり葉桜となった鹿児島を発ち、空路・伊丹～花巻空港経由で大船渡市に入る。花巻空港から大船渡に向かう道路上に設置してある温度計は5度を示すと共に雪もちらつくなど季節が1カ月以上も遡った錯覚に陥る。

又、大震災の影響で内陸部にある花巻空港から大船渡市に至る町々でも大変な被害を蒙り、家々の屋根瓦等は落ちる等の被害が多数発生しているものと想像していたが、大震災の痕跡を示す物は、宿舎となる猪川公民館に至るまで全く気付くことはなかった。(※後日、途中の遠野市宮守のガソリンスタンドで聞いた話では、大地震の際はその場に立っていることも困難で地面が裂けるのではないかと思ったほどの揺れを感じ、地球最後の日になるのではと思うぐらいの恐怖を感じたとのことであった。)

公民館到着後、荷物を置くと、すぐに被災地域を案内してもらって、ただ啞然とするばかりでその惨状を言葉で表現することが出来なかった。公民館から400～500mしか離れていない低地に存する地域は瓦礫の山と化しており、辺り一面がゴミ捨て場と錯覚するような状況であった。震災から約1カ月が経過した今は、道路上の瓦礫は除去され、車が通行できる状況にはなっているものの、道路敷以外の瓦礫は残されたままとっていた。この大量の瓦礫の処理や捨て場の確保等には、多くの労力・費用と数年の歳月を要するのではと感じた。

被災状況視察後に訪れた市役所周辺は満開目前と思われる桜が咲き誇っていたが、花見の気分には到底なれない。大船渡市内には、沢山の桜の木が植えられており、数kmに及ぶ桜並木や直径が1メートルを超えるような「しだれ桜」の大木も多く見かけた。その中で、周囲は瓦礫の山となっているものの、一本の桜の木だけが辛うじて被害を免れ、沢山の花を咲かせたものが目にとまった。その一本の桜と周辺との対比は見る者に天国と地獄を表現しているような印象を与えた。

市役所の駐車場及び庁舎内は多くの車と人でごった返しているが、行き交う人の表情は沈痛で静寂な雰囲気であった。又、庁舎内の壁には、親戚・知人の消息を伝える張り紙や行方不明者等の一覧表が掲示されており、その前で食い入るように覗き込む人々を見かけると肉親・親族・友人・知人等を失った人々の悲しみが伝わってくるような感じがした。

引き継ぎのため、庁舎内の各課を廻ると、どの課も多くの人が入り混じっていたが、その中には岩手県庁の職員をはじめ、札幌市、相模原市、能代市、浜松市等々の県外からの応援組やボランティアとみられる人々が多数見受けられた。庁舎内の皆が沈痛な表情で黙々と自分に与えられた任務に精を出しているようであった。その姿を見て、私に何が出来るのだろうかという不安となんとかしなければと言う強い義務感のようなものが湧き上がってきた。

以上が被災地、大船渡市到着直後の感想である。それから20日間の滞在期間中に自分に与えられた任務を通じて、特に感じたことは以下のとおりである。

①公平・公正・平等が常に最優先ではない。

※救援物資を必要とする被災者が身近に存在し、その物資が届いているにも拘わらず公平・公正・平等が実現されるまで、物資が倉庫に山積みされる現状を見て強く感じた。

※多くの人々が救いの手を求めている中で、一挙に全員を救う事は出来ないが、今、1人だけでも救える力を持ち合わせているとしたら、その1人だけでも救うのが当然ではないか？

②振興会・NPO・ボランティア等々を信頼し、その力を活用する。

※地域の現状及び個人個人の窮状を最も詳細に把握している、これらの団体や個人と行政が信頼関係で結ばれ、救援の手が差し伸べられる体制を構築できるよう準備しておく必要性を痛感した。

※行政の発想に拘束されず、自由な発想で必要な物資を必要な数量だけ給付する等の作業が可能となるのでは？

③救援を求める物資は、日毎に変化していく。

※被災直後は、食物であれば何でも良かったものが、1週間～2週間も同じ物ばかり食べていると違ったものも食べたいくなる。これと同様に衣類や住まいに対する欲求も変化することを考慮した支援の在り方を検討すべきである。その為には被災地の情報を正確に知る必要がある。(中には善意の救援物資が取り扱いに難儀なゴミと化す場合がある。)

最後に、ようやく山々の雪も完全に消え去り、間もなく桜の花も完全に散り終終わろうとする頃を迎えて、私たちの任務も終了し、大船渡を後にすることとなったが、一緒に活動した仲間全員が、帰途、口にした言葉は、完全に復興した、この大船渡を是非もう一度訪ねたいとの強い思いであった。



大船渡市赤崎地区では復興を目指し、元気を出そうと花見が行われました

私が大船渡へ向かい肝付町を発ったのは4月15日午前9時だった。私の任務は、救援物資を現地の避難所まで確実に届けることであった。

当時、被災地には救援物資が大量に届けられ、一見すると十分に物資は行き届いていると思われがちであったが、実は欲しいものが欲しい時に手に入らないという状況だった。これらの情報は、4月12日に設置された大隅4市5町復興支援チーム現地対策本部が情報集めに奔走し、集めてくれたものであった。

現地対策本部からの情報は、「とにかく子供用の下着、肌着が足りない。特に小学生から中学生のものが避難所に届いていない。」というものであった。それから、食べ物も「調理に手間取らない」缶詰などが必要であるということ。後方支援の事務局は本部の指示に従い、子供用の下着と缶詰などを肝付町商工会に協力を貰い、町内各店舗から、これらの物資を調達した。3日とかからなかった。

私は、主役である「下着、肌着」とともに8トントラックに乗って陸路、大船渡を目指した。1日目は九州自動車道から中国自動車道を抜け、舞鶴若狭道へと進み、兵庫県の西紀SAで約4時間の仮眠をとった。2日目は、早朝4時30分に発ち、舞鶴の先にある小浜西ICから国道27号線に降りて一路、新潟を目指す。2日目に大船渡市まで行くことも可能であったが、到着が夜中になることから新潟に1泊し、翌朝、大船渡を目指すこととした。新潟からは磐越道を東へ進み、まだ雪の残る磐梯山を後にすると郡山JCTから岩手県へ続く東北道を北上した。福島県から宮城県に入ると、ニュースで聞いていた通り地震による道路補修の跡が随所に見られ、50Km走行を余儀なくされた。肝付町を出発してから3日目の4月17日正午頃には宮城県からいよいよ岩手県へ入った。この間、肝付町役場では職員が待機し、後方支援をしてくれた。

一関を過ぎて前沢ICまではそれ程時間はかからず、国道397号から107号へと大船渡市を目指した。国道を走る約2時間の間に私が目にしたのは、被災した家でもなく瓦礫でもなかった。「ありがとう」、「感謝します」の小学生が書いたであろうお礼の看板、その言葉を見るたびに私は運転手に気づかれないよう頬を濡らし、それは大船渡へ入るまで止まらなかった。

現地対策本部の渡會さんへ連絡をとり、市役所へ当直したのが4月17日の15時。出迎えてくださった活力推進課の新沼課長(当時)に挨拶もそこそこに、主役の「下着、肌着」を届けるため日頃市中学校へと急いだ。日頃市中学校では、銀河連邦加盟国である能代市の職員が10名程度で作業をしていた。私は、持ち込んだ下着類の分類表を手渡し、一刻も早く避難所へ届けるよう頼んで、次の集積所である大船渡小学校体育館へトラックとともに移動した。ここでは銀河連邦で中心的存在である相模原市が支援活動を震災直後から続けていて、残りの食糧など積み荷を降ろした。

実は私の任務は、今回の救援物資が被災者の手元に確実に届くよう、それを見届けるまでは帰ってくるな、というものであったので持ってきた「下着、肌着」と一緒に避難所まで行きたい気持ちは山々で・・・ところがまだ物資の配送については完璧にはできていない状況(当然、無理もない話であるが)、結局、後ろ髪を引かれる思いで集積所を後にしたのである。

大船渡についてから2日目からは、現地本部の竹之下本部長、渡會本部員とともに被災状況を見て回った。(当時の状況は現地へ行った4市5町の職員から、それぞれの思いとともに報告があると思うので割愛する。)大船渡では、避難所の存在抜きには語れない。私が到着した4月中旬は避難所で食事をする人の数が約2000人であった。そして、大船渡市が食糧支援をしている大きい避難所が6箇所あった。その避難所を訪問し、色々と話を聞いた。食料は救援物資の集積所を見る限り、缶詰やレトルト食品が豊富にあるのを目にしていたので、足りているという

認識が私にはあった。ところが違った。避難所の食事当番に話を聞いていく中で「そう言えば最近、お肉を食べてないね。」「野菜もたまにしかまわってこないよ。」という会話、当然、当時の状況では無理のない話。全国の支援を受け、奔走する大船渡市であっても全避難者へ完璧な食糧支援ができるはずがない。

大隅半島は黒牛、黒豚の産地である。鶏肉もある、野菜もある。これらのお肉と野菜をこの避難所へ送ることはできないものか…。私は現地本部そして後方支援を続ける4市5町事務局(肝付町総務課)と幾度となく調整を試みる。調整を進める中で、各避難所の調理体制(グリルができる、できないとか)や冷蔵庫の有無など、避難所を2回訪問し、電話で何度も確認し、避難所の負担にならない形を模索し続けた。私の知り合いの栄養士(=妻)にカロリー計算をして貰い、避難者数に対する必要量を計算することもできた。

私の滞在日程は当初決まっておらず、結局2週間の滞在後、お肉や野菜の手配が始まる時に空路、肝付町へ帰ってきた。そして、5月17日に第1回目のお肉、野菜類の発送を皮切りに、大隅半島4市5町支援として6月21日まで7回の発送、その後も各市町や企業からの支援が続き、肝付町の中学生が植えた復興支援米の収穫・発送や南大隅町の支援米を発送した8月23日まで、肉、野菜類の支援をすることができた。当初は定期便が順調に行くのか不安がないわけでもなかったが、大隅半島の多くの方々の協力が、実に4カ月に及ぶ支援に繋がったと感謝する。大船渡市の皆さんは大隅半島4市5町復興支援チームを『大隅連合』と呼んでいる。お肉や野菜が届く度に「大隅の肉、野菜」と言って大変喜んで食べられたと聞きました。

大船渡の皆さんにとって「大隅の味」は、きっと忘れられない味になったと思います。

大船渡にいる間、涙は流れなかった。これからも共に『がんばっぺ！大船渡！！』



大隅半島住民の気持ちを大船渡まで運びました

鹿児島空港を9時50分に出発し、大阪伊丹空港で乗換え。岩手花巻空港に到着したのは13時30分。飛行機から降りて「肌寒い」と感じるとともに、これから20日間「頑張るぞ」との思いが湧きあがってきた。

花巻空港から大船渡まで約80km。コナラ等の落葉樹は葉を落とし、茶褐色の山肌はさびしかったし、赤松、唐松の山は、九州の山の姿とは違っていた。5月5日、大船渡に向かう途中の温度が9度。震災時の3月は、雪が降り、氷点下の気温。それと比べると温かいが、鹿児島と2ヶ月位、春の訪れが遅い。

空港から大船渡までは、川沿いの奥深い山道が延々と続く。道路沿いの町や集落で、雨漏りを防ぐブルーシートが屋根にかかっている。阪神淡路大地震の支援に行った時は、岡山あたりからブルーシートの屋根が被災地神戸まで続いていたのだが。はたして、テレビ等の報道であった震災の影響があったのだろうかと思うぐらいであった。しかし、陸前高田あたりから数十キロ離れた川沿いから木材等の瓦礫が見えてきた。市街地に近づくにつれて、目を覆いたくなる光景が迫ってきた。東日本大震災の光景は報道等で何度も見たが、目の前に広がる光景は言葉に表せない。何階もあるビルがつぶされ、家が跡形もなく流され、屋根が海に浮かんでいる。家の上には車や船が乗っているなど、現実の世界とは考えられない光景だった。津波の恐ろしさを初めて目にした。被災地の現場に立つと、重機の音や臭い等を肌で感じる。映像や写真とは違い、身に迫るものがあった。

本部の支援活動は、大船渡市役所、銀河連邦共和国との連絡調整。給水、物資、廃車管理を行う大隅半島4市5町の支援隊の活動援助が主なものであった。猪川公民館を宿泊所とし、朝は4時～5時に起床し、夜は10時に消灯。食事をつくり、風呂も一緒に入る。さながら部活の合宿生活であった。隊員は1週間の活動であったが、終了するころは、絆も深まり、地元での再会を約束していた。

本部も避難所への支援物資の配布、支援の受入、活動のPR等を行ってきた。銀河連邦の活動が、TBSの朝ズバで全国に放映された。活動の一部だったが、公務員批判の多い中、救われるような思いがした。

長いようで短かった20日間。テレビで東北地方、特に大船渡が放映されると、その後どうなったのか気にかかる。復興は長い道のり。自分たちの活動は、ほんの一部でしかないが、少しでも役に立てたのであれば幸いである。

最後に大船渡市役所活力推進課の新沼課長の涙ながらの言葉を思い出す。

「被災後、電話等の連絡も取れなかった。また、我々も被災した道路状況もわからない。そんな中、助けに来てくれと要請もしないのに、鹿児島から支援に駆けつけてくれた。本当にうれしかった。」

鹿児島に帰る5月24日は、すがすがしく、山肌は新緑にあふれていた。復興の兆しを感じられる、さわやかな緑であった。一日も早い復興を願い、いつの日かもう一度大船渡の地を訪れたい。



宿舎での食事風景。さながら部活の合宿？

私は4市5町の復興支援本部の本部員として、5月21日から6月9日までの約3週間滞在し、第11・12・13次隊と一緒に支援活動に従事して参りました。

4市5町の復興支援活動は、本部、支援物資班、警備班、給水班に分かれて活動していました。支援物資班は物資の仕分け、搬入搬出。警備班は被災した車両の廃棄処分までの一時仮置きされている車両の引き渡しや部品などの窃盗が横行したための警備等、給水班は被害を免れた地区への給水活動であります。

支援活動中の感想ですが、今回の震災により、大船渡の職員も家族を亡くされたり、家を流されたりしながらも、無休で必死に市民のために災害対策にあたられている姿は、言葉では簡単に言い表せないものであり、あらためて実際に瓦礫の規模の大きさを目の当たりにすると、人間のうぬぼれや小ささ、逆に自然の大きさ、強さに圧倒され、何も考えられず、動けなかった自分自身に腹立たしさを感じました。大津波による被害は甚大で、生き残られた方々も家族や友人、職場の同僚などを亡くされ、心に大きな痛みを背負いながらも、復興に向けてそれぞれできる範囲で必死に生きていらっしゃる姿は、今でも瞼の奥に焼き付いており、人生観が変わるほどでした。

また、以前から「大隅はひとつ！」とよく耳にしていたのですが、実際には曾於地区との距離を皆さんも感じていたと思います。しかし、今回の震災により被災地で共に汗をかき、また泣き笑い、「大隅はひとつ！」という実感・実践ができたと言われ、派遣職員一同話されていました。でも、この一体感はいいことではあるが、震災発生によるものであり、素直には喜べなかったのを覚えています。

最後に、日本全体が東日本を注目しているため、大隅半島がなおさら取り残され、また、少子高齢化による人口減でより過疎化が進み、道路網も整備が不十分な地域で、今回のような震災が起こると支援の人々、支援物資が届かず、甚大な被害が出るのが予想されます。今後は、このような災害を予想し、最低限の道路網の整備が必要だと痛感しました。



津波に負けず、仮店舗で頑張る方を応援します

私は大船渡市へ6月7日から同月26日まで現地支援本部隊員として派遣され、支援活動に従事しました。震災後約3ヶ月経過していましたが、市内は、幹線道路の瓦礫撤去が一通り終了し、津波被害を免れた地域の電気・ガス・水道は、ほとんど復旧していましたが、津波被害を受けた地域は、未だ電気水道は不通で、悪臭や粉塵が酷く、震災の重いムードを引きずった町並みは、色彩さえも霞んでいたように映りました。

私は現地支援本部での作業ということで、支援隊員の作業調整や健康管理、市役所との各種調整や情報収集など後方での支援でしたので、直接現場で作業することは多くありませんでしたが、4市5町で構成される支援隊員の活動は、文字通り最前線での活動で、劣悪な環境の下での作業となりました。「支援したい」という強い信念をもって現地入りした支援隊でしたが、非日常的な光景を目の当たりにし、想いとは裏腹に自分自身ができる支援の限界を感じ、体力の消耗と精神的な疲労で口数も少なくなっていました。そのような状況で、彼らを支えたのは、やはり人でした。「わざわざ遠いところから支援に来て頂き、ありがとうございます。」という地元の方々の感謝の言葉、見返りを求めないボランティアの支援の姿、市役所職員の故郷を復興するという強く熱い想いに、どれだけ支えられ、勇気づけられたかわかりません。

大船渡では、津波被害の甚大さを知るとともに人々の強さを知ることができました。私たちがこれからできることは、復興まで長期的視野に立った息の長い支援と経験で得た多くのことを未来に活かすことです。何年かかるかわかりませんが、自治体職員として何を成すべきか、独りの人間として何を為すべきか懸命に考え、信念を持って取り組みたいと思います。

最後に、今回の大船渡への支援活動に従事できたことは、鹿児島島の地より支援くださった方々はじめ町関係部署の後方支援があったからこそです。感謝を明日への活力に代え、応えていきたいと思っています。



スーパーの中にまで押し寄せた津波

6月24日から7月5日までの12日間、現地支援本部の立場で業務に従事しました。先遣隊の方々からいろいろな情報を収集し、準備を行っていましたが、現地に入るまで非常に不安でした。花巻空港から大船渡市までの道のりは、険しい山道ばかりで、災害を感じることはありませんでした。大船渡市の宿舎に着き、現地で既に作業している先遣隊の方々の現場を視察しながら、市内の被災地を目の当たりにしました。市街地は、あたり一面瓦礫ばかりで、信号機も故障している地区もありました。道路は、警察車両が往来し、各交差点には警察官がおり、異様な光景と思えました。

現地2日目には、各作業場に作業員を送迎し、状況把握と情報収集にあたりました。作業所は3箇所あり、小学校体育館と市体育館には、それぞれ館内を埋め尽くすほどの物資が山積みされていました。小学校体育館は、食料品を中心に衣類や雑貨などがおかれていたため、銀河連邦チームや市保健福祉課と調整し、食料品以外は市の体育館に運ぶ段取りを行いました。残された食料品については、地元の栄養士が在庫状況と賞味期限を把握しながら、翌日の搬出品を計画していました。そのほか、毎朝、保健福祉課からの指示により、物資の搬出（自衛隊・宅急便）や各地から送られる物資の搬入を行っていました。終盤の6月末には、中間的な食料品の在庫チェックと7月から従事する地元臨時職員への引継ぎ作業を実施しました。一方、市の体育館は銀河連邦での作業となり、相模原市が主体となって衣類などの搬入・搬出作業に従事していました。6月末は体育館内の再仕分け作業を行っていました。また、車両班は約3,000台ある損壊した車両の廃車手続きについての作業に従事していました。遺品を探しに来る人や発見した車の所在を聞かれるなど職員は複雑な心境でした。

7月になると、この間、続けてきた上記業務から災害義援金や弔慰金、援護資金の受付を含む事務作業となること が判明したため、事務を所管する保健福祉課の担当係長やそれまで従事していた他の市町職員へ情報収集を行いました。作業マニュアルの入手や制度内容を記載したフローチャートについて、この業務に従事する職員が業務にスムーズにできるように努めました。現在の勤務体制（1週間交替）より長期な体制が望ましいことから、調整を行いましたが、兼務体制や移動等により難しい状況でありました。また、毎朝、銀河連邦共和国加盟の相模原市・能代市の本部担当者との打ち合わせや市役所活力推進課との協議も行いました。こうした中、活力推進課から油落とし用の洗剤の購入依頼や学校グラウンド整備用のビーターの購入依頼があり、早急に対応しました。

派遣期間を通じ、地域住民の方と話す機会は殆どありませんでしたが、コインランドリーに行った際に、避難所にいらっしゃる高齢者の方と話す機会がありました。避難所に洗濯機があるが、なかなか使えず45分かけてきたとの事。仮設住宅にも入れず、非常に疲れたと話された。また、近くの住民の方ともお話できたが、この方は地震のときにすぐに高台に逃げたと話され、津波の猛威を高台から見ておられたそうです。自宅は1階部分が殆ど壊滅したが、何とか修理することができた。残念なのは、写真や家宝などがなくなり寂しいと話された。

この派遣期間を通じ、地区公民館に11泊したが、長期集団生活の大変さを実感した。避難者はもっと長期間であり、改めて大変さを痛感した。また、仮設住宅の建設現場を見てきたが、手狭のように感じ、自宅を所有していることのありがたみを痛感した。

最後に、私が現地で従事した職務が地元の復興のために少しでも役に立ったのかなと改めて問いただす日々が続きました。今後も、早期復興を願いながら、地域で支えあうコミュニティ作りに尽力するとともに、弱者の立場に立った行政運営を志し職務を遂行していきたいと考えます。



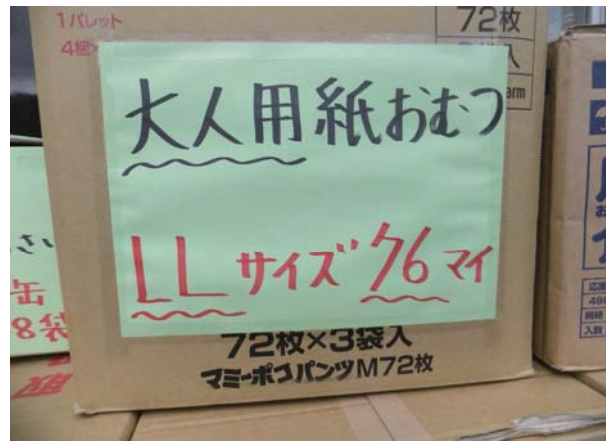
義捐金等の申請書類をチェックします

7月2日から12日までの期間、現地支援本部員として活動しましたが、支援活動の感想は被災地の1日も早い復興を願う他の支援活動参加者の方々と同じではないかと思っておりますので、活動期間中に印象に残った大船渡市役所保健福祉課平井係長から伺ったお話を交えて感想に変えたいと思っております。

3月11日に地震が起これ、津波が去った後、被災者の方々はそれぞれ安全な場所に避難していたが、夕方になり、もちろん停電であったためあたりは真っ暗になってきた。それでは困るのでみんなロウソクや明かりを準備しだして、準備が出来たか出来ないかといった頃に夕飯の時間が来てお腹もすいてきた。そこからご飯の準備をして満足な食事もとれなかったが、その場を過ごした。そうしているうちに夜も更けてきて寝る時間になったが、もちろん寝具等はなく、寒いときでもあったため寝る前になってから寝具やらなにやらを準備するために動き出して、何とか眠りにつくことが出来た。翌朝起きてからも同じことで、何かが必要になればその必要になったその時その時に準備に取りかかるといったことの繰り返しだったそうです。係長はこのとき震災直後で何をするのも難しい状況ではあったかもしれないが、備えておくこと、先々のことを考えて行動することが重要であると感じられたそうです。(このことから、ある程度生活が落ち着いた後、次は皆さんお金が必要になるだろうと考えて、義捐金、支援金の早期支払いに向けた仕事の着手を訴えて担当者となったそうです。)

その後、全国各地から寄せられる支援物資を見ても「こんなに全国の方々から心温まる善意をいただいて・・・。」としておきながらも、マスコミ報道で「被災地では何々がなくて困っている。」「被災地では皆寒さに震えている。」などの報道があれば、必要か不必要であるかを問わず、報道を見た方々から一挙に同様の物資が送られてくる。ところが物資が送られて到着するまでの間には気候や環境も変わり、それまで必要であったかもしれないものがいらなくなったり、今まで現地でも考えもしなかったものが必要になったりといった状況であったそうです。もっと言えば食物等、誰から見ても必要なものは多く送られてきたが、料理に必要な調味料であったり、「これば自分たちも気づかなかったが助かる。」といったような支援物資は以前の被災地から送られてきているものが多かったそうで、これらは「自分たちの経験から今後被災地がどうなり、何で困るかを考えて支援物資を送ってもらっているからでしょう。」とのことでありました。

この係長は、なぜかヘッドライト付きヘルメットや革手袋、安全靴などの震災時に必要なものを日頃から数人分準備をしていて、いろいろと役だったような話をされていました。そこまで必要かどうかは個々で考えればいいことだと思いますが、先々を予想しながら、周りの状況を見て、一歩踏み込んで考えながら行動することの重要性をしみじみと教えていただきました。



いろいろなものが必要になってきます

7月10日、陸前高田ICから三陸道に乗り入れてまもなく、私は眼下に広がる穏やかな三陸の海を望む。複雑に入り組む入り江とその合間に浮かぶ島々とのコントラストが美しい。後になって、この海岸が「碁石海岸」と呼ばれる三陸でも一級の景勝地であることを知った。こうした入り江が三陸に多くの恵みをもたらしてきたのだろう。途上、瓦礫に埋もれた陸前高田市の惨状を目の当たりにすることがなければ、この海が平成23年3月11日、東北一帯の1万人を超える人々の生活の営みを一瞬にして飲み込んだ海と同じ海とはとても信じられなかつただろう。

この日、早朝に鹿児島を発った私が、活動拠点である大船渡市猪川地区公民館に到着したのは午後7時を過ぎていた。早速、11日間に及ぶ現地支援本部での活動が始まる。3月14日、相模原市を通じて寄せられた大船渡市の災害支援の要請にこたえ、5人の職員が十分な装備を整える間もなく、2台の車で赴いた大船渡市。雪に閉ざされ、災害状況の把握もままならない震災直後のこの街で先遣隊として支援の橋わたし構築に奔走した5人の職員にはただただ敬服する。まもなく、この取り組みは大隅半島4市5町による復興支援チームに発展し、以来4ヶ月、4市5町の多くの職員が困難を乗り越えながら大船渡市支援の輪を繋いできた。全国の多くの市町村でもいち早く被災地支援を決定し、被災地での活動を始めていた。今回、その一員として支援活動に加わることになり、身の引き締まる思いだ。

この時期、復興支援チームの活動は、災害義援金、被災者支援等といった行政事務支援と保健師による心のケア支援に移っていた。隊員の士気はすこぶる高く、空調設備のない市役所の蒸し暑い一室で顔から頭から噴き出す汗を拭う暇もなく、笑顔で市民に接する姿は頼もしく、充実感に満ちていた。

現地支援本部は、隊員の側面支援と大船渡市当局との支援活動にかかる調整が日課だ。合わせて、往復4時間に及ぶ交代要員の送迎を活動拠点である猪川地区公民館と一ノ関駅間で行う。一日が瞬く間に過ぎていく。沿岸部の被災地域は、瓦礫の撤去や家屋整理が進み、商店の多くも営業を開始し、日常を取り戻しつつあるように見える。街は着実に復興への道を歩み出している。4ヶ月たった今、仮設住宅が整備され、避難所生活を強いられていた被災者の多くは仮設住宅へと移っている。何よりも被災者の元気な声が聞こえてくるがうれしい。市の復興計画策定に向けた取り組みも動き出していると聞くとなおさらだ。失われた多くの人命・家屋・自動車・船・生活が元に戻ることはないにしてもこの街の人々は未来に向かってたくましく生きている。活気に満ちた水産業の町、大船渡が復興する日も近いと感じた。

7月20日、11日間の活動を終え、大船渡を離れるときがきた。三陸道から望む碁石海岸はこの日も何事もなかったかのように穏やかで美しかった。いつまでもやさしいリアスの海であり続けてほしいと願う。遠く過ぎ去る景色を脳裏に焼き付けながら三陸を後にする。いつの日か、またこの街を訪れてみたい。今は一日も早い大船渡市の復興復旧を願っている。



今回の東日本大震災被災地への職員派遣に参加したいと思っていましたが、当初、課長級は現地支援本部員としての20日間の派遣で、畜産行事や議会などの調整で何とか行ける時期はないかなと思っていたところ、7月の経営戦略会議で7月18日から28日までの本部員の募集があり早速希望したら、派遣される機会が得られて大変貴重な体験をすることが出来ました。

被災地の状況は、テレビや新聞等で報道されている以上に凄まじいもので、特に津波による被害は、自然の驚異の物凄さを改めて感じさせられました。滞在中、釜石市から気仙沼市までの海岸線沿いを支援隊員の方々と被災状況を調査してまわりましたが、4ヶ月経った後でも手つかずのままであったり、地盤地下で水没したままの状況もありました。主な道路は清掃がされており、瓦礫の山が散在して復興にむけて少しずつ動いて気はしましたが、この瓦礫を処理するには長い年月がかかるだろう、元通りに復興するには何十年かかるんだろうと思いました。

現地支援本部の活動は、支援隊員の到着・帰省時の宿舎と一関駅までの送迎、大船渡市役所や入浴施設への送迎等、支援隊員の方々が支援活動に専念できるようサポートすること、隊長を中心に隊員がチームワーク良く活動できるよう協力することや大船渡市役所の活力推進課と肝付町や大隅半島他市町からの連絡調整や打合せが主な仕事でした。また、現地支援本部に光回線が開通したことで、町政懇談会開催時の「はやぶさネット」による大船渡現地支援本部との生中継に猪川地区公民館の金野館長と出演したことも良い思い出になりました。

鹿屋農業高校和太鼓部が、7月28日に盛岡市で開催される全国大会へ出場することを機に、大船渡市綾里中学校の体育館で演奏会を開催する計画を進めてきましたが、当日は、アクシデントはあったものの、すばらしい太鼓の演奏会ができ、「高校生の被災地に元気を届けたい。」という思いが太鼓の響きとなって被災地の方々の心へしっかり届きました。演奏終了後、仮設住宅にお住まいの方が「有難うございました。家も何もかもなくなってしまったけど、今日は元気をもらいました。頑張ろうという気持ちになりました。」私の所へわざわざ話しに来られました。

大隅半島4市5町支援チームの参加者は、全員自ら志願して参加しており、最初はよそよそしくてもすぐに隊長を中心としたチームとなり「大隅は一つ」という気持ちで繋がり、よくまとまった感じがしました。今後は、支援隊員それぞれが隊員同士の交流を深めることで、大隅半島4市5町のネットワークができればと思いました。

最後に、今回の東日本大震災被災地への職員派遣で得た経験を今後、職場で活かしていきたいと思います。



津波に負けなかった防潮堤に合い言葉の看板を設置した崎浜の子どもたち

役場を朝6時前に出発し、飛行機で羽田へ。東京から新幹線で一ノ関に、それから車でおよそ2時間、大船渡市役所に到着したのは、17時30分頃でした。途中、車中から陸前高田及び大船渡市内の被災状況を一部見ましたが、被災している箇所とそうでない箇所との差に驚くばかりでした。派遣隊員の引継ぎ後、綾里中学校体育館で行われる鹿屋農高和太鼓部による復興支援演奏会に参加。演奏会には200名ほどの綾里地区の方々の来場があり、被災地の人たちを太鼓で元気づけたいという生徒たちの想いのこもった演奏に会場は割れんばかりの拍手につつまれました。

派遣隊員7名のうち5名の職員は、市役所の保健福祉課内で、申請された災害義援金等の書類審査で不備のあった保留案件について電話等で書類の調達をする保留解除班、災害により負傷又は住宅・家財に被害を受けた方に対する災害援護資金の貸付をする貸付班、災害により死亡した方の遺族に支給する災害弔慰金の支払い順位を確認する弔慰金班に分かれ従事し、2名の保健師は市内の避難所、仮設住宅を巡回訪問して、心と体のケアを行いました。

市内のがれき撤去・分別は、日々作業が進んでおり、新たに500人雇用し、現在約1,300人の地元雇用をしているようです。

現地支援本部であり宿泊所でもある猪川地区公民館では、地区の方々から感謝され、野菜を差し入れてもらったり、猪川地区交通安全母の会の熊谷ケエ子会長からは感謝会を開催していただき手作り料理までごちそうになり、会長が作詞された「五葉温泉の歌」で踊りなどの交流もできました。

8月3日に行われた被害状況等の記者会見では、死亡者330人、行方不明者118人、建物被害5,060世帯、被害額1,051億円、避難所9箇所に避難者93人、仮設住宅1,800戸のうち1,734戸入居済みとの内容でした。また、市では災害復興計画策定委員会や地区懇談会を踏まえ、「大船渡市復興計画骨子」を定め、平成23年度から平成32年度までの10年間の復興計画の策定を進めています。

骨子の中にもあるように今後、大船渡市をよりよい街にするためには、単に災害前の状態に回復する「復旧」だけではなく、災害を契機として生活基盤や産業・経済基盤などのあり方を見直しながら、市民による大船渡市の未来を切り開くような新たなエネルギーを生み出す「復興」の取り組みを積極的に推進すべきであると思います。

最後に、この11日間を通して人と人との絆がいかに大切かということを改めて感じました。銀河連邦の絆、そして大隅半島4市5町復興支援の絆、これからも大切にしていかなければならないと思います。



多くの隊員の疲れをいやしてくれた五葉温泉

8月3日から8月13日までの11日間、現地支援本部として行きましたが、被災者の支援というよりも、支援隊の後方支援としての業務だったため、業務上、被災者と直接面会することはありませんでした。そのような中、瓦礫の撤去等が来た時よりも進み、復興に向けて少しずつですが、動き出していることが分かりました。仮設住宅についても、私が帰る時は、全てが完成し、後は入居の申請を受け付けるだけとなっていました。

風呂場で、宮城県気仙沼市の被災された方と少しだけ話す機会がありました。猟師をされている方で、自宅も船も流され、現在、仮設住宅に住んでいて、被災した悲惨な状況を話されました。家族は全員無事だったが、これから先のことを考えると、気持ちが滅入ってしまうので、明るく笑顔で振舞おうとしている。でも、心では泣いていると話され、強く振舞おうとしている中、本音を垣間見ました。もし、自分が被災者であっても、本音はそうだろうと思います。震災直後は、気が動転し、何が何かわからずに無我夢中に生活してきたが、現在、少しずつ復興が進むにつれて、落ち着きを取り戻したことにより、寂しさがでてきたのではないかと思います。その反面、些細なことが幸せに感じる場面も多いと思います。私自身も思ったことですが、例えば、電気が通っていることや、蛇口をひねると水が出ることなど、普段生活している中では気づかないことが、喜びに感じたり、当たり前なのがとても大切なことだと思え、小さなことにも有難味を感じるようになったのではないかと思います。また、この大きな震災があったことで、自分の住んでいるところで、地震が起きた場合、どのような行動をしなければならないか、普段生活しているところが海拔どのくらいのところにあるのか、一番近くの原子力発電所がどのくらい離れているのか等、全ての人がそれなりにいろんなことを考えさせられたことだと思います。

大船渡市に行ったことにより、実際の被災している状況を映像ではなく、生で見れたことで悲惨さが分かり、お互い助け合わなければならないと強く思えました。まさしく、よく使われている『絆』だなあと思いました。それと、大隅4市5町でチームを組んで活動したことにより、近隣にしながら、これまで、面識のなかった方々との交流も図られ、今後の業務を遂行する上でも情報を共有でき、非常にプラスになりました。

最後に大船渡市を含め、被災した地域の早期復興を願い、出来る限り何らかの応援を続けていきたいと思えます。



町内の多くの小中高校生が寄せ書きをして
大船渡の方々を励ました

8月11日午前6時20分に肝付町役場を出発して鹿児島空港へ。1時間40分のフライトで羽田空港へ降り立つ。東京駅へと移動して東北新幹線に乗車。2時間40分の新幹線での移動を一ノ関で終えて駅を出ると、第11次現地支援本部からの迎えが待っていました。本部車両にて活動拠点である大船渡市猪川地区公民館へ向けて出発しましたが、一ノ関駅から東に位置する気仙沼市へ向かう一本道(国道284号線)を走ること1時間、地震や津波の影響は全く見られないまま国道45号線に乗り換えて北東へ進路を変える。気仙沼市の中心市街地に近づくと先の見えない渋滞につかまりました。信号機が点灯していない交差点が多くあることや被災地見学の車両による混雑で、一般車両の通行規制解除後から朝夕は恒常的に渋滞が発生しているとの事でした。市街地の渋滞を抜けて、さらに進むこと約10分、右手に見える湾の奥に一目見て異様な光景の陸前高田市が広がっていました。旧市街地の西端を流れる気仙川にかかる大きな橋は、橋桁のみを残して跡形もなく、仮橋を渡って旧市街地へ入ると右手に「一本松」が見えました。高田松原は消え失せ、地盤沈下により道路脇まで海が迫り野球場は海の中にある状況。左手に広がる平野部には鉄筋コンクリート造りの建物が散在しているだけで、堆い瓦礫の山々がそびえ、かつての陸前海岸の中核を成す街並みは全く想像できない状況が広がっていました。渋滞に捕まったこともあり、一ノ関駅からの移動には2時間強を要して、猪川地区公民館への到着は役場を出発してから約12時間後の午後6時前でした。

翌日の事務引継ぎ後、大船渡市役所の関係各課を訪問してあいさつをおこないましたが、職員全体が疲れ切っている様子で定期に交代する派遣者にいちいち応対していただけないと言う職員もいて、切羽詰った職員の状況が感じられました。

本部要員の主な任務は、隊員の支援で、毎日の通勤や昼食の手配、隊員等の入れ替わり時の駅までの送迎が主な業務でした。大船渡市役所職員においては、震災後、昼夜を問わず休みなしで働き続けた勤務シフトから、7月16日をもって通常勤務へシフトしており、初めてのお盆を迎える8月15日から19日までの間は各課に留守番を残す程度で、殆どの職員が休暇を取得しており、この期間は、各種連絡調整ができない状況でした。

隊員の行う業務は従来どおりで、長期派遣者が班長となっている各班の事務作業員として、貸付・弔慰金・保留解除の業務に従事していました。班によっては1日の来客者数が待機する人員数より少なく、出番のないまま1日を終える職員もおり、不足しているといわれる肉体労働のボランティア等との調整が必要ではないかと感じました。

猪川地区公民館の現地支援本部へは、今でも地域住民からの野菜や果物、飲み物等の差し入れがあり、本部車両については信号待ちをしていると年配の方に拝まれたり、声を掛けられたりと地域の方からの感謝の気持ちを感じる場面が多々ありました。

鹿児島空港で初めて顔を合わせた不安な隊員同士が、1週間の共同生活を終えて帰る頃には強い絆で結ばれている様子がとても印象的でした。引継ぐ側と引き継がれる側の対照的な雰囲気が1週間毎に入れ替わり、支援による多くの絆が生まれたと考えます。



水没した野球場

8月19日派遣1日目、14時40分、仙台市手前でありがたくない余震の出迎えを受ける。私は第26次派遣隊員6名と乗車した新幹線やまびこの車内放送で「岩手県沖で震度5の地震が発生し、停電と線路の安全確認のために緊急停止します。」…派遣先での活動が思いやられることとなった。一ノ関駅からはワゴン車で気仙沼市まで約45分、大隅半島の山間部と風景はほとんど変わらないが、山間部の手の行き届いた棚田のきれいな稲穂街道と大屋根風の農家住宅が多くみられることに感心させられた。

気仙沼市に入ると海岸沿いへと風景は一変するが、急峻な海岸の多いリアス式で、内之浦や岸良地区の地形とよく似ている。陸前高田市へ車がさしかかるなり、目に飛び込んだ光景に「わあ、これは…」、それまでの大きな会話が誰もが突然、声を失った。町の全てが住宅の基礎部分を20、30センチだけ残して更地となっている場所と、がれき、木材、鉄材の山が台地のように積み溜められた場所があり、大型ダンプや重機がとても小さく見えることから、今後も整理に長い期間が予想できる。国道横にある5階建て市営住宅の4階部分までベランダや窓がめっちゃめっちゃに壊れているが、建物外壁はそのままの状態が残っていた。「テレビで見ているときは、あまり気にもせず、津波がとても高かったことは知っていた。実際に見たら、すごい実感がある。現場で見上げてみて初めてその怖さがわかった。」国道を車で走りながら、すぐ横の海を見ると目線が海の高さと同じという中で生活していたのがわかった。

派遣第2日目、前任者との引き継ぎ業務の途中で大船渡市立赤崎小、中学校の被災状況を目の当たりにする。両学校とも大船渡港の入り口近くに位置しており、2階教室の窓と外壁の校名の所まで津波が押し寄せた痕跡が残っており、校庭はがれきや廃材置き場として使用されていた。被災前には子供たちが元気に登校し、大きな挨拶が響いていた学校を子供たちはどんな思いで見たのだろう。あまりに残酷な仕打ちに思えて子供たちには何の罪もありません…。それでも子供たちは「笑顔とあきらめない心」、「勇気を出し立ち向かえ」、「仲間 信じて突き進め」、「全力 強い心」など感じたことを書いています。赤崎小は蛸ノ浦小で合同授業、赤崎中は大船渡中校舎で授業を再開している。子どもたちの強い心にこちらが教えられることとなった。

派遣第3日目、日曜日に隊員はボランティア活動として浸水住宅の後片付けや床はがし作業を行う。

4日目以降は隊員の送迎と大船渡市活力推進課及び教育長、学校教育課へ挨拶を行う。猪川地区公民館での「感謝お別れの会」の準備と「がんばっぺ！大船渡Tシャツ」の販売。

大船渡市は8月31日で災害対策本部を解消し、災害復興計画に向けて着実に前進しています。そして復興に向けた第2回地区懇談会を開催し、事業実施に向けた合意形成を図り、災害に強い復興計画の策定を目指しています。

今回の派遣を通じて感じたことは、被災者の立ち上がる強い気持ちと「てんでんこ」、「津波浸水想定区域」の標識など、日常生活の中で津波と向き合っていく環境作りが重要だと思います。最後に「日本はみんなで支える」、「大隅は一つ」などよく言われているが、4市5町の職員に仲間が増えたこの機会に隣接自治体間の災害支援協定の早期実現を祈念しています。



4階部分まで被災した5階建ての陸前高田市の市営住宅

「先遣隊」の任務を終え約半年、第14次大隅半島4市5町復興支援現地本部員として再度、被災地復興支援の任務に就くことができました。給水、救援物資仕分、車両管理作業、保健師による巡回、災害援護事務と多様な支援活動にこれまで派遣されていましたが、これが最後の支援派遣。今回の使命は、諸活動の一応の総括と240人の足となり、大船渡市を駆け回っていた公用車を持って帰るということ。8月27日空路、羽田からJR一関駅、車にて派遣チームの宿舎、猪川公民館へ入りました。津波で街が一瞬にして消えた陸前高田市を途中見ることができました。瓦礫が山のように積み、町全体が産業廃棄物処理場と化していて、聞こえてくるのは、瓦礫を集める重機とトラックの音だけ。進んでいくと壁に「解体OK」とスプレーで吹き付けられた全半壊の家屋を何棟と見ました。依然として復旧の目処が見えません。

さて、最後の支援本部員ということもあり副市長、教育長とお会いする時間があり、言葉にならないくらい感謝の意を述べられました。特に教育長からは、私も少々関わった内之浦・高山の両中学生が植えた復興支援米収穫に伴う大船渡市内の中学生20名との交流事業について非常に感謝され、給食で食べた支援米はいろんな意味で今まで食べたどの米よりおいしかったという言葉も頂きました。被災した子どもたちの思い「足を延ばして寝たい。」、「広い校庭ではしゃぎたい。」、「大声で笑いたい。」等々を今回の事業で少しはクリアできたと私は感じました。また、宿舎としている猪川地区公民館では「感謝とお別れの会」を公民館・婦人会・老人クラブの皆さんで開催して頂きました。乾杯と思いきや、いきなり「うどん」が出てきてビックリしましたが、東北では昔から客人には「遠いところからおいでくださったので腹が空いているだろう。」という事から、乾杯の前に「うどん」でもてなすそうです。ここでは被災当初からの話をいくつも聞くことができました。不眠不休で頑張っている市職員のこと、親兄弟・家族が行方不明でも頑張っている方々のこと等々…これまでの活動を労い、盛大な宴になりました。そして帰路に就く9月1日早朝、最後まで公民館の皆さんが見送りに来てくださいました。玄関前には再会の意と無事に帰れるようにと一面に「黄色いハンカチ」が張っており、東北の人情に涙しました。

私は今回、こういう形で復興支援活動に関わることができましたが、逆に被災地で頑張っておられる皆さんに生きる勇気と元気をいただいているような気がしてなりません。「ありがとう！」と言って公民館の皆さんと手を交わし帰路に着きました。新潟・福井を経て、後に甚大な被害をもたらした台風12号の影響でさんふらわあが欠航となり、横風、大雨の中、名神・山陽・九州自動車道を走った奔った大船渡市から2,030km、9月3日174日ぶりに無事帰町しました。

家族、両親、仲間、いろんなつながりを一瞬で奪った今回の東日本大震災。家がある、仕事がある、家族がいて、友人がいる、そんな当たり前のことがどれだけ幸せなことなのか。被災地では、多くの方がより強い絆を求めていると肌で感じました。私は、被災地に行ってから様々な事に対する価値観が変わりました。自助・共助・公助を基本理念とし、今後の肝付町のまちづくりに生かしたいと思えます。最後の支援派遣ということでしたが、すべての子どもたちが笑顔を取り戻す日まで、支援に終わりはありません。



宴会の始まりはうどんから

派遣隊員を代表いたしまして、本日の派遣終了の会にあたり帰庁報告をいたします。台風の影響で予定していたさんふらわあが出なかったため、派遣活動中に活躍したワゴン車に乗り、2日半かけてずっと陸路で帰ってきました。移動距離2030km、実運転時間30時間でした。

我々は、たまたま最後の隊員ということでこうして歓迎していただきましたが、我々が預かってきた大船渡市民から感謝の言葉は、これまで240人を超える派遣隊員、そして地元で派遣隊員の仕事のみでカバーしてくれた同僚の職員、また義援金や物資の両面で支援してくださった大隅半島の地域住民の方々に向けられたものであります。

まもなく震災から半年がたとうとしていますが、現在の大船渡市を含めた被災地は、まだガレキが指定された集積所にうずたかく積んであるだけで、被災した建物の多くは手付かずのまま残っています。被災前の街に復興するには気の遠くなるような時間がかかりますが、力をあわせて一歩ずつ進んでほしいと思います。

今回、我々は復興に向けて支援活動をしてまいりましたが、それ以上に自分の町で災害が起こったらどうするべきか、地方公務員として貴重な勉強をさせていただきました。また被災者の皆様から人の優しさや思いやりをいただきてまいりました。まだ電気、水道が止まっている頃、雪の中の給水活動は寒かろうと自分の食糧もままならない中、温かいうどんを作ってきてくれた方。鹿児島から支援に来ていただいて風邪をひいて帰ってもらったら申し訳ないとカイロを持って来てくれた方。車を修理してもらったのにあなたたちからはもらえないと修理代金を絶対に受け取らなかった自動車屋さん。寝泊まりしている公民館に何回もおかずを差し入れてくれた80才のおばあちゃん。奥さん、子供、父親、母親の家族4人を津波で亡くしながらも、遠方からきた我々を労ってくれた、食堂で隣り合わせた地元のおじさん。本当に被災地の方々から元気と働く意欲をもらいました。

先日、某生命保険会社が日本を強くするために必要な漢字を募集したところ、「絆」という字が第一位になりました。今年ぐらい国内外からの支援に絆を感じた年はありません。絆という字は糸へんに半分と書きます。一本の糸の片方を大船渡市民が持ち、もう片方を大隅半島の住民が持っています。距離は離れていますが、その一本の糸が今後もずっと続いていきます。今回の大隅半島4市5町復興支援チームによる職員派遣はひとまず終了しますが、これで終わりではなく、今後とも形をかえて息の長い支援を続けてまいりたいと思います。

最後に宿泊していた猪川地区公民館を出発するときに、たくさんの地元住民の方々が見送りにきてくださいました。そして公民館のまわりには旅の無事と再会できることを祈念して何十枚もの黄色いハンカチがたなびいていました。まるで映画「幸福の黄色いハンカチ」のワンシーンのようでした。我々のためにここまでしていただいたことにとっても感激し、涙がでました。我々の支援活動は大船渡の復興にとっては微々たるものではあります。大船渡市民の心の中に大隅半島4市5町の小さな一歩を残せたのかなと思います。

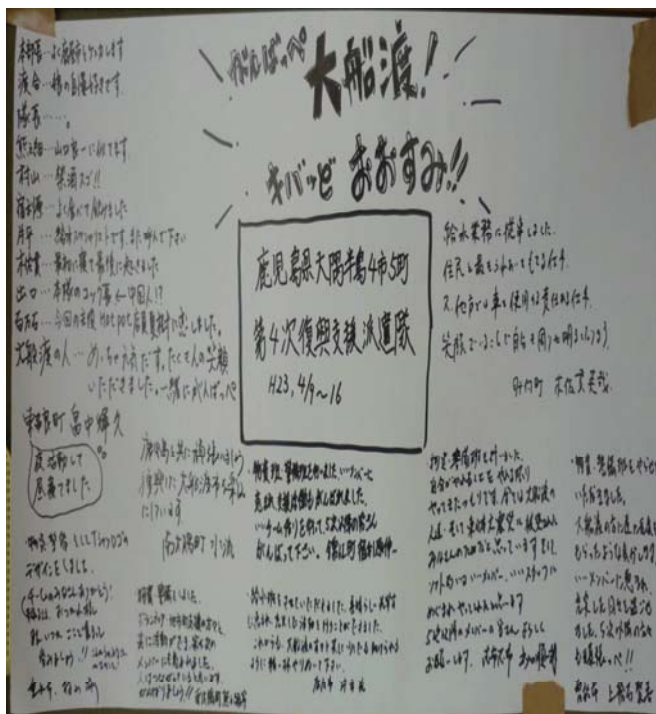
それでは長くなりましたが今回、災害支援の機会を与えてくださった関係各位の方々に感謝申し上げますとともに被災地の1日も早い復興を願って帰庁の報告といたします。

平成23年9月5日

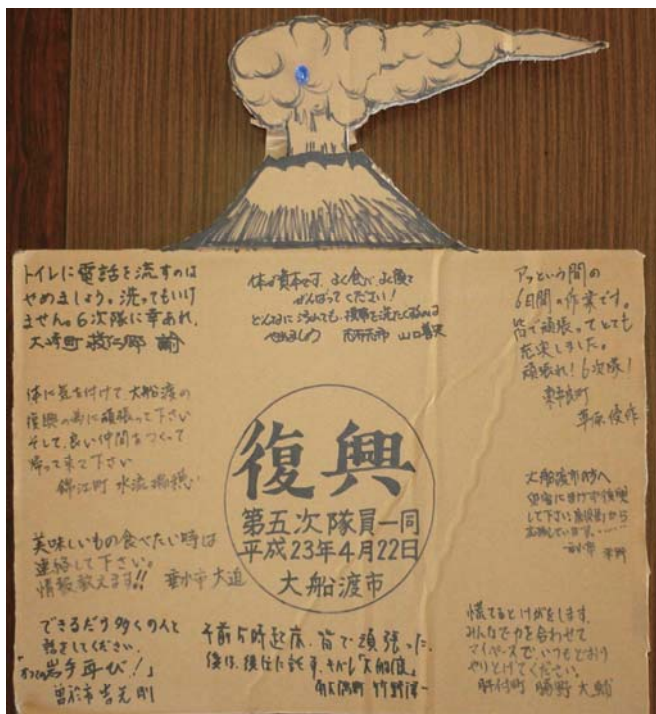


旅の無事と再会を祈念した黄色いハンカチで見送っていただきました

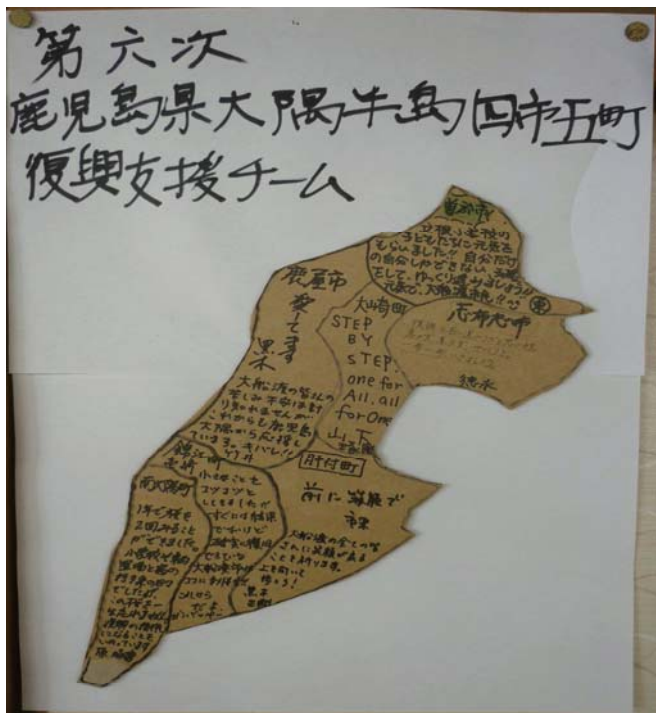
○ 派遣隊員寄せ書き（派遣隊員が猪川地区公民館に残してきた寄せ書き）



第4次隊



第5次隊



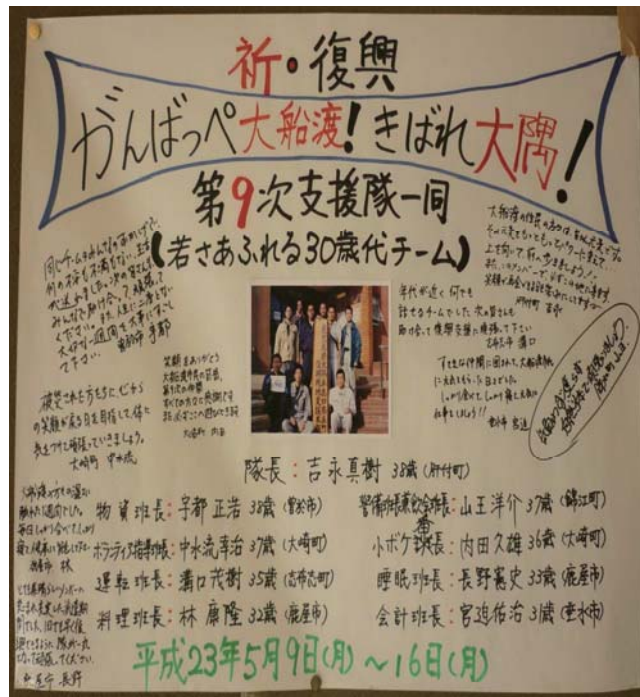
第6次隊



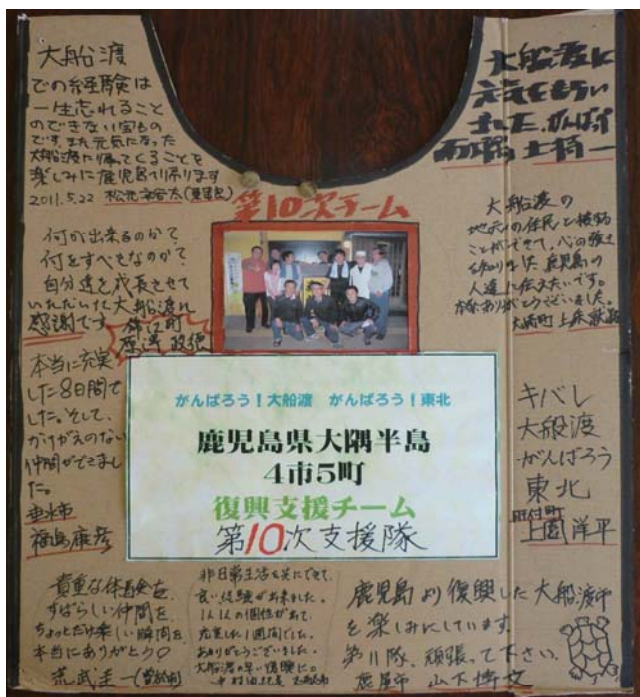
第7次隊



第8次隊



第9次隊



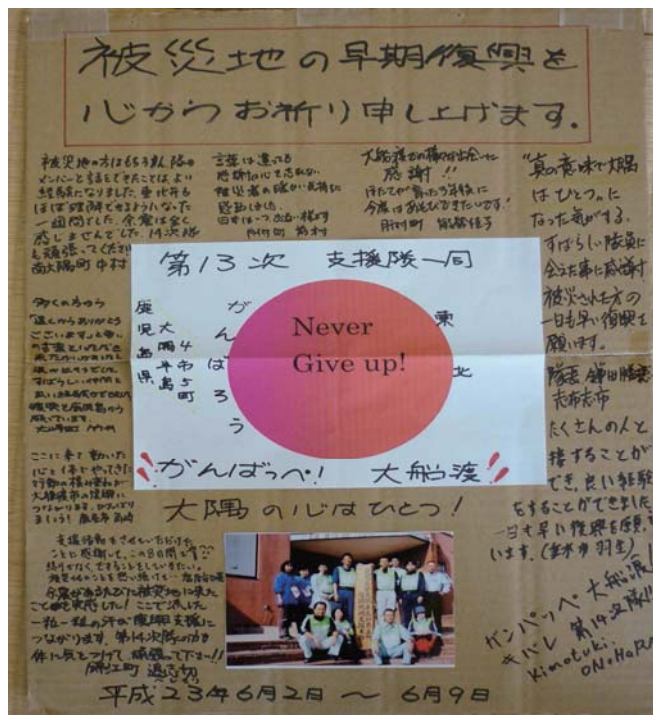
第10次隊



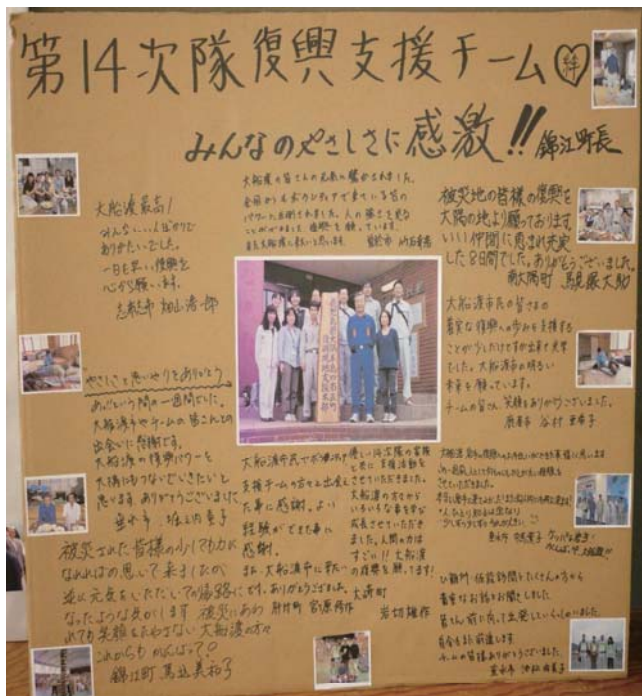
第11次隊



第12次隊



第13次隊



第14次隊



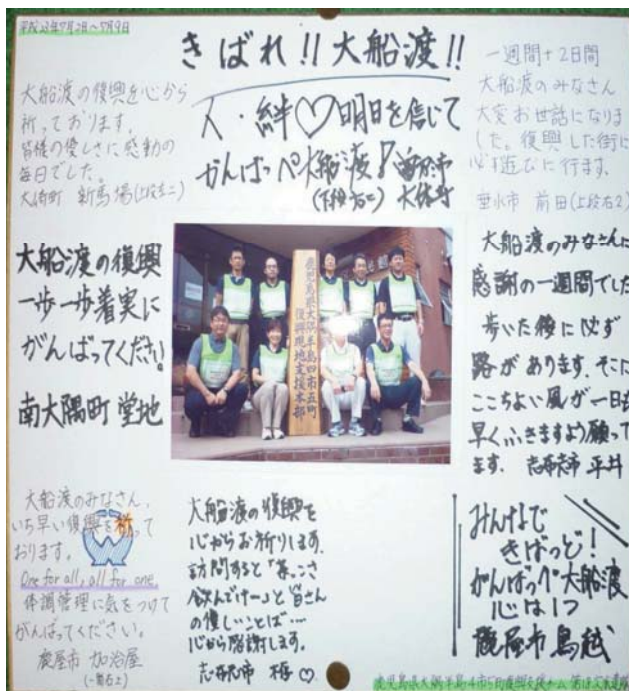
第15次隊



第16次隊



第17次隊



第18次隊



第19次隊



第24次隊



第25次隊



第26次隊

～派遣隊員の手記から～

「災害当初は水が全くなく、また市役所の対応もほとんど出来ない状況の中で、一番早く水を持ってきてくれたのが、鹿児島県の肝付町だったよ。…その時には、涙が出た。…この世に神様は居ると信じた。…わざわざ日本の南から来てくださったこと…一生忘れないよ。本当に本当にありがとう。本当に本当にごめんなさいね。…本当に本当にご苦労様ね…」 その言葉を聞いたとき、自分の目には涙が溢れたが、それをごまかすために、満面の笑みで対応しました。

がれきのごとく積まれた被災車体の中から、自分の車や行方不明の家族の車を必死で探される姿には涙を誘われた。また、ところどころにスプレーで×印が着いている車両には遺体があった印ということで、特にその中にチャイルドシートがあれば、亡くなったのは子供だったのかと想像してしまい、胸が痛くなり思わずシートをなでたこともあった。

或る日、公用車のブレーキランプが切れていたため、修理工場に持ち込むと、鹿児島から災害派遣で来ていることに大変感激され、待っている間、おにぎりやゆで卵、お菓子や飲み物までご馳走になり、修理代金まで「あんたらからは貰えない。私らは食べるだけの仕事とお金はあるから、気持ちだけ本当にありがとう。」と、取ってもらえませんでした。私はこの時、「ありがとう。」という言葉のあり難さ、大切さを心から感じました。

銀河連邦共和国友好都市「岩手県大船渡市」への
東日本大震災復興支援活動の記録

平成24年3月発行

発行人 肝付町長 永野 和行
事務局 肝付町役場 総務課

〒893-1207

鹿児島県肝属郡肝付町新富98 肝付町役場

電話 0994-65-2511 FAX 0994-65-2521

ホームページ <http://www.kimotsuki-town.jp/>